女學雜誌

明治三十一年八月二十四日發兌

第百六十三號

東京園之社

女鑑第百六拾三號

目録

轉が母



亭主は男なり女房は女なり

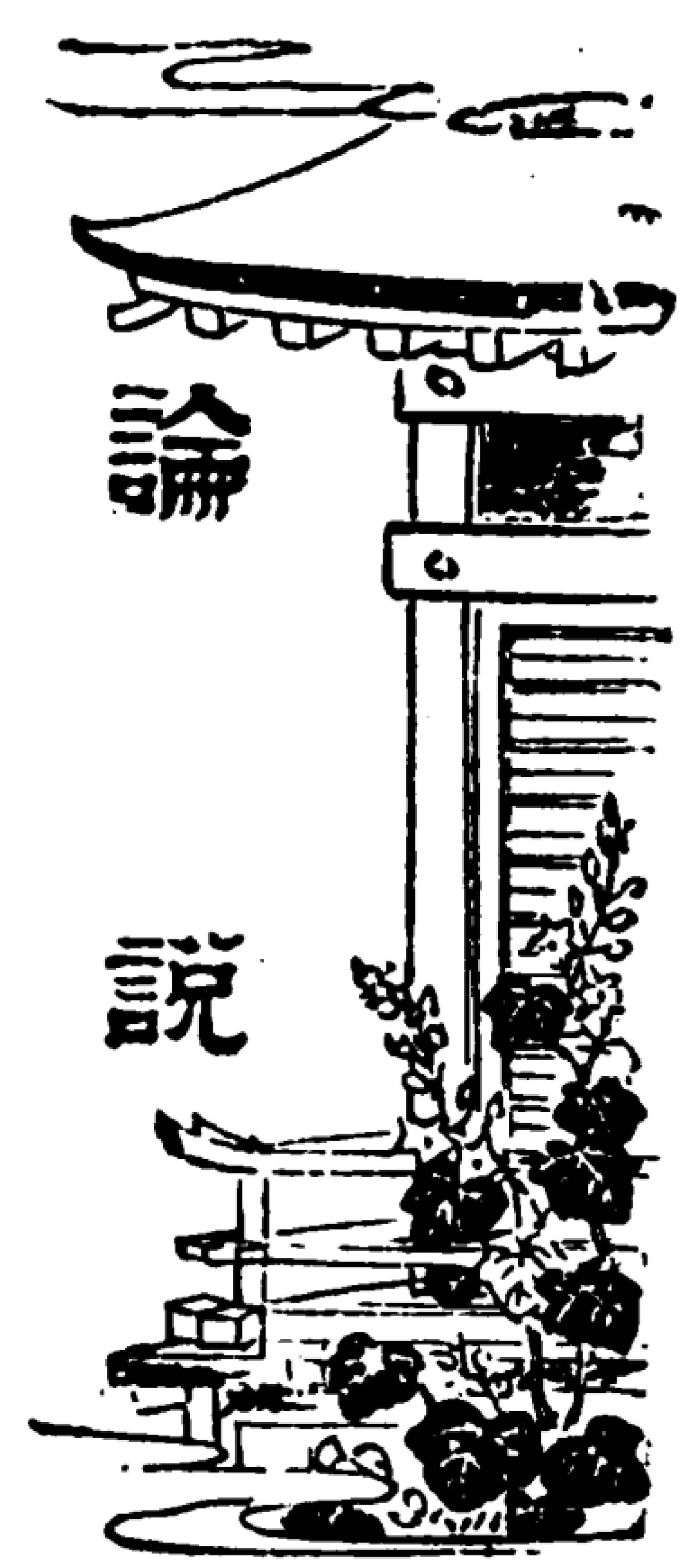
「亭主は男なり、女房は女なり」とは、むかし或人のよみたる川柳にて、亭主は夫、夫は男、女房は妻、妻は女とは東西をわきまへし程のものは、小兒とて知らざるはなく、いと分りきりたる言、つまらぬ事のやう聞ゆれど、これ中々に感深き詠にて、形体の男女は知れど、此の言の男女を實際わきまへたる者は少なからざるも、之を實際に行ふ者は少きぞかし。亭主は男、男なり、男にありながら、或はあまりに家内のことをのみ執り、家計の道にのみ區々の心を持ちて、薪の燃きやう、味噌のこしやうなどにまで、心を注ぎ、目をくばるあれば、糟糠などのわざは人の業として、外交境外に奔走し、さながら亭主を尻にしくと云へば、下等の言なれど、夫に先き立ちて事を執る女房少なからず、これ皆この川柳を實際分きまへぬにて、亭主は女

やら、女房は男やら、心に至りては分かぬぞ誠にうたてきや。性はもとおのづからなれど、道徳もと世を渡るの便宜のみ、天帝がつくられしわざにも法にもあらず、たゞ人が人の世に處し、互みに便宜に行かむとておのづから行はれし法にて、所謂海を渡る船の檝を取り、各衝突のなきやうにと、互みに設けたる如きのものにて、神のつくらせ給ふものにも天帝の立て給ひたる法則にもあらず。かく天帝の作くりしものにも神様の作くりしものにもあらずと云へば、愚かなるものは、天帝のつくりしものならねば何も尊からずとせんずるものもあらむか、眞檝も人のつくりしものやくなきものとて、打ち捨てなば、忽ち衝突、轉覆、身も微塵にくだきぬべし。道徳は互みに人が人のためつくりしものなればこそ人の世に處するに必用なるなれ。そが道徳の中に、男女別ありとありて、男は先き立ち、女は從ふものとせり。これもろこしより來れる教へながら、我國上古いざなぎいざなみの男女の神甫めて國をつくらせ給へる折、あなにやしゑ男をと、女より物云ひそめ、道に違うて國を産みそこねたまひたるためしもあれば、我國にてももとより女の從

ふを道とす。かく女の男に順ふを常とするは則ち世の道、所謂人の世に處するの便宜にして、女の男よりも卑しと云ふにはなく、たゞ女が言行はよわきに似て實はつよく、蜂が陽に針を持ち人をさすよりは蠅が陰に糞ひりたきて、大なる人をころすのためしに似たるもあり。故にむかし人、女を恐れ、女を卑きものとし、たゞ愼しみ、たゞ從はしめ、互みに身を安くせしのみ。又男を陽にかたどり、女を陰にかたどりしも、櫻は櫻、柳は柳と其性を別し如く、男は陽、陽にしてたゞ熱し、たゞかゞやくを、女は陰、陰にして谷あり、清水あり、すゞしからしめ、すまさしめ、また危からしむ。陽智陰才おのづから性を異にするを誰とはなく云ひ、誰とはなく聞き、聞きて、之を理とし、遂に格言となりしにて、古人が定言さくらの櫻たる限りは決してあやまりならず、而して、男の性にあひたる事、女の性に叶ひたる事、互みに定めて、自らとりたること、なは犬の門を守る、猫の鼠を捕る、馬のごとく人を乘せて走り、牛の遲く重き荷を負ふ、皆おのづからの性を行ひ、職をとるごとし。されば、男は云はず、女の性をたもちたるものは、たゞ古より女が執りたる職をと

り、夫に從がひ、舅姑につかへ、よく內事を治め、家計を執り、兒女を養育し、裁ち縫ひをなし、食物を調し、舅姑をして飢ゑしめず、夫をして凍へしめず、子をして泣かしめず、陰德を以て夫を助けて、賢たらしめ、子を敎へて、英雄ならしめ、女房は女ながらに世を裨益せしめよ。これ女子の世に盡くすべき大道也。

夫婦の道は別を主とす。人に男女あれど夫婦あり。されども男女の間に別といふ教なきときは、必ず亂る、こと禽獸に異ならず。故に上下內外を分つこと。天地の如く。するは自然の天道なれど、夫婦の間にも別ありて敬を失はず。この道を推て。凡男女の別を正くして。內外の分ちを嚴にする事。聖賢の書に詳なれど。今委く論ずるにも及はず。是又天地の初より自然に備りたる道なれど、上古陰陽二神ましませしとき。陰神歌の詞を陽神に先だちて唱給ひしを固く戒めて。陽神先づ唱へ給へり。天地の開し初より。陰陽の義を正しくし給へるは。夫婦別あるの道の由て起る所なり。(會澤　安)



習慣の愼しむべきこと

岸田松二郎

「道は近きにあり、而して之を遠きに求む」とは千古の格言なり。世に道徳の學あり、修身の學ある所以は、其目的啻に人道の攻究を以て滿足せんとの謂に非ずして、行爲の正しき軌道に依らしめんとの意に外ならず。されば、孜々として修身、倫理の道を講じて、如何ほど高尙幽遠の理を辨へたればとて、俄かに其人の尊むべきを見ず。

「未だ學ばずといふと雖ども、予は之を學びたりといはん」とて、言論理窟の、實行に若かざることを誡告せしは孔子なり。「ソクラテス」も亦「知て行はざるは未だ眞に知らざるなり」といへり。道を究むるは、眞に之を行はんとするの資本なること、東西聖哲の言、其符を合する如くなれば、知行一致は、蓋、古今東西に通じて一歸なるべし。

然るに、學問の道益〻多岐に分れ、理を究め知を致すことの益〻切にして、凡百の事物皆理窟責めとなるに隨ひ、益〻行爲の繁くなりゆきて、愈〻言行相距ることの遠きに趣くは何故

ぞや。世人口を開けば世は澆季なりと歎き、或は德義道理を呶々して相互に瘁勵し、修身道德の理窟は益〻高遠に趨き、法網益〻密に渉れるに隨ひ、理を以て巧に之を逃るゝ者多しとの歎聲を聞くは何故ぞや。國家は德義の興廢によりて盛衰し、人は德行の如何によりて榮辱をなすものなるに、爾かく言行相距るに至るは、國家民人のため深く寒心せざるべけんや。

抑〻高き山に登るに隨ひ、谿谷の卑きは益〻暗黑になりゆくものなれど、其眼界の濶大にして遠きに達すれども、却てて脚下の岩石に躓くものなり。人の眼を高遠に馳せて、倫理道德の薀奥を究めんとするときは、最も重ずべき彜倫の實踐は、益〻膚淺卑近に視ねて、區々たる細節に拘泥すとの嘲りを招くに至るのみならず、其身自身も亦迂遠繁勞を厭ひて、知らず識らず放言壯言を快とするの僻習を生ずるに至る、是所謂道は近きにあるにも拘はらず、敢て之を遠きに求むるものならずや。

讀者は、卑近明瞭なる本題を視て、恐らくは顧眄を惜まるゝなるべしと雖も、徒に冷眼を以て之を迎へず、嗤嘲を以て之を沒了せられず、將さに睡眼を刮りて、聊か愚衷の存する所を知られんことを切望して止まざるなり。

性相近し、習相遠し、とは、殆ど丁字なき野人だも猶且之を口にするほど普く行き渡れ

る格言なれども、習慣の愼しむべく又其重ずべきを知りつゝも、僻習を增長せしむること甚だ多し。然れども、是只其微を愼しみ、其細を顧みて、日月の久しきを積まば、恐らくは之を實にすることを得べし。人は誰も、自己の行を惡しと思ふもの尠くして、又其僻習の生ずることを知ることも亦甚だ少しとす。蓋、習慣は一時に成るものにあらずして、夥多の歲月に、其果を成せるものなれば、既に其病の膏肓に入りたる後に及びて、之を暫時の間に剪滅せんこと、決して容易の事にあらず、多くは全く痼疾となりて終生其身を去らざるに至る。嘗て某感化院管理者の言を聞きしに父母長者の監督を脱して身を該院に投ずるものは、其改悛の功を奏することと甚だ難く、十數年の久しきを積みて、全く普通の人に歸りたるもの、僅かに全院四分に過ぎずと。又一四獄監の話によれば、一旦身を囚人の中に入るれば、其身の苦役を蒙れる中、猶其罪科の資料を得るとも、前非を懺悔して本心に立戻るもの甚だ稀なりと、是等罪囚不良の徒も、初より不善汚惡にあらざりしなるべしと雖も、一旦の惡習次第に增長して、遂に全く不治の人となりたるに外ならず。されば、假令、罪惡滔天の人とならざるの豫防は兎も角、其僻習を除去して、純全無垢の人とならんことを希ふより、學を修め業を習ふなり。

然るに、近來女子の教を說くもの、稍もすれば語りて曰く、現今の女學生は、其智識こ

そ舊來の婦人に優れ、其行爲と心術とは、却て及ばざること甚だ遠し。女學生としいへど、理論滔々として衆人を睥睨し、昂肩颯々として街衢を濶歩し、男子と相距る遠からず、其心匠も亦鹵莽粗雜にして家事に嫻はず、其振舞は驕傲惰慢にして節制を知らず、所詮家政の重任を托し、敎育の重荷を負はしむるに足らずと。此言固より女子社會の全斑を評するの酷に過ぐるものなれども、退て其身を舊來の婦人に比して長短得失を思考し、萬全圓滿の人とならんことを心掛けざるべからず。

今日の所謂學校敎育を受けざる婦人は、躾方を專らとして、諸種の藝業は第二位に置かれたれど、既に讀書算の一斑を學びたる後は、終日裁縫の修業と、家事向の手傳に從事し、其間又父母長者の奉養より、洒掃應對の末に至るまで、皆其長上の命に從ひて之を務め、假令巳が心に適はざることありとも、聊かも理窟がましきことを許さず。其人に接するや温言愉色にして、其容は婉娩を主とし、稠人廣坐に交はるを憚り、或は止むを得ざることある時は、故老先輩に對して遜順を旨とし、巳の知ることあるも猥りに口外することなく、專ら緘默和柔を貴び、坐作進退皆其輕忽を戒め、苟且にも犯すべからざらしむ。此他、猶、行儀見習と稱して嚴重なる家室に仕ふるものあり、幼時より斯かる躾方を以て、知らず識らずの間に陶冶せらるゝが故に、婦女自身も格別の苦痛を覺えずし

て、女子は斯くすべきものなりとの簡單なる敎への下に、諸他の箴誡を實踐せしめられ、久しき星霜の間に、順良温雅の德を啓培し、嫁しての後は、婚家の家風に制せられて、寸毫も自家の意を立つるを得ざるを以て、遂には其習性となり、却て天然の美德を發揚するなり。若夫、粗暴跳拗にして、父母長者の訓誡に從はざれば、全社會より擯斥せられて、終生の幸福を失ひ、其薄命に終るを以て、父母たるものは特に意を此に致せしなり。其師に對するや、又猶父母の如くし、更に其命に背くを得ず。況や師の人となりを評し、或は其敎への如何を父母に告げて去就を決するが如き行爲は、露ばかりも許されざれば、師は其親しみ父母の如くにして、其威嚴は君主の如くなりき。而して其學科の如きも、種類の少きのみならず、統一的の階級も、現今の如くに劃然たらざりしが故に、必らずしも年度を定めて、進級卒業等の規定もこれなく、又每時に學科の轉換今日の如く頻繁ならざれば、家事手傳等の事故により、遲刻早退等も自由にして、必らずしも卒業進級等のために心を勞することなかりしがため、父兄と本人との心掛にのみ任せしなり。されば、學業進歩の點に於ては、到底現時の敎育と比肩すべくもあらずと雖も、父母と師弟の交情との甚だ親密にして、家事と躾方との連絡は寔に緊密なりしなり。

然るに、今の敎育制度は、規模井然として系統的に敎授せられ、統一的に進歩するを目

的とするが故に、日々の時間も、嚴然として己の任意にするを得ず。又其學科復習のために心を勞せざれば、他人と幷馳して階級を進むるを得ざるがため、終日營々として心を學事に勞し、父母たるものも亦其子女の學業に心を用ゐ、敢て家事に働かしむることをなさず。此の如きもの滿六年に始まりて、爾後八年間の勤學を積み、初等敎育の一斑を卒り、更に以上の學を修めんとすれば、益〻心を勉學の一方に傾けざるべからざるが故に、益〻家事の實習より遠ざからざるを得ず、更に進で高等の學に就けば、猶愈〻家政に疎遠とならざるを得ざるなり。

所謂家事に遠ざかるの始めは、幼稚の頃より室家にありて、洒掃の些事より始め、衣裳裍褥の始末、頭髪の修理、器皿の保存、弟妹の世話より、漸く進で炊爨の事に移り、衣服の洗濯、裁縫の初歩に進むべきは、蓋し普通の事なるべきに、課業時間の常に切迫するがため、先づ洒掃の事を他人に托して盥嗽を了へ、食膳既に了るや否や、己の修學用具を整へて家を出づるを多しとす。時としては、衣衾の取片付をもなすに暇あらずして、吐哺登校せざるを得ざることもあるべし。母姉たるものは、學習の重きを荷へるがため此等の事を寛假して、成るべく其妨げをなさゞらんとし、敢て其怠りを責めざるより、次第に立ち働らきを厭ふの習慣を養ひて、之がために成し得べき場合に接するも、口を學

習の妨害に藉りて事を免かれ、既に中饋を助け得べきの時至るも、尚且學習の事を以て勞を他人に讓らざるを得ず、既に衣服頭髪の始末を躬らし得らるゝの期至るも、猶又復習筆寫の事ありて勞を之に執れど、輙ち修業の故障忽に至るがために、慈け深き母たるものは、事々物々之を慮りて、子女自身が執るべきの勞に代り、聊かも心を他事に移さゞらしめんとす。されど、歳月の久しきを積みて、知らず識らず放任の習僻を成し、遇ゝ課業休暇の日に當りては、衣服の補綴に終日静座し、或は浣濯修理に消過せんとするよりも、寧ろ書齋に起臥して新聞雜誌を友とするか、左なくも、友人の許に音づれて談話散策を試むるの快味を覺え、總べて沈静默座に細事を執るは頗る懶く思はれて、可惜休暇を徒費するの感なしとせざるべし。是幼時より椅脚に凭れるの習慣となれるより、兎角に跪座することを難ずるも、敢て謂れなきにあらず。其行歩に於けるも、課業時間に制せられ、往復の際には常に急足にせざる可らず、容儀の如何を顧みて除歩すべき餘地なきがため、時として活歩男子に讓らざることあり、此習慣の久しきを積みては、自ら聒々たる履聲に肩風を起すに至るべし。故らに軒昂活潑を飾ふにもあらざるべし。(稀には眼鏡手挺を携へ、銀鎖燦爛胸間に閃くものあり) 其言語の如きも、課業時間中、教師の説明講話に當りて漢語を使用し、學科の問に對して又之を用ゐるより、耳に聽き、口

に唱へ、目に視るより、終には浸潤慣熟して、俗話にまで漢語を交ゆるに至るなるべし。故らに學者を裝はんとにもあらざるべし。其談柄の如きも、世間普通の交際に遠ざかれるより、世辭俗話の種類に乏しく、所謂學校談話の種類多きがため、通俗の婦人に談話交際するも興味を覺えざるならん。されば、何時となく學友に親しみて、郷閭の人に遠ざかり、益々俗事を疎外するに至るべし。其學ぶ所は、父母たるべき道より、兄弟、夫婦、朋友、慈善、公益、博愛等の事より、國家の盛衰、人事の變遷、風俗の汚隆、貿易交通等に至り、天地自然の現象より、動植物の狀態觀察等に至るまで、悉く其何故なるを解析審甄するの習慣をなせるがため、假令己躬らは之をなし得るの經驗なくとも理想頗る發達して、何事に就きても、其何故なるかといへる疑問を起し、先づ其理由を尋ねんとの念慮を生ずるがため、其弊や、終には其父母の命、師長の令にも、兎角其理由を說かざれば滿足せざるの習慣を生じ、其師に對するや、朝には甲の教師に就き、夕には乙の人に學ぶがため、甲乙兩者の人となりも自らに辨別せらるゝを以て、無意的に師の人物を評するに至るも亦止むを得ざるなり。學友相互に理非を考へ、古人の言行より、東西人種の萬般に渉りて、其概畧を知悉するが故に、其眼は益々高遠に趣きて、他人の行爲を視るの明は益々鋭くなれども、自己を知るの明は愈々暗く、所謂燈臺下暗しの人となるの弊習

をなすに至れるなり。
今の教育を受けたるものにして、上來述べたる習慣の寔に存するものとせば、舊來の婦人が養成せられたる習慣と果して幾何の逕庭あるかを思ひて、痛く己を省みざるべからず。之を要するに、以上の習慣全く除去し得られざる時は、何事も實事に疎くして、理想にのみ走るがため、洒掃應對より、飲食、衣服、器皿の事など、總べてに就きて、只だ懶しとのみ思ふ事の先立ちて、成るべく之を免れんとするより、家にありて父母長者の命常に己の心に愜はず、之がため怏々として、時に或は反抗の言動を漏らし、其剛愎執拗を責められ、猶且つ之を悛めずして、却て其不平を喃々するに至り、又其言語進退の荒々しくして世辭に拙く、其言ふ所は理あるが如くなれども、事を執りては殆ど不熟の事のみ多く、其言の半をだに行ふ能はず、家政の學を修めて室内の整頓すべきことを知れども、己の室には書冊四隅に狼籍し、机案は故紙と塵芥に埋もれ、其戸棚には衣衾相戰ひ、枕褥相格して、蜘糸又之を綴り、食物の調理を語れども、飯を炊ぐの法を過り、菜を煮るの鹽梅を知らず、張物洗濯の法を誤りて、無學の下婢に嘲られ、猶且つ卑事に多能なるを賤しむが如きに至りては、其學果して何くにか用ゐん。新聞雜誌の閲讀に耽りて父母の召命に唯諾を怠り、惰眠に長日を徒過して弟妹の世話を厭ひ、過々長上の

戒諭に逢ふて、辨舌滔々其非を文り、却て己の素行を誇揚するに至るが如きは、其最も愧つべきことなり。

凡そ這般の習慣も、決して旦夕に成りたるものにあらざれど、嫁して後、舅姑、良夫に事へて、俄かに之を悛むること能はさるを以て、常に躬らを省みて、禍根を嫩芽の中に絕たざるべからず。

斯の如く、千百知悉せることを數へ來りて云爾せむ、或は些末の事にして省察するの價なしとし、或は平素の反省を欠ぐとも、實行すべき場合に臨みて之を行ふを得む足れりとなすものもあるべしと雖も、時に臨みて之を改めんとは、即ち來年を俟たんとするの類にして、益世間人士の爪彈を免れざる所以なり。

割烹と禮節と（二）

石井泰次郎

第一編　小笠原流といふ禮節を論ず（續）

○非正統禮節家

方今の禮節敎師、多くは、小笠原を以て其流名に冠らせ、又小笠原流を基とせる普通禮式或は小笠原流正統等と稱して自らも其誤れるを知らずして傳へ來れるもの蓋し多數を占

めたり。
是等の禮節は、正統にあらざる禮節の傳授を守れる物にして、方今世上に用うべからざるは既に前に云へるが如し、然るを、今や正統なる禮節家の傳を繼續せる敎師の一二に止まりて、廣く其傳を講習する者なきより、自然誤傳の敎を受くるに至れるは、返す〲も感慨に堪ざる所なり。

次に謬傳誤解せる非正統の諸禮家といふ者の傳統を畧記して禮節講習者の參考に供せん其傳統にいはく、

師曰、諸禮古實躾と名付る事。諸はもろもろ色々也。禮は天地萬物日月の回如レ不レ違、陰陽の道理を辨而作法を取扱を云。古は古古と云事也。實は實也。實也。たとへば、菓の實の如し、實なくむいかでみのる事を得ん、其作法禮厚く信實に正鋪を云也。躾は其業をなす身形合好の宜く、失禮不レ成樣になすを云。劍術のれもて切組の如し。極意に至ては、禮と實とを全して、忠孝は更也、下輩たりとも、そのほどを辨へ、禮を思ひ、實を思て交へし。親義別序信、片時も忘ては古實取扱本意に不レ叶可ニ心得一。

亦曰、凡弓馬の古實は、貞宗卿より代々家法となる、武家の諸禮は修理大夫長秀卿依ニ將軍義滿公の命ニ禮式を定給ふ、及び今川左京大夫氏賴、伊勢武藏守滿忠參ニ考ス諸家の禮

法ニ自レ此以來小笠原家爲ニ弓馬諸禮の祖一。
かくその始に記したる小笠原家系圖といへる書あり。其内に、

大膳太夫長時

○氏隆流

小笠原宮内大輔氏隆

岩室ト叶泰廣

中村集人入道盛世

中村隼人盛名

根本治左衞門正次

○上泉流

大膳太夫長時

上泉武藏守信綱

常陸介秀胤

大戸民部少輔直光

長野出羽守業親

一場平左衛門正長

○休庵流

右近太夫貞歴

小笠原出雲守頼定入道休庵

同若狭守長政

折野彌次右衛門頼廣

加藤主計頭清正

木村八太夫勝家

中村藤兵衛政重

傳曰休庵於京都久我殿笹船と云强馬を乘り得し人也

○今川流

大膳太夫長時

今川氏直

一宮隨巴齋宗是

武藤松月齋延子

青木五左衛門高頼

○畑流

大膳太夫長時

畑五郎左衛門與實

西田角左衛門正辰

宇多勘兵衛正次

河内茂左衛門慶方

○星野流

大膳太夫長時

星野味庵

○榊原流

大膳太夫長時

小笠原丹齋直經

榊原忠右衛門忠卿

○小池流

大膳太夫長時

小池甚之亟貞成

逸見小左衛門直治

鶴見善右衛門番宥

○水島流

大太大夫長時

小池甚之丞貞成

齋藤三郎左衛門久也

水島傳左衛門元也

相木小右衛門政恒

傳曰元也は將軍綱吉公の若君徳松君の御白髮於田堀備中守宅奉ㇾ調ㇾ之

かく記したるは、弓馬禮式の傳へを、諸禮躾方の傳へと同一に思ひ誤れる者の記しつる、所なり。かゝる系圖を傳へ、なほ、

水島卜也之成

伊藤甚右衛門幸氏

同　隼太　幸充
同　將曹　幸督
同　隼太　幸辰

かゝる系圖を傳へたるは正統に非ざる禮節家にして、實に正統を傳へたる弓馬の師範なりしなり。

中にも、水島之成、伊藤幸氏等が所作せる禮節諸式の傳授、第一に世に用ゐられたりし以來、其門弟等、各自に正しからぬ事を所作して、故實の如く附會して敎授せしより、諸大名にも用ゐらるゝに至り、なほ今世迄其惡風を遺せるは、甚口をしき事ならずや。

さて右に擧たる系圖中に諸禮と記したるは、弓馬を元として、座敷立振舞の禮、歌、連歌の禮、書札の禮、鞠の禮、庖丁方の禮、鷹の禮、茶の禮、香の禮、其外諸道の禮を敎ふるとの意を以て書れたるなり。こは皆あらぬ作事を集めて、其家々々の禮を、一人して端々を端々ともなさず、皆知り得たる如く、家傳々々と稱して敎へたりしを、古來の小笠原家の傳の如くなさん爲に、此系圖にも、諸禮の二字を何げなく書き加へたるなり。方今禮節を敎授する者、此流をくめる者は、なほ諸禮と稱して、敎授し、又禮節書を著す者も、此流によれる者は、なほ、座敷立振舞の禮に止まらずして、種々樣々の禮法を

擧ぐ。禮節家正統なる伊勢貞丈翁さへ、我伊勢の家にては、室町將軍殿中の武家座敷立ふるまひの禮、元服、婚禮等の祝の禮などより外は知らず。此外の事人に指南すべき事は無之。其外の禮は、各々其家々に知る事也。我家には知らず。たとへ知りたりとも、人の家の事なり、我家にて指南すべきにあらずといはれたり。

如斯非正統の流を汲む禮法は、決して之を方今に傳ふべからざるなり。いかにとなれば、是近世の謬傳誤解より成立せる禮式なればなり。陰陽五行説、牽強附會説より組織せる禮式なればなり。本邦古來の美風を覆ひたる眞心の禮式ならざればなり。近代正統禮節家の傳授の禮式ならざればなり、實用的を旨とせる現今の風習に適する禮式ならざればなり。

然らば、何につきて方今の禮節敎授の基本は立つべきかといはゞ、實に方今用うべき禮節の基本は、現今の風習に伴ふべき、實用的の禮節によりて立たざるべからず實用的の禮節とは何ぞ、本邦古來の禮節をいふなり。又禮節正統伊勢家傳の禮節をいふなり。禮節に付て第一に治むべき膳夫家の敎授する所の禮節をいふなり。之を應用し、之を活用するを即、實用的の禮節とはいふなり。

女學の雜誌に小笠原流を禮節家として擧たる一例を記さん、

○諸禮師の起原

明治十七年六月十五日出版
女學新誌第壹號(女學之部)

今の世に諸禮と稱へて、婚禮の禮式よりして熨斗の折かたに至る迄、進退其の度に中り、寸法故實に違はざるを教ふる師あり、概して之を小笠原流といふ。此は足利氏の世に伊勢貞宗、小笠原長秀の兩氏、共に幕府の禮法を掌たるがゆゑ、此家々を禮家と稱へしより起れり。

但し寛永系圖に、小笠原信濃守貞宗(月山と號す　後醍醐天皇の朝の人)唐僧清拙といふ者と議して諸禮を定たる由見えたれど、此は小笠原自家の禮法にして、一般に行はれし物にはあらざるべし。

天正文祿の頃、小笠原貞慶、家傳の書を小池甚之丞貞成に傳ふ、此道に功勞あるに依て也。其門弟に寄藤三郎左衞門久也あり、久也の門に水島傳左衞門元成を出す後剃髮して卜也と改む)天和元年十一月徳川綱吉將軍の若君徳松君髮置の式あり、堀田對馬守正英白髮を獻上せる時、水島に命じ故實に依て製作したり。是より其名高くなりて、門弟甚多く、其流儀世に弘れり。其門人ども私意を以て故實とし、傳書に附添へ秘傳口訣と云ひ做して世に弘めたるは極めて拙陋の事多かりき。

かく誌して、なほ水島流の外に、禮節家なきが如く、小笠原流は小笠原一家の禮節なるべしと云ひながら、小笠原家の弓馬の家なるよしを知らざるが如し。

禮節書に、小笠原、伊勢何々と第一に小笠原家を禮節家として擧たる一例を記さん、

日本女禮記　明治廿九年著　凡例に

一本書載する所は單に小笠原伊勢等の古法のみによらず諸流を折衷して云々
一本書は主として(中略)小笠原氏の禮法を學び由りて得たる小笠原大膳太夫長時同右近太夫貞慶の口傳書數冊を家に秘藏するものに據り、且つ數多專門家に就て聞き又傍ら古今女禮式(下略)

日本女禮式大全 明治三十年著 凡例に

男女諸禮式大全 明治廿九年著 第一章總論

(上略)古來小笠原流と云ひ伊勢流と云ひて各々禮に別あるが如く思ひ居はるれども決して大差あるものにあらず唯其禮の確乎たるより後世其を手本となし斯は名けしものにて何れが是何れが非と云ふ譯には決してあらざるなり、されば今本書を論ずるに際し其標準を小笠原流の禮式に據り云々

日本諸禮式 明治三十年 禮法の起源

(上略)朝廷に行はれし禮式も古禮にして和禮の根源なり歷代相繼で失はず(中略)漸く下々の禮式に古法を去りて武家の作法を用うる原因を爲せるのみ是即小笠原流禮式の濫觴なり云々

かく誌して、今もなほ小笠原家を禮節家として擧げたり。

二百年前より三十年前に渡りて、好事者の手になれる書を、其儘に原書となし、又引用して著したるは、

女のしつけ 明治十三年二月發兌石川縣

日本の裁縫と女禮　明治廿五年十月出版大阪市
新撰諸禮式　百人一首詳解附錄　明治廿六年十一月發行大阪市
小笠原御家流禮式圖解　明治二十七年二月出版大阪市
和洋禮式　明治廿八年五月發行東京市
小笠原流男女諸禮式大全　明治廿九年九月發行東京市
日本女禮式　明治二十九年十二月發行大阪市
新撰挿繪日本諸禮式　明治三十年二月發行大阪市
日本女禮式大全　明治三十年八月發行東京市
普通禮式　明治三十年十二月發行東京市

女德のしをり（十一）

三輪田眞佐子

第十智　中庸に、智仁勇三者天下之達德也。とあり。元來仁こそ眞の德なれども、智なきものは、その精神惡しからざるに、往々その行爲惡しきに至ることあり。むかし、宋の襄公諸侯に覇たらむやと思ひて楚と戰ひけるとき、その未だ陣せざるに乘じて擊たんと請ふものありけるに、公曰ひけらく、君子は人を阨に困すべからずとて、反りて楚よ

り敗られけれど、以來宋襄の仁とて笑柄とはなりぬ。もし眞の仁ならんには、始より戰はざるに若かず。既に理に基き戰ふ以上は、勝を謀るも仁たるを妨げず、兎に角智なきものは、眞の仁と不仁とを定むること難からん。

女子は智なきがために、仁を行はんとて愚を爲すもの少からず。戒むべきことにこそ。亦支那史にあることながら、實例を擧げんに、むかし男と橋下に會する約を結びける女ありけるが、女先づ至りて待ちけるに、たま〳〵洪水來りて身を漂しけるに、その約を違へじとて、遂に溺れけりとかや。その志いと賞すべけれど、男は、決して斯かる最后を遂げよかしとて約せしにあらざれど、後世寧ろ愚の評は免れざるべし。こを以て、仁のみを思ひて、智を具へざるものは、愚となるのみかは、不仁の結果さへ釀することあるべし。誠に智能く仁を助くるこそ望ましけれ。

孟子曰ひけらく、是非之心智之端也と。苟くも仁を施さんとならむ、必ず是非を辨へざるべからず。若し是非を知らざらんか、その仁なりと思ふことも、反りて仁ならざるもあるべし。孔子曰ひけらく、智者不惑と。信に智なきものは惑ひ易し。故に、義を踐み操を行ふにも、智なきものは中途にて廢する患あり。されど、道理上智の缺くべからざるは、孔孟既に認めけり。

古より、哲婦は城を傾くとの戒あるは、全く智のみを恃みて徳なきがためならん。況して、智のみによりて事を成さんとするも能はざるべし。論語に、智及之仁不能守之雖得之必失之。とあるは、實に金言なり。凡そ女子は徳だにあらんには、身は定まり分を盡すに近からんも、唯智なき女子は愚に流れ、その善と信ずるもの必ずしも善ならず、その理と思ふこと必ずしも理ならざる恐あるを知れぞ、かく智を言ふなり。されど、智のみを尊ぶ女子は、悉く終を能せし例なきは、史に徴して明なり。故に、信の智者は、必ず仁を怠らざるべし。亦論語に、里仁爲美擇不居仁焉得知。とあるはその謂乎。

第十一勇　女子は優にやさしく、とこなつのなつかしき徳こそあらまほしけれ。されど、女徳を言ふにつけ勇をものするは、如何はしと怪むものあらんも、れのれは、女子にも勇は肝要なりと信じぬ。

茲に言ふ勇とは、蠻勇の意にあらず。和勇とも言ふべきか。そも〳〵、暴勇、あるは猛勇の如きは、身体の勇にして、正を踏みて恐れず、義のためには死もなほ厭はざるべき大徳は、精神の勇なくて能はざるべし。論語に、見義不爲無勇也。とあり。亦左氏傳に、知死不辟勇也。とあるは、これの意あらんかし。

紫式部は品高く才秀でけるものから、道長關白は、いたくしたひていどみける折も重な

りけれども、露ばかりだに操を曲げざりけり。されど、道長の威光も、さすがに式部の德光をぞ凌ぎ能はざりけん。嘗て（好色と名にしたてればみる人の折らですぐるはあらじとぞおもふ）との歌を式部に給はせけれど、忽ち（人にまだ折られぬものを誰かこのすきものぞとは口ならしけん）と返しけるとかや。そは禮記に所謂、戴仁而行抱義而處雖有暴政不更其所と言ふ如き勇なくば、なか〳〵道長の暴に勝つこと能はざりしならん。論語に、勇者不懼とあり。實に女子たるものは、百折撓まざる勇なきときは、將に衰へなんとする家政を挽回すること能はざるは更なり、亦盛なる家庭の繁はしきつとめにも應ずること能はざるべし。わきて、女德を實踐窮行して、良人に貞を盡し、老親に孝を致さんとならば、必ず德を守り、且つ盡す勇なくば難かるべし。



戒むべきは、勇なりと誤りて、女權を唱へ、男子に抗して女德な破りそ。おのれは、讀者に、女德を行ふよすがにもとてこそ、勇の必要をば述べつるなれ。



史談

轉が母

鹽井福子

空飛ぶ雁に順あり、列を亂して敢て飛びすゝます、山に住む猿猴になほ禮あり、手をつなぐに男猿まづ女猿を牽き、子の長なる順ひ、弟順ひ、次第順ひ、三萬三千三百三十三の子猿順次に之に順ふ。凡そ山に住む羆熊、野に遊ぶ猪鹿、水に住む千鳥、大方は順あるよし、人として道あらざるべからず。しかるに愚婦あるひは幼を愛して長をおとし、或は繼母のまゝしき心に先妻の子を憎みすてゝ己が子を嗣となすなどの道なき行ひある。四方のけだものに聞ゆるも耻づかしからずや。あはれ人は阿佛尼をいたく賞し、そが十六夜の日記は、一字一涙、母の慈愛に泣かざるはあらじなど、いたく感賞すれど、何とて敷しまの和歌のうらなみ一方ならぬ家にありながら兄弟をして邑を爭はしめ、母として子を鎌倉に訴ふるなど、みやびならぬ行ひ、日來の教育、家内の間隙、おもひはかられて、いと淺ましう何とてこの母を賢と云ひ慈と云ふらむと口惜しう思へど、先きつ頃ものしたりし女子百傑の中にもかずまへ入れざりしが、今之に反していと賢こきいさよき母をこそ得たれ。これは何處の國、何處の里と云ふを知らざれど、ある國一の宮の社司に化名して羊の大夫と稱するが後妻なりけり。前妻に子なかりけるが、とく妾腹の子に務と云へるありけり。つゞいて、此妻、子を設け轉と呼びぬ。大夫、人となり懦弱にして、仕ふる神のもの云はねど、進退己がまゝにして、心むかざる折りは、社頭へ詣づる勤めせず、年七十路をこえいたく老いさらばひ、務ははや三十路を經へぬれど、妻を迎へんともせず、家督も讓らでありけるほどに、

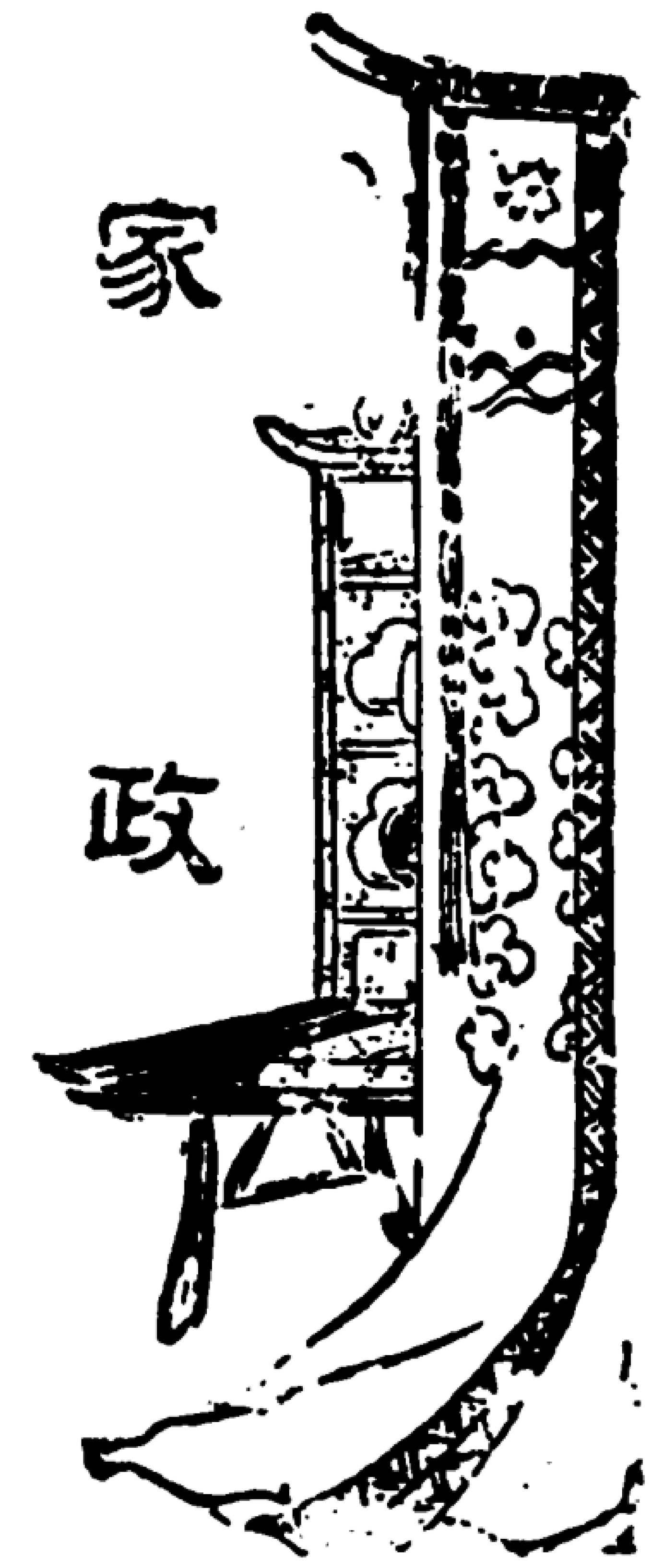
務も親を見ならうてか、書見る窓はあれども、圍棊すなどりのなぐさみにのみ晝夜ふけり、はては遊び女が色香にればれて財寶あまた費やしつれど、父が不興を蒙り、その生みの母なる妾のゆかりに身を隱くしぬ。さるほどに、父の大夫、病の床にうち臥し、はや死を待つばかりと成りぬ。務之を人傳に聞けども、かなしともせず、今生の名殘、行きて父が顔見んともせねど、侘びて歸らんと思ふ志もなきに、父怒りて家督を弟の轉に讓りて、遂に幾ほどもなく歸らぬ道に旅立ちたり。轉はいたく悲しみ、家督さへ嗣ぎたれど、吊禮も方のごとく營み、後の行ひも懇に、職もまた親にはまさりて勤むるほどに、務は不孝にも父がなくつきまだ乾かんともせざるに、はや妾が伯父とかたらひ、家督をゆづる證書を僞作し、廳へ訴へ出でけれど、官令二人が兄弟を召して社職の道勤を問ふに、神もの云はねど、行ひあらはるゝ。轉が答へ深切にして、務が答へ明かならず、國家を守護するの職に疎しとて、務は退けられ、轉に家督は定まりけり。轉の母これを聞き、つらく思ふに、小人こぞりて惡事を企て、事成らず退くといふとも怨は生涯に忘るゝこと難し。子をして仇を得さしむるは親たる者の心にもあらず、又務とて、腹はかさざれど長子たり、長子を退くる、また義に非らずとおもひ、速に轉を招き、語らふに、此の言を以てし、人の世に在るしばしにして、榮華を爭はんよりは、身をば安きに置くにしかず、たとへ父の遺言なりとも、とく兄に家を讓り、御身は退くべし、さすれば、不悌ともならず、その身も、母の心も安かりと云ふに、轉もつく〲と聞き、此の頃詩の羔羊の章をよみさしつゝ、此の事母君に語らひ、身を退けんと思へど、母君の御心をくみかねて、折りこそあれと待ちつるに、はやくこゝろづけ給ふうれしさ、速かに仰せに從がひまゐらすべし。われ羔羊の章の意を思ふには羊に數多の子を生めるも、先きに産れたる羊を越ゑて後に産れし羊の子のその乳汁を飮めることなく、先後順を違へざ

る事獸類だにもれのづから道あり。父の遺言いたづらにするに似たれど、兄なる人を退けて家督嗣ぎたりとも悌たる道に叶はねど、獸類だにも及ぶことなし、われ禽獸にも劣かざる身として神に事へ、御前を穢さんも勿体なし。父が遺言には背くとも、母君が御意に從ひ、いざ世を遁れ身を清め侍らんものをとて、兄の務に家督をゆづり八重葎、たゞ一筋の道をふみわけ、母が故郷へひきこもりて、孝養怠らざりき。あはれ、母子互みに心をやるたるひの水に月もさこそはすみ亘りけめと床しさに、かくなむ。

久兵衛が妻

山本正周

備中の國、窪屋郡、三田村の農、久兵衛といへるが妻某は、舅に事へて、能く孝道を盡しけり。この舅、性質、頑愚にして、聊かにても、我が意に違ふことあれど、忽ち、腹立てゝ、婦を罵り、甚しき時は、之を笞つことさへ數々なりしかども、婦は、少しも恨むことなく、ます〱誠を盡して事へけり。かくて、舅は、年波の寄るにつれて、いたく老耄し、起居も不便になりけれど、婦は、一層心を盡して、日夜介抱し、夜の目も眠らぬ程なりき。さるに、或る夜、婦は、疲勞の餘りに、すゞろにとまどろみし間に、舅は、起きて、傍へなる酒壺の中に溲しけるを、婦は覺めて、之をさとり、已が注意の足らざりしを悔ひなげき、直ちに、之を洗ひ清めつゝ、少しも恨む色なかりき。かくの如く、孝順に事へて、數年一日の如くなりけれど、頑なる舅も、終には、之に感じて、我を折り、或る時、官吏、其の村を巡廻せんとて來りけるに、舅、自ら路傍に出て、涙ながらに、婦の孝養のさまを申しけれど、婦、後に、國主より、物を賜はりて、大に面目を施しけるとなん。

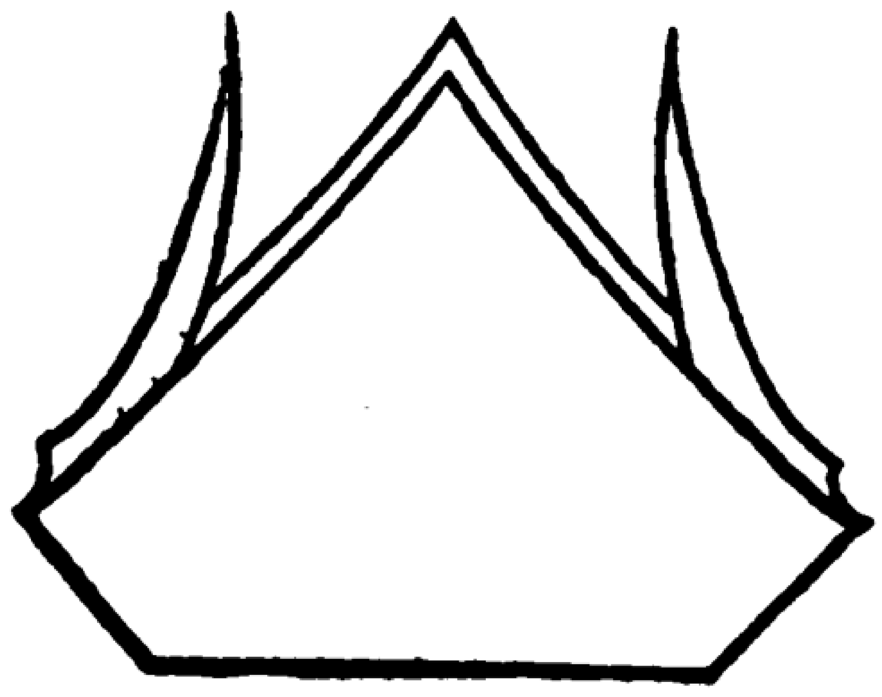


家政

折形

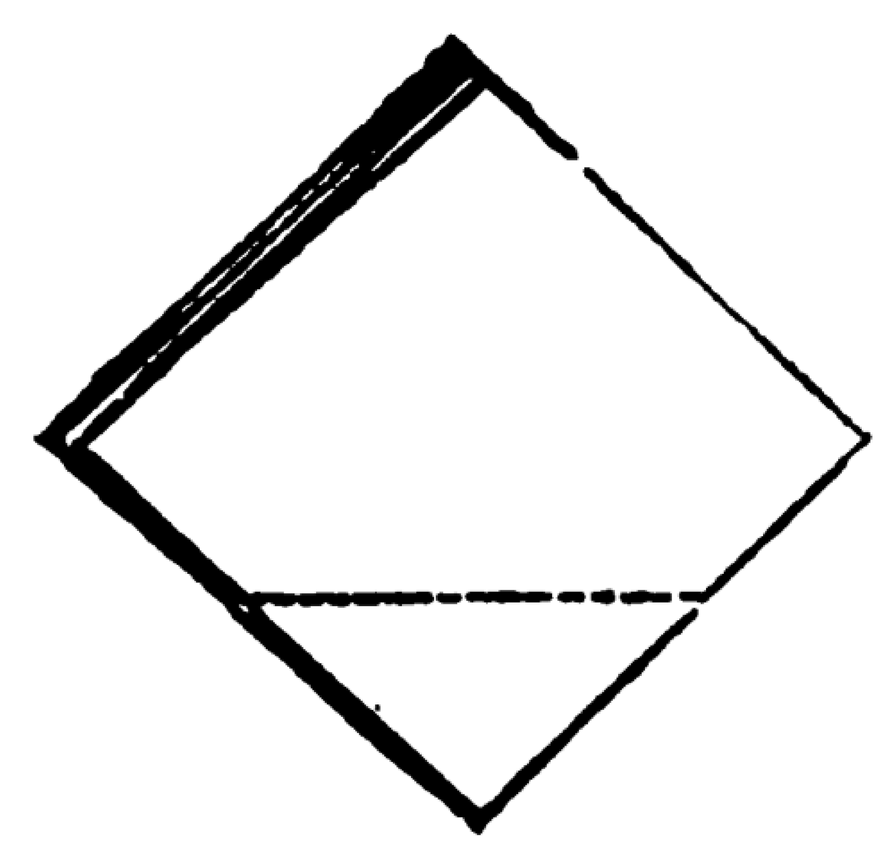
有住齊

坪甲立



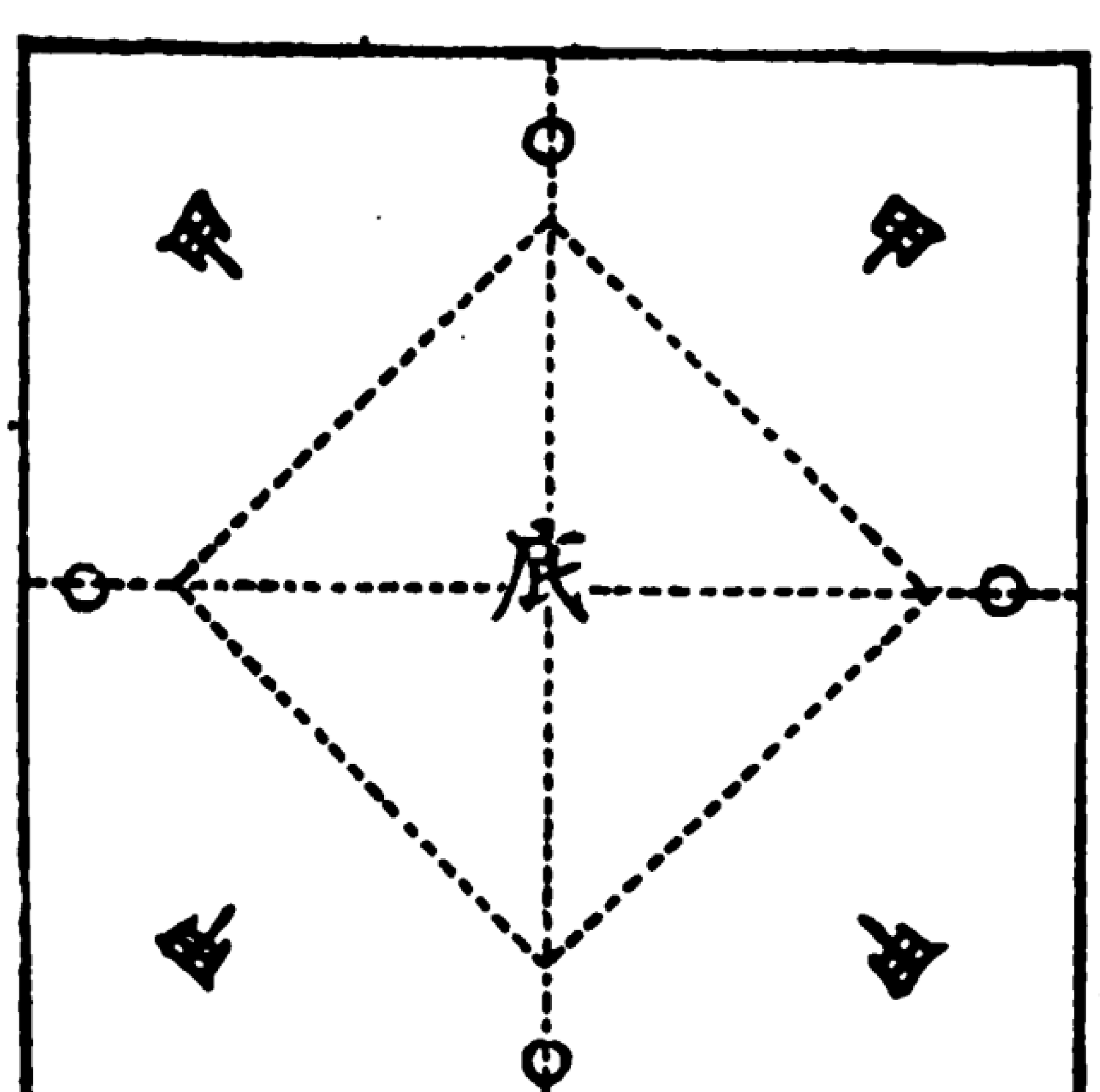
是は膳部の小角の甲立なり。中に菓子など入れるなり。紙は眞四角に截ちて赤白二枚重ね、赤を内部にして折る。

れなじく解の一



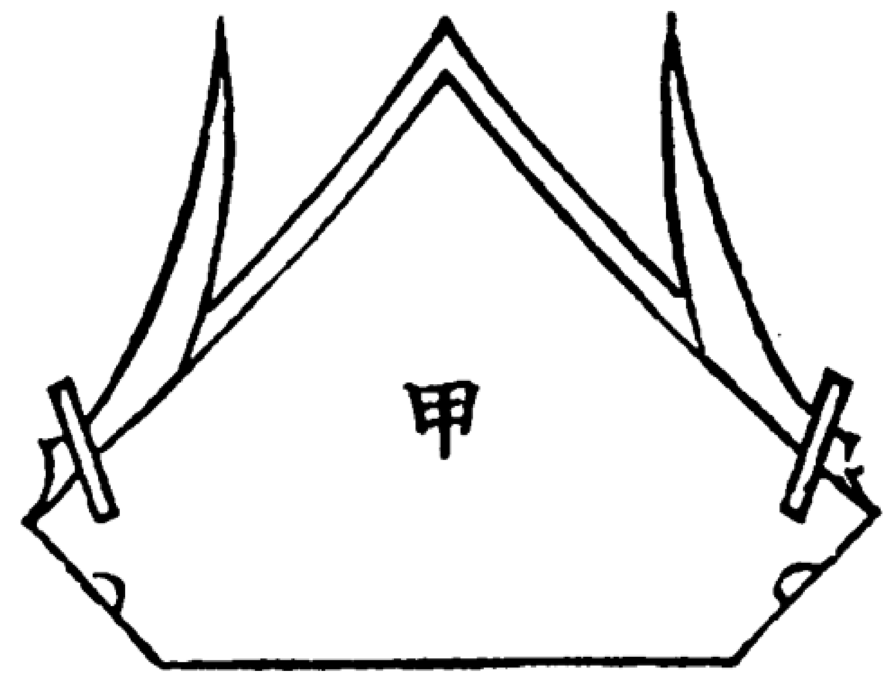
先づ四角なる紙を四つに折りて圖の如くし、點線にて示せる處に折目を入れ、之を開けて解の二となる。

れなじく解の二

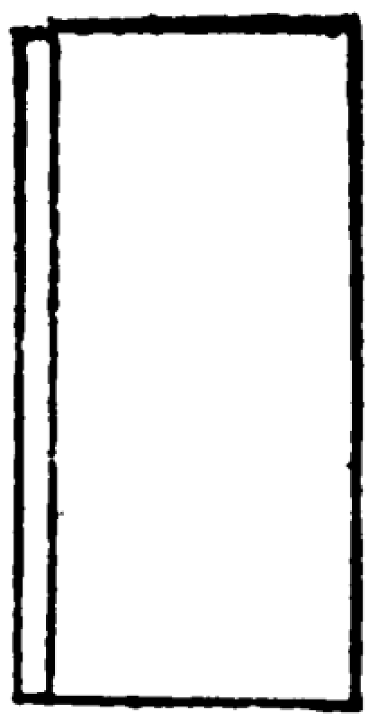


此の圖の中央の四角なる處を底として四方の甲を縦に起せて解三の如くなるべし。

おなじく解の三　斯の如くして四角のつりを糊にて着け、圖の示すごとく割竹などにて乾くまで止めおくべし。

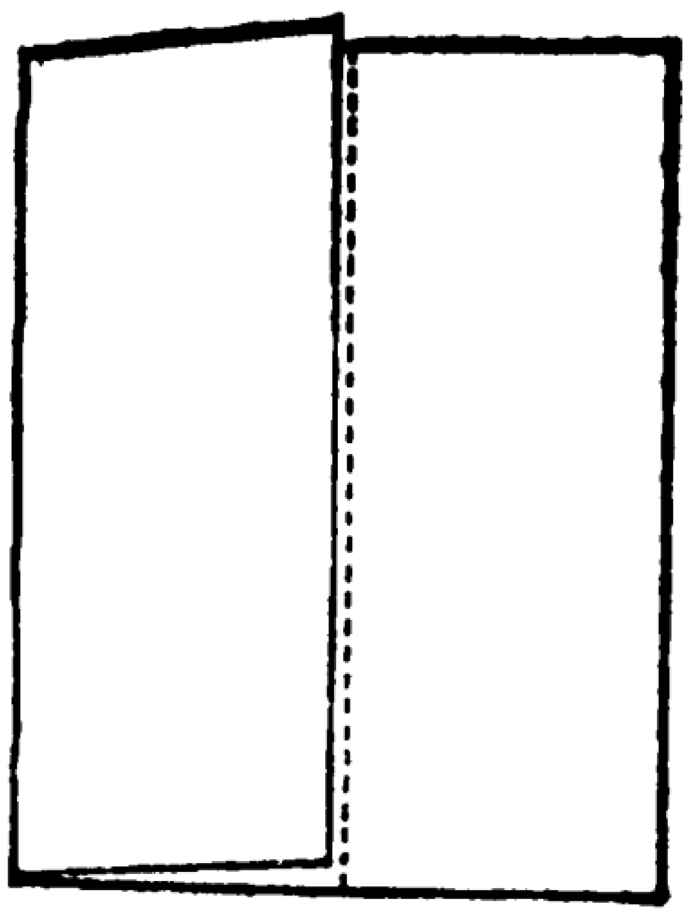


銀子付紙

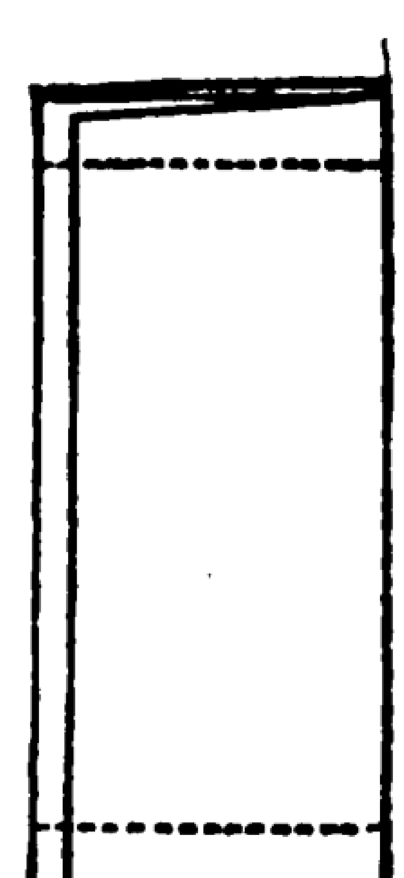


是は目録だいに銀子何々と數を書きて張付るなり。跡にて其員數に合せて引換ふるなり。

おなじく解の一　先づ圖の如く、凡そ三つ折のつもりにて左を右に向けて折る。



おなじく解の二　解の一の如く折りたる後、右側をも亦左に向けて折りて圖の如くつくり、次に上下の點線にて示せる處を裏に折り反せば出來上るなり。



茶の湯

茶禮初學（續）

孤峯菴不羨
關　葦雄

茶の湯當日の式

一數寄屋掃除路次不レ殘掃除可レ入レ念事

註釋、不羨曰、數寄屋と云は、濃茶薄茶を點る、小間、廣間、水屋、庖厨、料理、煮焼迄悉皆其

場所にてなし得る様一棟に構造したる建物にて、一會の茶の湯を催す處を云、本屋に連て造れる茶席を小座敷と云。又座敷の内を仕切て構へたるを圍と云。都て茶に應用する席は四疊半より以下を云。東山慈明院殿の好、十八疊敷を四個に仕切て造られたる之なり。偖當日の式と云は、則法式規則を定めて一會の要意準備を成すを云、先第一着に、早旦數寄屋の内を清潔に掃除すべし。はたきは柔かなる紙を用ゐて、天井、障子、窓の塵埃蜘の糸などを拂ひ落すべし。箒は椶櫚の箒にて疊の目なりに塵埃を掃集め、外に掃出さず、塵取に取て捨べし。拭事は、濡雑巾にて浸りにふくべからず。埃多き時は、古き手拭をかたく絞りて能ふくべし、埃少き時は鬱金木綿の柔かなるを以て、敷居鴨居其外をふくべし。内部の掃除濟たらむ外に出、先外路次より掃除すべし。下覆雪隱等あらむ是も清潔に掃除すべし。此下覆雪隱と云は、地下に瓶を埋籠、周圍をたゝきにし、四個所に石を配置し、これに板を載、樋穴を切拔たるもの也。因て掃除の節は、其板を揚げ、水を注ぎ、周圍を草箒にて洗ひ流すべし。而して后、瓶の上に莚を覆ひ、蓋の様にして元の如く板を掛置もの也。手水石あらむ水を改め、柄杓を付置べし。左なければ藥鑵等を便宜の處に置もの也。（是を下覆藥鑵と云）外路次掃除濟たらむ、内路次との境界、猿戸の締りをなし置、内路次の掃除をなすべし。落葉、朽葉、塵、蜘の糸など奇麗に取盡、掃盡すべし。叮嚀になす事を務む可し。飛石、石燈籠へふさ／＼と水を注ぎ、石の上に土砂の無き様洗ひ流すべし。つくばひ石の水門の水を汲出し、中を能々洗ひ、清水を汲入、杉柄杓を附置べし。

一待合要意

客待合に通り、腰掛の備へあらむ各自圓座を敷き腰をかけ居るなり。待合を出で、茶席に入る時は、

上客より段々立ちて敷きたる圓座は、後ろに立掛置き、末座の人是を、初め主人の仕置たる通りに皆取直し置くなり。

待合には、冬は手焙、圓座、煙草盆を置けども、夏は手焙は無論いらず、夜咄の節は、行燈を上座に置くべし。雨天又降雪の時は、竹の子笠を客の數程出し置くべし。下駄は前の沓ぬぎ石に立かけ置くなり。

註釋、煙草盆の火入には、池田炭を能煽し入、灰を押切置くべし。押方に口傳あり。灰吹は青竹を用ゆ可し。中へ水を僅少入れ置くべし。莨盆は塗物ならで奉書を敷べし。木地は夫に及ばず。火入は左、灰吹は右の方、莨は奉書を折て其中へ入れ置べし。又は好の莨入か、或は見立物を用ゐるも妨げなし煙管は前の方へ入れ置くべし。土瓶掛置、鐵瓶かけ置もよし。又茶碗をも出し、香煎をも添へ置くべし。穏なる盆の中へ並べ置くべし、又待合も腰掛の備なく、疊敷たる處ならば、圓座にも及ばざる也。

一塵穴へは青葉少々入れ塵箸を入立掛置なり。

註釋、青葉少々は二三葉に止るべし。塵穴は寸法の通内路次は、圓く、九寸胴反しなり。外路路は角、箸は節を揃へ、水にてぬらし、穴の中へ建掛る。

女禮

禮節教授　有住常子

小袖。袴着せまゐらする樣

小袖を廣蓋にのせて、左の手を下になして、右の手をふちにかけて、持出すべし。

載る樣は、小袖を背縫より竪に折り、裾を下へ折りかへし兩袖を上へ折り返して、襟を左の方になして

載るなり。

進みゆきて、御前に至り、踏止まりて、左足を右足より半足跡の方へ引て、左膝より突て右膝をつき、右膝をすこし引ながら踵を平になし、左膝もかくして居りて、下に置べし

居る所は、御前よりすこし下座の方へ、片よりたるべし。

まづ袖を、取おろし、上に折返したるを開くなり、上の折目の通りなる袖口の所を兩手の四五指の間に挾み小指とくすり指の間也殘れる三指にて、襟の眞中より左右四五寸計り下るほどの所を持て、左右へ廣げて、なほ襟先と裾との間を二所ほど持て二所とは袖の付根と付根の間さゝげて、左右の膝にて

兩足をつまだてゝ、左膝頭をたてゝ、進めながら前にふせ、ふする時又右膝頭をたてゝ、又すゝむ、膝頭立る時に足進しなり

膝行して後ろに廻りて、まづ持添へたる二箇處大指と人さしゆびの間、人さしゆびと中指の間也を、御腰のあたりに寄するやうにして、放し、次を襟の左右の脇也其上の方にて放し、さて襟を、御肩にかけ、

女子は、右の袖よりめすやうに、右袖を引延し、次に左の袖を引てめさするなり、次に裾をよく廣げ、膝行して、御前の方へ返りて此返りやう尋常には貴人御前へ出る時の如く兩手を進め兩膝を互違に進めて返るなりと知るべし帶を取て、女子は縫目の方を上にして進らすべし。

袴は三つに折りたゝみたるを引立て、左右の御足入らるゝやうにひらきおき、女子は右足より踏入れさせ、紐は、正しき緋の袴やうの物ならむ、御右の脇にて結びまをすべし結方の習ひは別にとてこゝにかゝす

男子にめさする時は、左足よりめさせて、前紐を腰にあて二廻して、後に諸輪にむすび、後腰をあてゝ前にて諸輪に結ぶ事、常の事なり。御小袖も、左袖より、女子と反對してめさする事と知るべし。

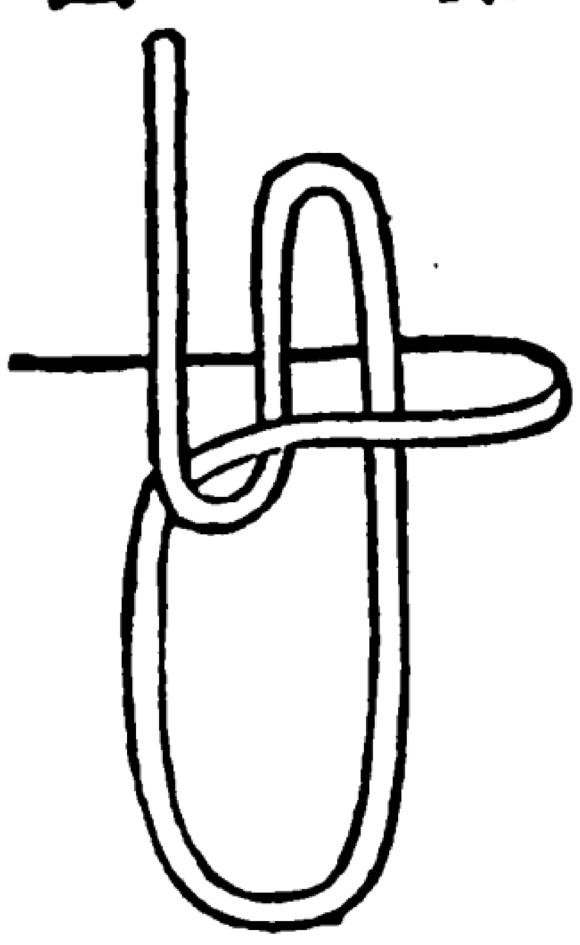
結物

百草庵一無

結びものは最も容易き手術にして、なか〳〵に趣味あるものなり。其用途も日常廣く應用すべく、漸く進みては、寫眞掛、短冊挾等も隨意に造り得て、徒然のなぐさみともならんか。殊に幼き少女子たちの心得置き給はゞ他日益し給ふこと少々にあらざるべし。數は凡百ばかりもあれば、之より次々に號を逐ふて登載せん。

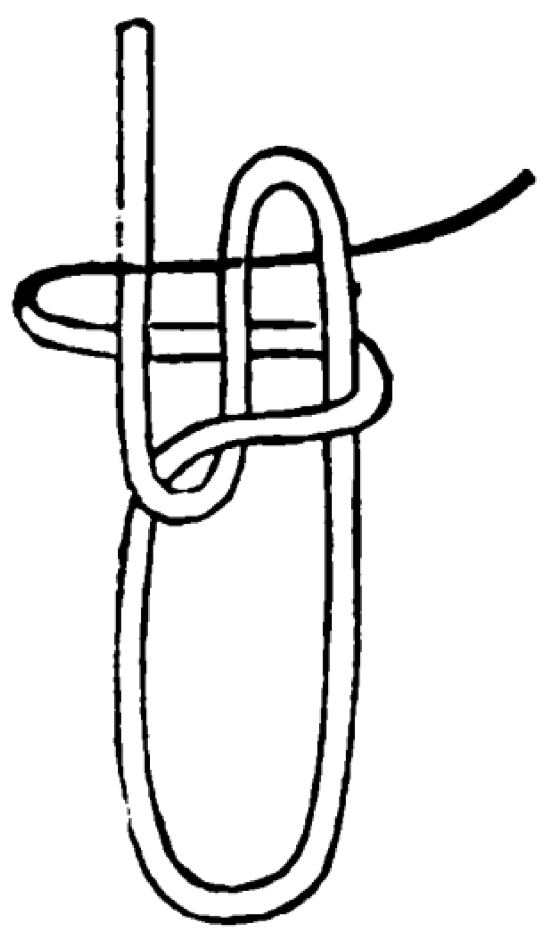
叶結　是は婚禮の時用ゐること多けれども、女結とて、女子なれば何に用ゐてもよし。

第一圖



墨線の通りに引きて第二圖となる。

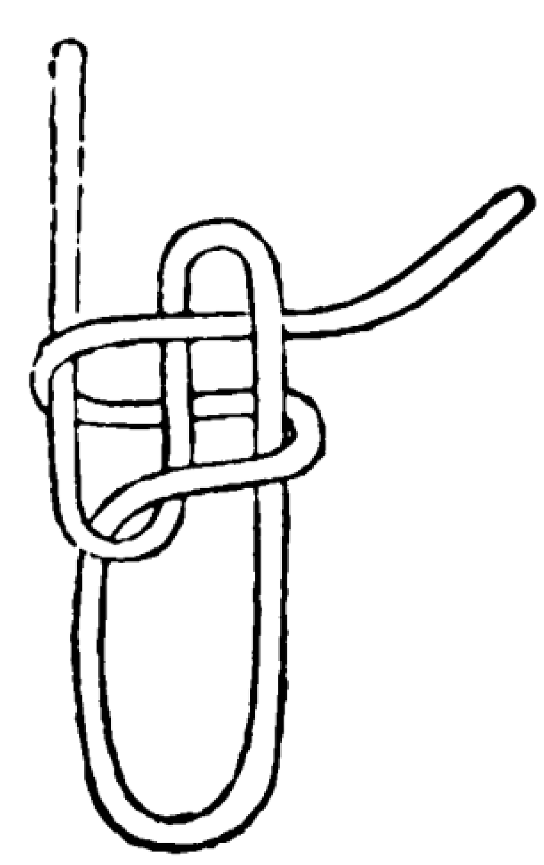
第二圖



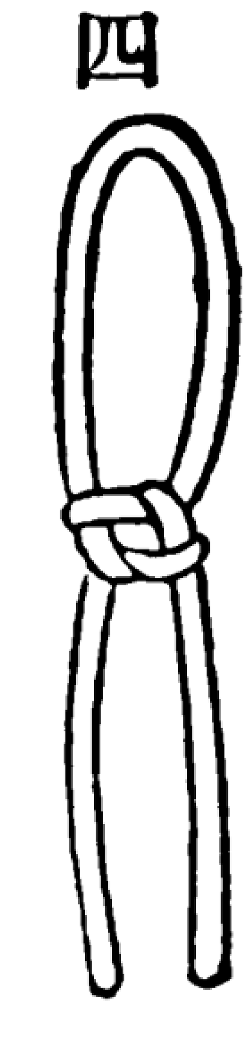
墨線の如く引きて第三圖となる。

如斯を引締て倒にすれば第四圖なり。

第三圖



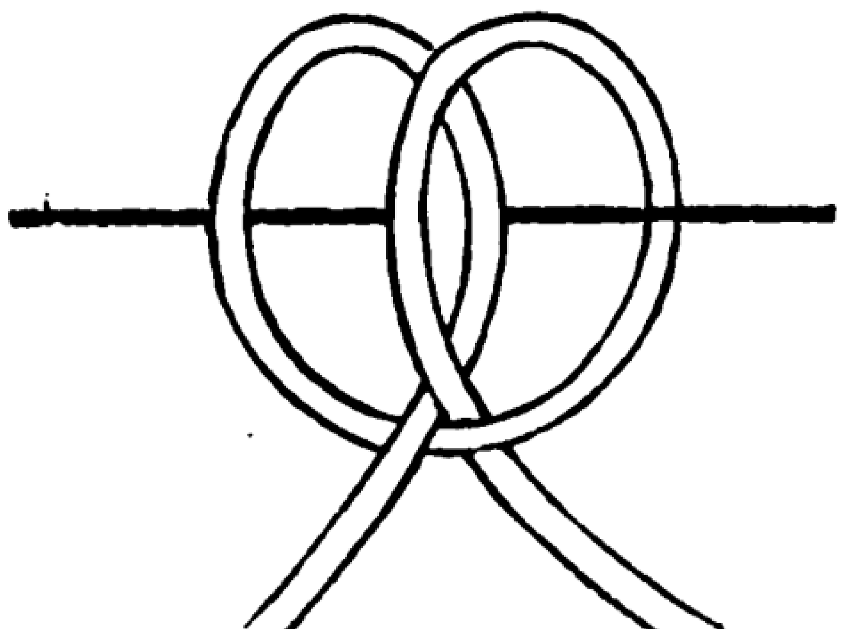
第四圖



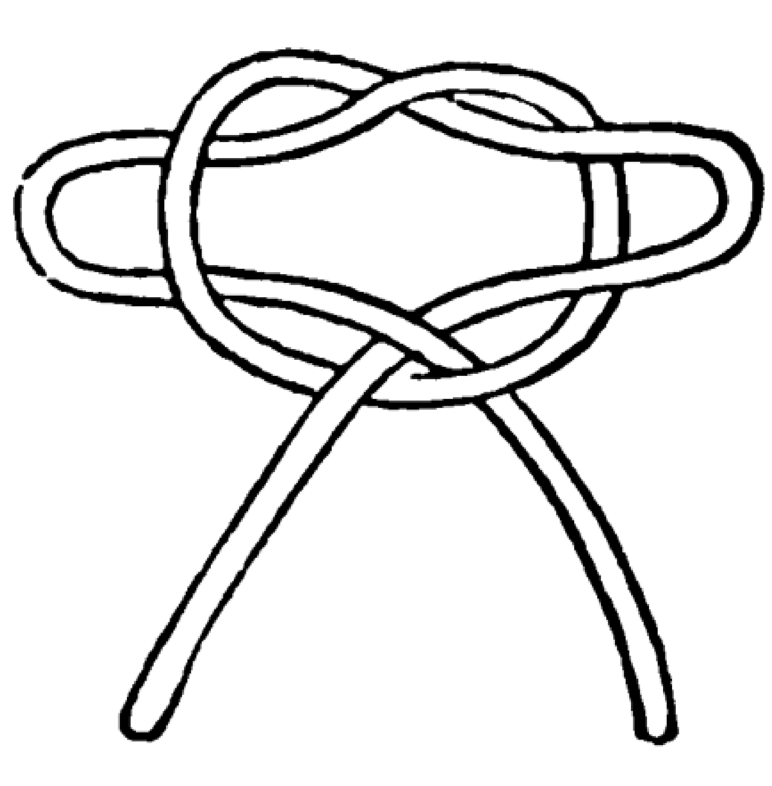
結び上り

思ひ結　此の結びの用ゐ方色々あれども、短き紐の粗末ならざる樣たくはへ置くに用ゐてよし。墨線に示せる通り中央の紐を兩方に引出せば第二圖となる。

第一圖

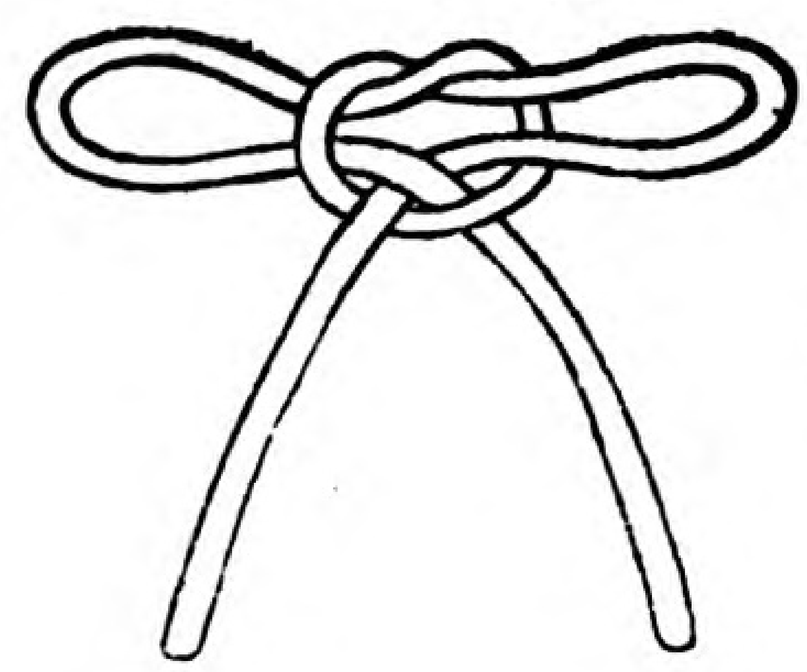


第二圖



如斯を引締て第三圖となる。

第三圖



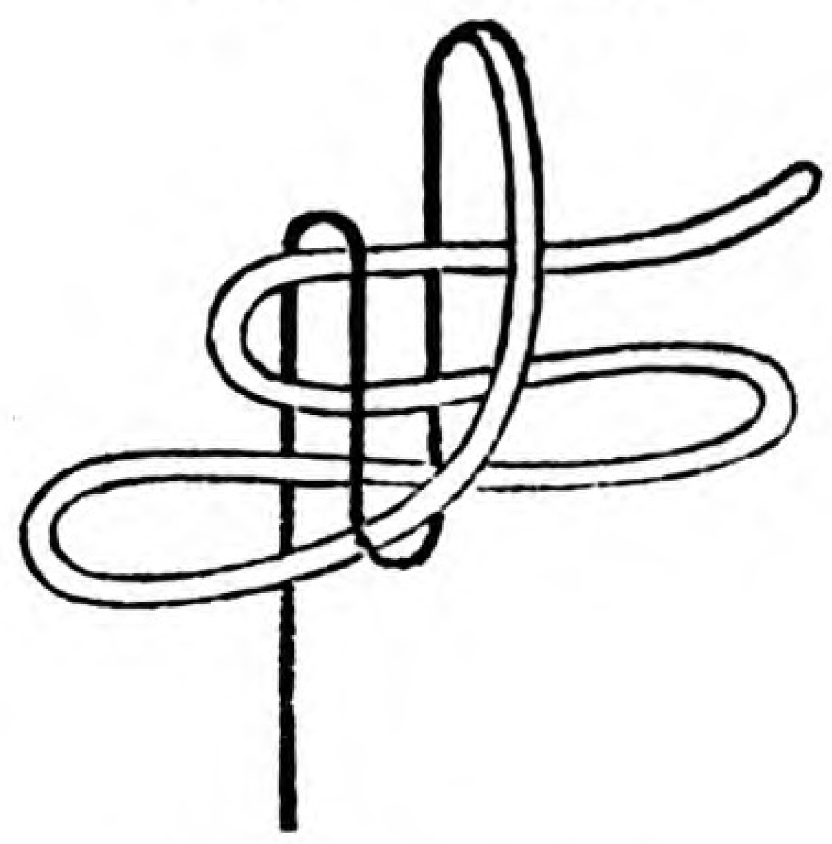
結び上り。

吾妻結

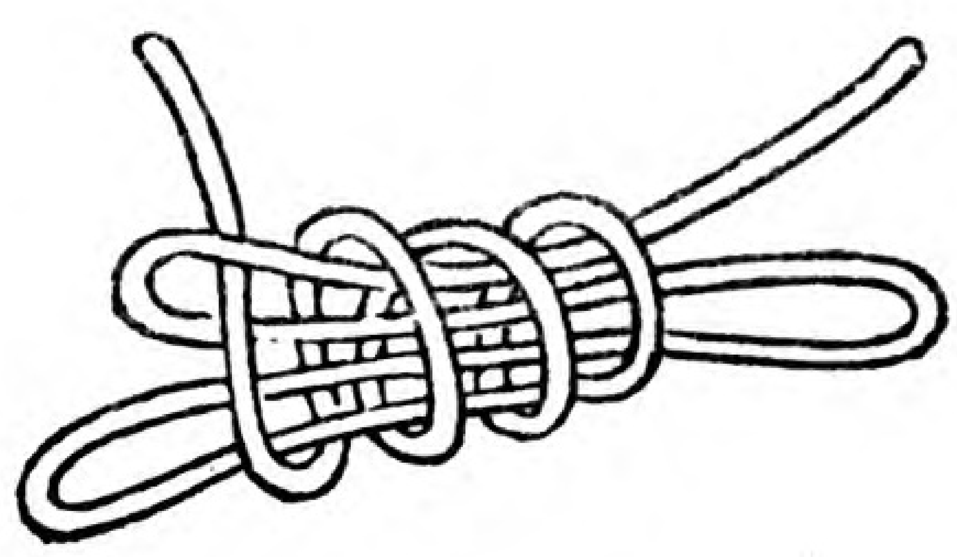
是は袋の提緒、又は金着の紐等に用ゆ。信玄袋に用ゐるもよし。

墨線の如く紐を引きて第二圖となる

第一圖

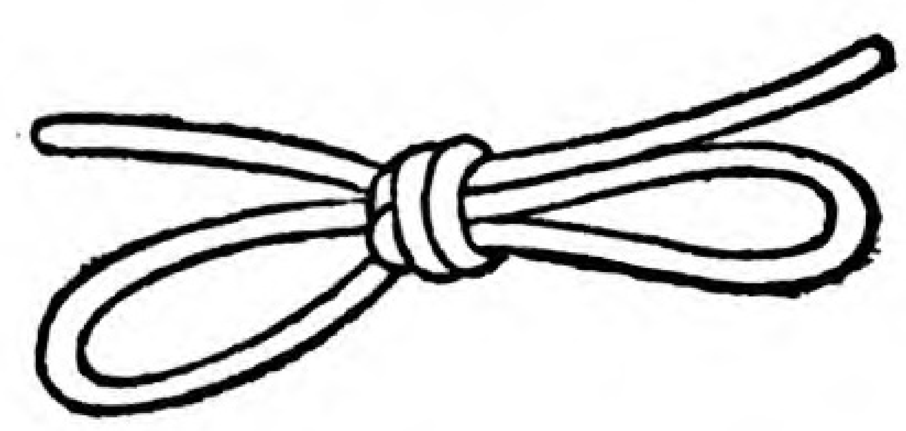


第二圖



如斯四つ巻きて引き締むれば第三圖となる。

第三圖



結び上り

たちぬひ

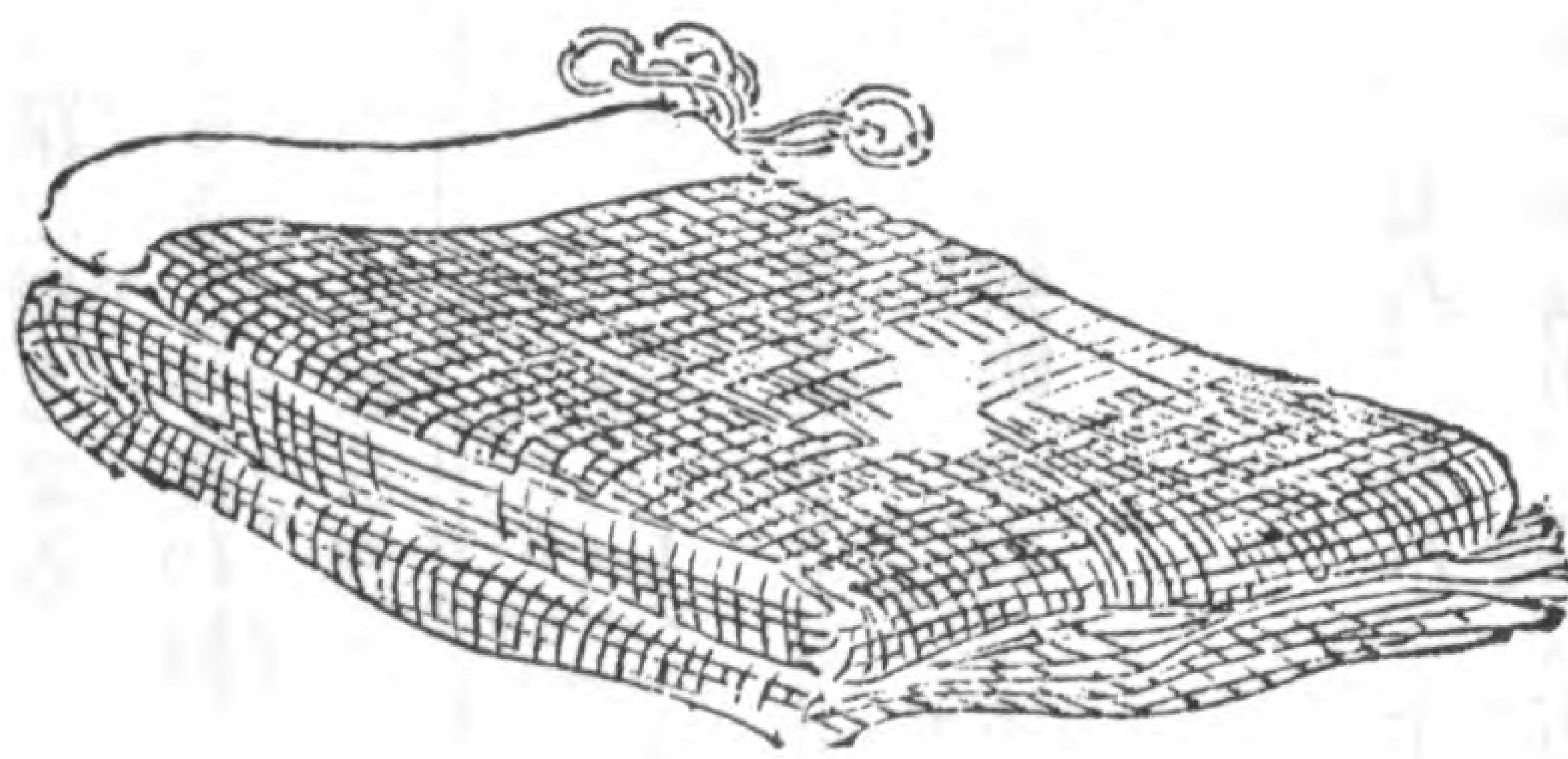
(九五)蚊帳のぬひ方

西山たい子

かやは五六、七八、八八、十十等、幅數さまぐあり。五六と云ふは横五布、縦六布にて作るを云ふ。十十と

は横も縦も十布なるものにて、五六の蚊帳をまづ二人づりとし、六七よりは六疊づり、八疊づり、十疊づりと數ふ、何れにても丈け大凡五尺七寸八寸より六尺位づゝに横縦ともそろへ裁ち一布づゝ合せ縫ひてわとなし、天井切を縦布の合せぬひたるものに合せてたち横布の數だけはぎ合せ、四角へ、四角なる當切れを絎けつけ、天井の切れと、まはりの切れとを縫ひつけるなり。但し蚊の入らぬやう縫ひめを細かくぬふべし。それよりよろしきものは小麻、さのみならぬは緋金巾、茜木綿等を、木綿巾を二つに切り、天井とまはりの切れとの縫ひめをかくさんため、ぬひめより二寸五分むかり下へぐるりとぬひつけかへして、天井切れに絎けつけるべし。又裾にも同じ切れを木綿巾丈けをぐるりとぬひつけるべし。それより四方へつりて金をつけ、又中釣りにちの切れをつけるべし。

仕立上りの圖

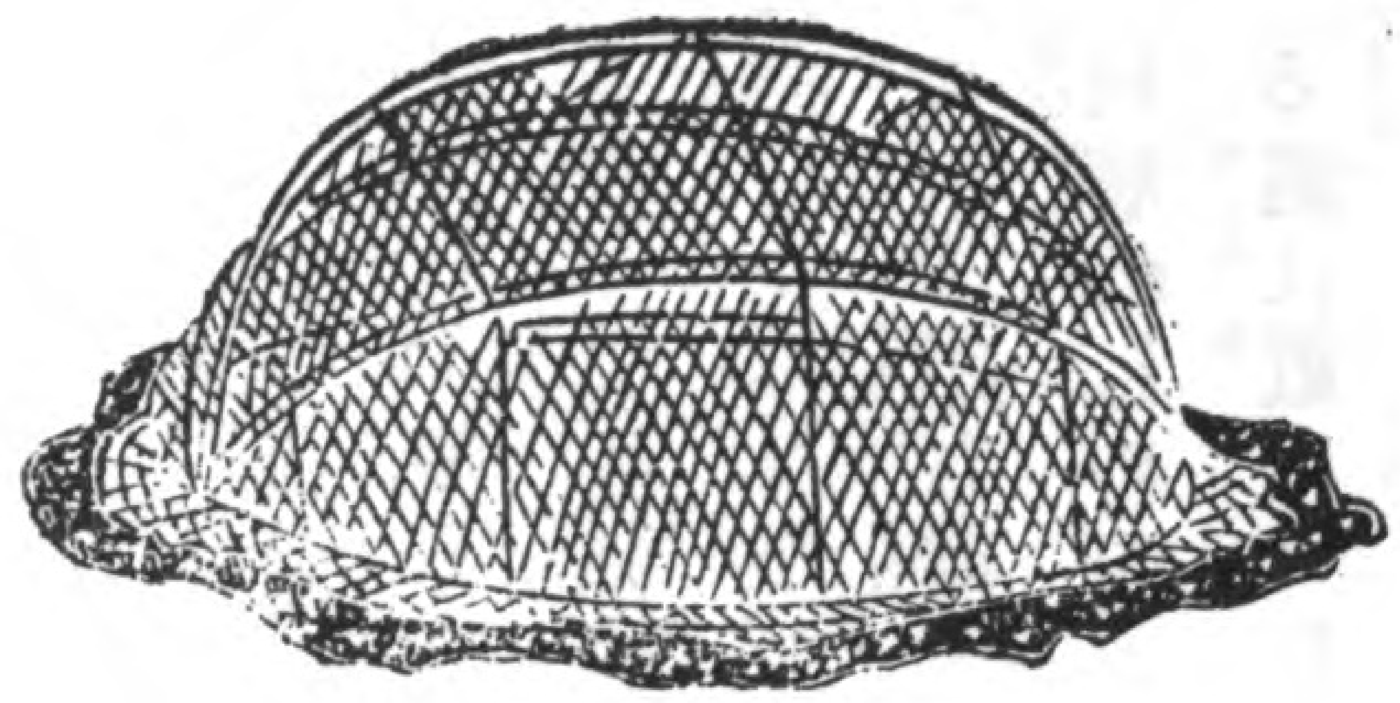


母衣蚊帳の仕立方

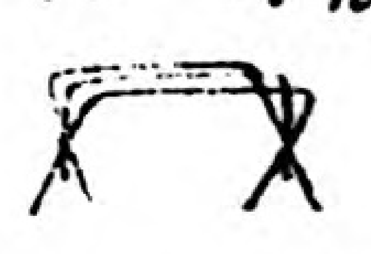
母衣蚊帳は、曲尺一寸むかりの巾の、さきたる竹を弓形に作り、眞中に一番長をし、つぎ〳〵と短さを用ゐて、竹の兩端に穴を明け扇子のかなめの如く紐を通して結び、また一本長き紐を通しれくべし。以て疊みひろげの出來るやうにし、ひろげる折りは其一本の紐を人の

躰の下にしくやうにするなり。切れも竹と同じやうに眞中を長くし、だん〳〵にすぢかひにかきて短かくし六布、或は八布、もしくは十布ばかりを合せぬひ、ふちきれをぐるりとぬひつけるなり。

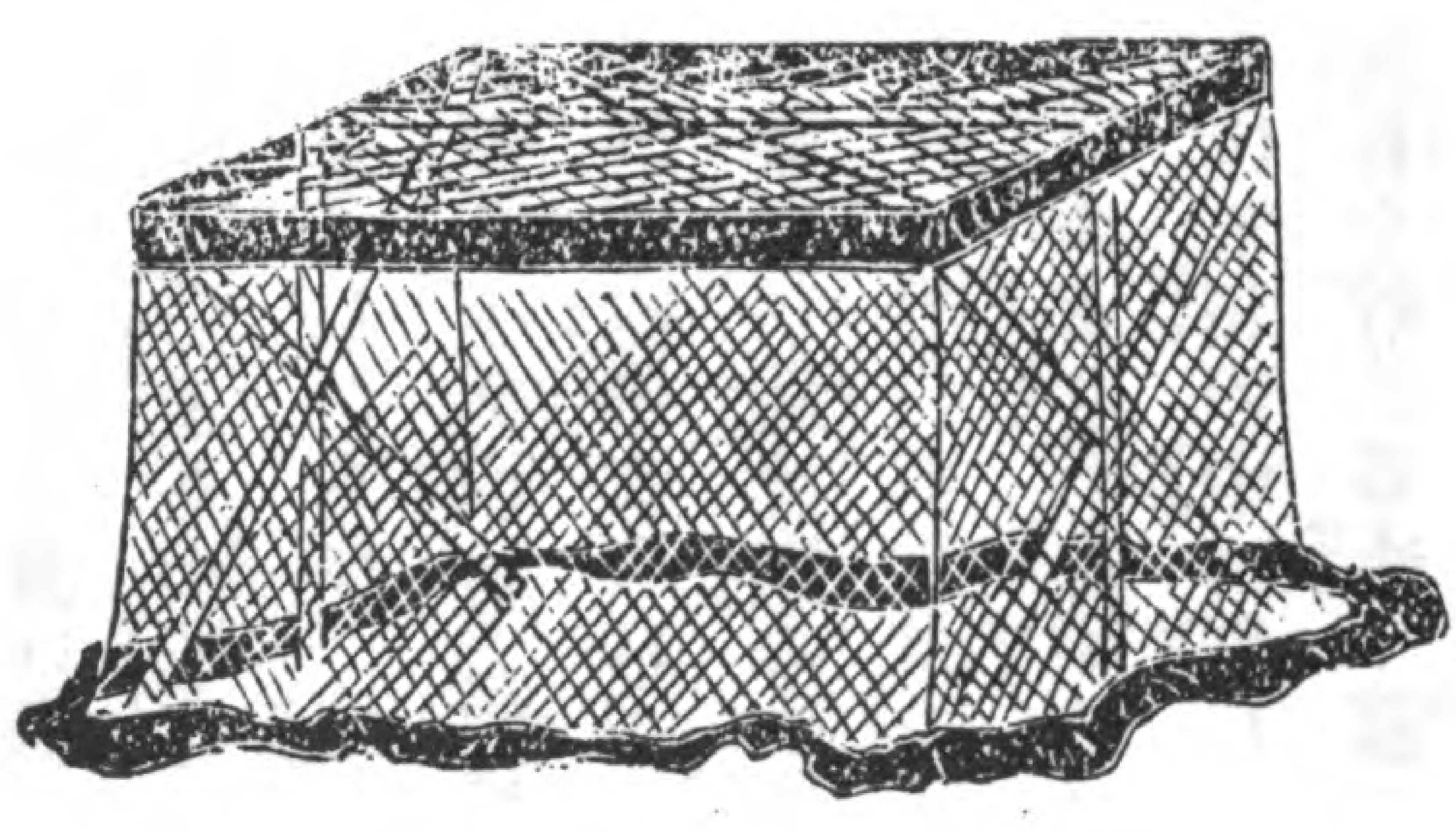
仕立上りの圖





されど、それはいと面倒なれど、三本の竹を上圖のごとくにまげ、其中二本は足を同じ長さに造り、一本は少し短かくして、短きを眞中とし、長きを兩端にし、下圖のごとく組みたて、三本止めて開閉重りたる處を扇子のかなめの如くに自在なる樣にし、竹の大さをはかり、布は其竹よりは少し大めに、且長めに、只の蚊帳の如くにぬへど簡畧にて作りやすし。

仕立上りの圖



だいどころ

貯へ方

●桃類を久しく貯ふる法　先づ適宜の細砂を賫り、再三清水にて洗淨し、能く日に乾して後、最上の燒酎に其砂を濕し、壺、又は桶に入れ、是に桃實の無疵にしてよき程に熟したるもの（過熟又は半熟は貯ふべからず）を貯ふべし。即ち砂と果實とを段々に入れ、果實を顆々に、相觸れしめざる樣に藏め、乾燥にして余り溫暖ならざる處に置くべし。

●栗實貯藏法　一斗入の石油の空鑵をよく洗ひて栗大の孔を穿ち、乾砂五升と栗の實五升を順次に入れ、栓にて堅く其孔を塞ぎ、床下又は物置の隅に置くべし。又一法は、栗實の無疵を擇びて赤銅の藥鑵に入れ蓋を堅くして吊しおくべし。

●瓜茄子の類年中貯ふる法　寒の中の潮を壺に入れ置き、夏の頃瓜茄子を之に漬け置けば色變らずして久しく貯ふべし。潮は渚より十丁ばかりも沖のを汲むべし汀は鹽強くてよろしからず。又細砂一斗に鹽四升を混ぜて之に新鮮の茄子を填めおけば年を越えて色變らず、用ゐるときは鹽出すべし。

●山椒を貯ふる法　之は紙の袋に入れて火を焚く竈の上に吊しおくべし。

●暑中梨子を貯ふる法　梨子の外皮に亞刺比亞護謨の溶液を塗り糸にて箱の中に吊しおくべし。

●松魚節を久しく貯ふる法　は、酒を少し塗りおくなりさすれば虫のつくことなし。

●鷄卵貯藏法　卵の尖りたる方を下にして食鹽中に埋めおくときは八九ヶ月の間は腐敗せず、又亞刺比亞護謨を水に溶きて刷毛にて外部に塗り、能く乾して、溫氣なき木炭屑の中に埋めおくも數ヶ月を保つべし。



學園

秀歌集（廿八）

鹽井正男

○

語らひてとるもむつまし妹と脊の
山田の早苗たのみありげに

○之は荷田蒼生子が早苗をよめるにて、語らひてとるもむつまし。語りあうて早苗採るもむつまじげなりとなり。妹と脊の。妹だの脊だのよりあひてと云ふ意にて、妹は女、脊は男、男女よりあうてとの意に、妹脊の山をひきかけ云ひしなり。山田は、山の麓にある田なり。たのみありげに。たのもしげであるとの意にて、よく出來るらしく、行末がたのもしげなど云ひしにて、田の實に言ひかけたり。

○一首の意は、語りあひ、むつまじう男女そろうて妹脊の山のねもとの田の早苗を採つて植ゑつけをるが、實にむつまじう早苗も如何によく實るらんと末たのもしげだとの意にて、むつまじと云ひて妹脊の山をとり出で、妹脊と云ひて山田を云ふ詞のつゞけさまより、むつまじう語りあひてとる早苗の末たのみありげと祝ひ詠みたる、實に工みに目出度歌なり

○

池水のいひしらぬまで香るなり
蓮のうき葉に風わたるころ

○之も同人が池の蓮をよめるなり、云ひしらぬまで云ふに言葉を知らぬまでの意にて、言語に絶えてめで度をいふなり、蓮のうき葉、水に浮びをる葉を云ふなり。

○一首の意は池の蓮の盛りになりて、うき葉に風の吹き亘るころ、池水までが何とも云へぬまで香りすゝしとの意にて、池水のいひしらぬまでと云ひたる

云ひしらずめでたく、よむ袖に何となう露こぼるゝ心地すなり。

○

うち向ふ月はひとつの影ながら
　うかぶは千々の思ひなりけり

○之も同人が月に向つて思ひをのべしなり一首の意は、うち向つてながむる月影は、たゞ一つであるものを、その一つの月影を見ながら千々のれもひがうかび出るとの意にて、うかぶは千々の思ひと云ひしは、又なく思ひよまれたる歌にこそ。

○

吹きはらふ松のあらしのなかりせば
　雲にうもれむ峯の古寺

○之も同人が詠にて、古寺の嵐をよみたるなり。

○一首の意は、吹き晴らす松風がなかつたらば、あの峯の古寺は雲にうもれてしまふであらふ。嵐が峰の雲を、吹き拂ふばかりにて、古寺が雲に埋もれずとの意にて、雲の群がり重なる嵐の山の古寺の景色目のあたり見るばかりなり。

○

わけて云はむ言の葉もなし稲荷山
　やますこふると人につげてよ

○之は同人が故郷なりける稲荷山の近きわたりに立ち歸るといふ人にことづてをだにとて送りし歌なり

○分けて云はん。あまりに故郷のなつかしく戀しくて、もう戀しとも、なつかしとも分けて云ふ言葉もないとの意なり。

○一首の意は、もう妾は故郷がなつかしく戀しく中々に戀しとも、なつかしとも分けて云ふ言葉もない故郷の稲荷山よ、たゞもう片時も絶えず、そこらの故郷の空を戀ふると故郷人に告げて呉れよとの意にて分けて云はむ言の葉もなきまであはれなる歌なりかし。山、やまずとつゞけたるは、調を取らんとてなり。

○

先きだゝむ事はいとひし露の身も
　おくれんとはた思はざりしを

○之も同人が母君におくれし時よみし歌なり。○先きだたん事はいとひし。親に先き立ちて死ぬのはいとふと云ふ意にて、親に先き立つは、親あとにあり嘆けむ、不孝なり、それ故、親に先き立つもいとひしと云ひしなり。露の身も。人の命は朝の露のごとくたとへられ、果敢なく云ひしにて、果敢なき命との意にて、いとひをしみしに對して云ひしなり。おくれむとはた。親におくれやうともまたとの意にてはたはまたなり。思はざりしを。思はなかつたものを、おくれたと言葉外に意をふくませたるなり。

○一首の意は、親に先き立ちて死ぬのもいやなりとて、果敢ない身ををしみけるが、さらむとて、また親におくれやうとも思はなかつたものを、今思ひがけず母さまに別れたと悲しみしにて、實に親には先き立つもおくるゝもつらく、孝子が情、さこそとあはれ限りなく覺ゆる歌にこそ。

○

一葉より先にわが身もさそひなむ
　世に秋風の立もまらじな

○之も同人が、物思ふ頃いつしか秋に成りぬと人の云ふをきゝてよめる歌なり。一葉より。桐の一葉よりもとの意なり、秋來れば木々の葉、皆おつるが中に桐の葉の尤ももろく散るものゆゑ、まづ桐の一葉のおつると古人もよめり。こゝにはそのもろき桐の一葉よりもと云ひしなり。さそひなむ。秋風の吹きて散らすを云ひしなり。

○一首の意は、こよなう脆き桐の一葉よりも我身をも先きにさそひ行つて呉れたならむ世の中に秋風が立つと云ふ事も知らず、悲しくも感じなかつたらうに、我が身を殘しゆかれしむかりに、吹く風の身にしむ秋を知るとの意にて、蒼生子は早く夫に別れた

れむさる事など思ひ出でゝ、から悲しみなきしにや、いとあはれなり。

源氏物語講義（九）

下田義天類

またある時は、えさらぬめだうの戸をさしこめ、こなたかなた心をあはせて、はしたなめわづらはせ給ふ時も多かり。

こゝも前段と同じく、桐壺の更衣が、朋輩の方々に苦めらるゝ物語のひとつなり。

○またある時は　とは、前段に述べたる惡だくみの外にまたある時には也。

○得さらぬめだうの戸をさしこめ　とは、得然らぬ馬道の戸を鎖し込め也。えさらぬを、湖月抄の傍註に、得去り敢へぬ意として、脇道なき所のやうに說きたるは少し違へり。平常には戸締なき所の義にて、得然らぬなり。めだうは馬道にて、前段に云へる打橋と同じさまの所なり。長廊下の所々へ截れ目を造り、其の截目の所へ打橋を渡し置きて、平常は此の打橋を往來し、さて禁中に非常の事などありて、警固の武士のこれを警むることなど有る時には、其の打橋を取放ち、其の截目々々より乘馬ながらも驅入りて、縱横に働かるゝやうに造り備へたる所なり。乘馬ながら驅退の自由に出來得るやうに設計したる所故に馬道とは申したるなり。和名抄道路部第百四十二に、辨色立成を引きて馬道俗音米多字向レ堂之道也と記せるものこれなり。

平常戸締りをもせぬ馬道の兩端の戸を事更に鎖し固めてなり。

○こなたかなた心をあはせて　とは、其の馬道の兩方に屬せる御部屋と御部屋と竊に牒し合せてなり。たとへむ、錠をおろし鍵をかくして素知らぬ顏し、あるひは虛留守つくりて呼ぶとも應せぬやうに約束

しなどして、今桐壺の更衣の急ぎ御前に参上せむとするを妨げなどしたるなり。

○はしたなめわづらはせ給ふこと多かり　とは、いぢめたりこまらせたりすることも度々ありきと也。此のもの字に注目すべし。かやうの正なきわるさまでもしてこまらせたりといふもの字なり。

ことにふれて、かずしらず、くるしきことのみまされど、いといたう思ひわびたるを、いとゞあはれと御覧じて、後涼殿に、もとよりさぶらひ給ふ更衣のざうしを、ほかにうつさせ給ひて、上つぼねにたまはす。其のうらみましてやらむかたなし。

○ことにふれかずしらずくるしきことのみまされど　かやうのわるさをせらるゝ事が何事につけても数しれず度々ありて、更衣の心を苦むる事もかりが、次第次第に多くなりゆけるなり。

○いといたう思ひわびたるを　いとは「ズット」いたうは「ヒドク」と云ふ義に見るべし。思ひわびは思按にくれたるなり。前段に陳べたるやうなる色々様々の悪さをせらるゝ事が、何事につけても数しれず度々ありて、更衣の意を苦しむる事もかり、次第次第に多くなりゆけるも、更衣には「ズット」「ヒドク」心配して、いかにせむ此の苦労を滅するを得むと思按にくれたるといふ義也。

○いとゞあはれと御覧じて、後涼殿に、もとよりさぶらひ給ふ更衣のざうしを

これは前段の事がらに付きて　陛下の方の御所置を説きたる所なり。更衣には右申すごとく、いといたく心配していかにせむ、此の苦労を滅殺せらるべきかと思按に暮れて居られたるを、陛下にも御推察あらせられて、いとゞあはれなることゝ御覧じてなり。

○いとゞは今ひとしほの義也。○あはれ　は、こゝにてはふびむの者と申す義なり。此等苦労の淵に沈める更衣の境遇を御推察在らせられて、さらぬだに御心に掛かれる更衣の身の上を、又ひとしほ不憫の者

やと思食されて也。○後涼殿に、もとよりさふらひ給ふ更衣のざうしを　後涼殿は、清涼殿の西の方に並べる御殿なり。陛下の常にはします所と最接近したる所なり。こゝにもとよりさふらひ給ふ更衣とは誰人の事なるか。此の物語には、其の名あらはれざる方なり。たゞこゝにもとよりさぶらひおはしましたる一人の更衣ありと心得おくべし。ざうしは曹子なり。御つぼねと申すほどのことなり。

○ほかにうつさせ給ひて　とは、此の後涼殿の更衣を外のつぼねへ移し給ひてなり。

○上つぼねにたまはす　とは、此の桐壺の更衣の上つぼねにくだされたるよし也。桐壺の方は、下つぼねとして其の儘にくだしおかれ、その上に、此の後涼殿の曹子をも、上局として桐壺の更衣へ御授けになりし由なり。

○そのうらみましてやらむかたなし。さらぬだに悋氣嫉妬のやるかたなかりしを、此の後涼殿の更衣は、身にこれまで賜はり居たる御つぼねをうばはれ、他の御殿へ退けられたるのみならず。常平生うらめしい、ねたましいと思ひ居たる桐壺の更衣に、我がつぼねを乘取られたりと思へど、くやしい口惜しいと思ふ此の更衣方の人々の執念は骨髓にとほりて、晴らしやうもなかッたとなり。

評釋に、そのうらみやらむかたなし云々。此の段、更衣の思ひわびたるを御覽じて、いとゞ御あはれのかゝりゆく情、實にさもあるべきなり。かく又恨をおふこと一段深くなりにけり。

といへるは、短簡に能く評し得たり。さて以上は、桐壺の更衣が御寵愛を得たるにつきて、御身の上に蒙りたるわざはひを陳べ、一方に　女子の心だての正邪を解き、また一方には桐壺の更衣を困難の淵に沈めて、讀者をして、甚御氣の毒なり、御かはいさうなりと思ふ心を起さしめ、其の同情を此の腹に出來たる皇子、即　此の物語の　立役者たる光源氏の君に集めむと揣へけるもの也。

作者の用意周到なる所に能く注意すべし。
また上段に、御局は桐壺なりと説き出したる筋をも、此の後涼殿の曹子を賜はりたりといひし所にて結び留められたり。かゝる所にも首尾の文法あることを心得おくべし。

漢文學講義（十二）

大林弘一郎

九、静　徳川光圀

光圀、字は、子龍、西山、又、常山、梅里と號す、水戸藩主徳川頼房卿の第三子なり、年十八歳にして史記の伯夷傳を讀み始て修史の志を起し、遂に明暦の初より業を始め、封を襲ぐに及び史館を開きて學者を集め、大日本史を編纂せしめたり、今こゝに掲ぐる文も、その列女傳中に載する所なり。
大日本史は、史記、漢書などの如く、紀傳躰の歴史にして上は、神武天皇より、下、後小松天皇に至るまで、一百代の事を記し、本紀七十三巻列傳一百七十巻あり。今世に行はるゝ板本は、烈公齊昭卿の時に成りしものなり。一百冊として世に行はるれども、志表の類は、未、完結せず。（志の中にて印行せられたるは職官、氏族、兵、刑、佛事、陰陽、神祇、禮樂、食貨、の九志にして、地理志は、今、猶、校讐中なりとか。）光圀從三位權中納言を以て、元祿十三年年七十三にして薨じぬ。義公と謚す。
義公の著は、多くは、儒臣の手になりしものなれども此の大日本史の文も儒臣中の筆者の名を掲ぐる方よろしからんも、たしかに知りがたければ、義公の筆としてかゝげたり。されど、常山詠草、常山文集などの歌文を見ては、其の文藻の非凡なりしことを知るべし。そこに、國學を起し、漢學を盛にし文運を興したる義公の功績は決して沒すべ

からず。

靜都下白拍子也。源義經妾畜之。土佐房昌俊至京師。義經疑其圖己。召而詰之。既而事釋。其夕義經謂曰我自昏心動。意昌俊至乎。靜曰。然。衢塵起。人行劻勷。不可無警。乃潛遣兩童詗之。久而不還。又遣一婢。少選歸報曰兩童既斃於門外。鞍馬數十匹將騎而發。夜既三鼓。昌俊至。義經曰。是不足介意。執刀將起。靜曰。小敵不可侮。乃進甲冑弓矢。義經射而退之。

この一段は、彼の堀河なる義經の館へ賴朝の遣したる土佐房昌俊が夜打をしかけたる時の事を記したるなり。

靜は、京に住みし白拍子とて舞妓なりしが、その親は磯の禪師といへりといふ。源義經京にありし時、これを召して妾としたりき。かくて、義經は、平氏を討ち平げし後梶原景時の讒言によりて、兄賴朝と中あしくなり、賴朝は、深く義經を憎みて、遂に土佐房昌俊を遣し京に入りて義經を殺さしめんとせり。昌俊京に上りけれど、義經その己を討たん爲に來れると疑ひ、召して之を詰問せしに、昌俊は、「この度は、七大寺（大和の東大、西大、興福、元興、大安、藥師、法隆の七寺）詣の志にて參りけるなり。他事あるにてはなし。」と對へけれど、義經は、「左にあらず、二位殿（賴朝）の旨をうけて吾を殺さん爲ならんと、詰りしかど、昌俊は、起請文（即誓書を認めて、献じ置き、おのが舍にかへりぬ。之を畧して、「既而事解とかけるなり。其の夕義經靜にいひけるやう、「我夕方より、心騷ぎ頻りなり。思ふに昌俊來りて我をうたんとするならん。」と。靜いはく、「さか候はん。街衢（共に四通の道をいふ。）即大路に塵立ちて人の往きかひあわたゞし。（劻勷とは、遽しき良、又迫れる良）警戒することなかるべからず。」と

とて、潛に召使のかむろの童二人をして、昌俊の舍の邊に往いて之をうかゞはしめしに、久しうして還らざりしかば、又、はしため一人遣しけるが、しばらくして歸り報じていふやう、「二人の童は既に昌俊が舍の門外に仆れ死、門の中には、鞍置ける馬數十匹あり、甲冑したる兵共まさに馬にのりて出立たんとする有樣なり。」と、かくて、夜半の頃になりて、昌俊、義經の舘に夜打をかけたりければ、義經いふやう、「こればかりの事は意に介する程のことにあらず。」とて、刀を執りて起き出でんとせしが、靜は之を見ていへるやう、「小敵なれども侮るべきにあらず。」とて、やがて、甲冑をとりて、着けさせ、弓矢をとらせたりしかば、義經出で拒ぎ、射て敵をばうち退けたりけり。

この段は、平家物語にも、源平盛衰記にも見えて、いづれも、大なる差異なし、今、參考の爲に兩書より、抄節して、左にかゝぐべし。

（源平盛衰記卷第四十六、土佐房上洛事の條）

（上畧）伊豫守（義經）ハ其比礒禪師ガ娘禪ト云白拍子ヲ思ヒケリ。女ニ語テ云ク、此晩程ヨリ、イト心騷頻也、一定、晝ノ起請法師（此ノ日昌俊起請文ヲカキシ故ニ云フナリ）ガ夜討ニ寄ント思フナリトイヘバ、禪、大路ハ塵灰立テ、何トナク人足イソガシ不レ可二打解給一ト申、太政入道ノ禿童ヲ二人召仕ケレバ、土佐房ガ宿所見歸レトテ、彼ヲ遣テ、待共〳〵不レ見、亥時ノ終程ニ、半物ヲ召テ、日比ノ寢夫ヲ尋ル由ニテ遣レ之。十七日文治元年十月ノ夜半ノ事ナレバ、月ハ隈ナク照タリ。女程ナク歸テ、大息突申ケルハ、御使禿童ト覺シキハ、二人ナガラ土佐房ガ宿所ノ小門ニ死臥タリ。曉大佛詣トテ、大庭ニ大幕引、其中ニ鞍置馬四五十匹バカリ引立タリ。鎧物具身取付テ、手綱ヲ把、鞍ニ手打懸テ、只今乘ランズル樣ニ候ト云ゾ遲キ、土佐房昌俊併兒玉黨等六十餘騎、

十七日ノ子刻ニ、伊豫守義經ノ六條堀川ノ宿所ニ押寄テ、時ノ聲ヲ發ス、館內ニハ不慮事ナレバ、義經ヲ始トシテ、纔七騎ゾ有ケル。伊豫守時聲ヲ聞、サレバコソ、起請法師ガ所爲也。但、其儕ハ尤カラズ、何事カ有ベキトテ、チトモ不騷。靜、者ハアナドルマジキ事也トテ、ヨロヒヲ取て打懸灸治シ亂テ勞ノ折節ナリケレドモ、鎧小具取付テ緣ノ際ニ立出デ門ヲ開テ、下知ス。舍人馬ヲ待儲タリ。義經馬ニ乘テ蒐出、今日近來、日本國ニ誰カハ義經ヲ思懸べキ、況、唱俊法師ヲヤ。アマスナ者出トテ、竪横散々ニ蒐ケレバ、木葉ヲ嵐ノ吹樣ニ、サト左右ヘゾ散タリケル。云々。

（平家物語卷十二土佐ぼうきられの事の條）

（上畧）判官は磯のぜんじといふ白拍子がむすめ、しづかといふ女を寵愛せられけり。しづかかたはらをへんじも立さる事なし。靜申けるは、大路は皆むしやで侍ふなる。御内よりもよほしのなからんに、是程まで大番衆の者共が、さわぐべき事やさふらふべき。いかさまにも、是はひるの起請法師がしわざと、覺ゑさふらふ。人をつかはして見せさふらはゞやとて、六はらの故入道の召つかはれけるかぶろを三四人召つかはれけるを、二人見せにつかはす。ほどふるまでかへらず、女は中々くるしかるまじとて、はした物を見せにつかはす。やがてはしり歸つて、かぶろと覺しきものは二人ながら土佐房が門の前に、切ふせられてさふらふ。門の前には、くら置馬ども引立〳〵、大まくの中には、者ども鎧き、甲のをゝしめ、矢かきをひ弓れしはり只今よせんと出立候。少も物まうでのけしきとは、見ゑさふらはずと申ければ、判官さればこそとて、太刀取て出給へば、しづか、きせなが取てなげかけ奉る。たかひもばかりして出給へば、馬にくられいて、中もんの口に引たてたり。判官これに打のり、門あけよとてあけさせ、今や〳〵

と待給ふ所に、夜半斗に土佐房、ひた甲四五十騎、そうものの前に押よせてときをどつとぞつくりける。判官わぶみふんぞり立あがり、大音聲をあげて、夜討にも、又ひる軍にも、義經をたやすう討べき者は、日本國には覺ぬものをとて、はせまはり給へど、馬にあてられじとや思ひけん、皆中をあけてぞとほしける。云々

又、この一段を、日本外史には、面白く譯述したり。參考すべし。(日本外史卷の三、源氏下)

及義經去京師。從匿吉野山。山僧將攻之。義經賜靜金寶而別。使雜色護送。雜色等奪金寶、棄靜而去。山僧捕送京師。北條時政具狀報之。賴朝召致鎌倉、審問義經所在。靜固陳不知。然猶以其有身留之。賴朝妻政子聞靜善歌舞。欲召而觀之。靜辭疾不至。哀訴曰。妾本賤流。不足自惜。然己充豫州之後房。而今豈示恥於稠人哉。政子頻請不止。

この一段は、義經が都落の後靜が流浪して、遂に、鎌倉に送られ、節を守りて義經の所在を明さゞりしことなどを記せるなり。此の段以下は、東鏡より取りしなり。義經、既に、昌俊等を平げしかど、賴朝の怒益、甚しくなりて、遂に院宣をうけて、義經を討たんとせしかど、義經は、京都を出で、西海に奔らんとして果さず、潜に、吉野山に匿れたり。靜もこの行に從ひて、與に吉野山にありしが、吉野の山僧等、義經を攻めんとしければ、義經山を逃れ出でたり。佐藤忠信が義經に代りて忠死を遂げしはこの時の事なり。義經、身已に危くなりしかど、靜と訣別せんとて、金寶數多を與へて、雜色、即、足輕の如きものに、護送して京に至らしめたり。然るに、義經も、既に、多武峯の方に逃れければ、雜色等は、不法にも、靜の金寶を奪ひとり、途中より靜を捨て、逃げ去りしかど、靜は、女の身の一人山

中の路にさまよひ居ることとなれど、前後もわかず、ためらひ居るうち、早くも山僧等の目にふれて、遂に、捕へられて京へぞ送られたりける。

この時、北條時政は、頼朝の命によりて京都に在りしかど、靜を吉野山僧より送り來りしありさまを、鎌倉に報告せり。頼朝は、義經の所在を捜索しつゝある時なれど、靜に問はゞよからんと思ひて、急に召して鎌倉に至らしめたり。かくて、頼朝は、靜に義經に所在を訊問せしに、固く、知らざる由を申しけれど、事なくて止むべかりしに、然かも、靜、その頃、姙身中にてありしかど、之を生むまで鎌倉に留めらるゝことゝなりぬ。頼朝の妻政子は、北條時政の女なりしが、頼朝が平氏の爲に伊豆の蛭が小島といふ所に流せられし時、時政深く、頼朝に望を屬して、其の女の私通せしをも咎めず、遂に政子をして、頼朝の所に奔らしめしなり。これ即、後に、二位の尼、又は、尼將軍と稱せられし人なり、政子、もと靜が歌舞の技にすぐれたることを聞き居たりしかど、召して、之を觀んと思ひしに、靜は、頼朝が義經に對して愛情の薄きを心の中に恨み、且、その身の不幸なるをかこちつゝ、かく恥をうくることを快からぬことに思ひしかど、疾ありと稱して出でず。哀訴して、その情をのべていはく「妾はもと賤しき身柄のものなれど、自、わが身を惜むに足らねども、已に伊豫守殿の寵愛をうけて、その後房に入り側近く仕ふることを得たる身の、今、いかでか衆くの人中に出で、舞などかなでゝ、恥を人々にさらすことを得べきや。」とて固く辭しけれども、政子は、頻に請ひて止まざりき。(東鑑は、假名文にあらざれば引用せず)

既而頼朝與二政子一詣二鶴岡ノ社一。召レ靜命レ之。靜固辭曰。妾今日不レ堪二離別之悲一。寧有レ意二歌舞一乎。頼朝強レ之再三乃舞。工藤祐經擊レ鼓。畠山重忠擊二銅拍子一。靜先唱二和歌一曰。與志

乃也末。美禰乃志良由幾。不美和計天。以里耳志比登乃。阿登曾古比志幾。次歌離別曲。又唱曰。志豆也志豆。志豆乃遠駄末幾。玖里加陪志。牟加志遠以末耳。奈寸與志毛加奈。聲態絶妙。衆皆感愴。頼朝不懌曰。咄哉此女子。今日神前奏歌舞。應頌關東萬歳。而反慕叛人。歌離別曲何耶。政子曰。君昔爲流人。日密結終身之約。妾父憚時勢。爲防禁之。妾暗夜冒雨奔于君所。及君擧義旗於石橋。妾獨留伊豆山。而不知其存亡。日夜思念。今彼若忘豫州之恩。而不戀慕者。固非貞女之操。情動于中。而形于外。公宜矜恕。頼朝乃推衣於簾外。以爲纒頭。

この一段は、即、鶴岡の廻廊にて舞をなしたる事を記したるなり。

頼朝、政子と丶もに、鶴岡八幡宮に詣でける時、靜を召して之に舞を命じ、社前の廻廊にて之を觀んとせしが、靜は固くいなみて「妾今日は離別の悲に堪へずして、心の中に思ひ乱る丶折柄いかで歌舞をなすに意あらんや」といひて辭しけれども頼朝強ふること再三に及びしかど、已むを得ず起ちて舞ひけり、工藤祐經は、鼓をうち、畠山重忠は、銅拍子を撃ち出しければ、靜、先、和歌をうたひ出しぬ。

吉野山みねの白雪ふみ分けて
　いりにし人のあとぞ戀しき

と。この歌は、古今集の冬の部に、

寛平御時后の宮の歌合の歌　壬生忠岑
みよしの丶山の白雪ふみ分けて
　いりにし人のおとづれもせぬ

とあるを、下の句を少しいひかへみよしののを吉野山といひかへたるにて、靜かその身の悲をこの歌をかりてあらはしたるなり

次に、また、うたひていはく、

しづやしづしづの緒だまきくりかへし
　むかしを今になすよしもがな

と。そのこわ音といひ、その態度といひ、實に、妙を盡したりしかば、之を見たる衆の人々、皆感歎せぬはなかりき。愴は、身にしみて感じたる心持なり愴然、悽愴など、熟語に用ゐらる。

頼朝は、かゝる絶妙の歌舞を見ても、甚不平なる面持にて「咄この女子め」と罵る口調にて、靜を下げしめ「今日この神前に於いて歌舞するに、關東の萬歳と祝すべかりしに、かへりて、叛人の義經を慕ひ離別をいたむ曲を歌ふは何事ぞや」と、咎めけるを夫人政子、傍より之をなだめていふやう「君がさきに流人となりて伊豆に在しける日、妾はひそかに修身の契を結びしに、妾が父は、當時の時勢は、平家の勢盛にして源氏の力なき時なるを以て、之が爲に、吾が二人の約を防げんとせしかば、妾は、暗夜にまぎれて雨の降るをもいとはず、君の許に奔りゆきたり。その後、君が義兵を擧げて石橋山に向はるゝに及び、妾はひとり伊豆山に留りて、君が所在だに知るを得ず、死生の程も明にしがたかりしかば、妾が心の中は、日夜に君が身の上をのみ思ひ袖の涙のひるまなかりき。今彼の女の身の上を思へば、實にあはれむべき事なり。彼もし、伊豫守の恩をもうち忘れて戀ひ慕はぬ程ならば、まことに、貞女の操をもてるものにはあらず、夫を思ふ眞情の心の中に動きたるが、覺えず外にあらはれ來れるなれば、公も、彼が心の切なるを察しやりて矜れみ恕せられよ。」とその身の頼朝に於ける關係より說き來りて辭をつくしゝかば、頼朝も、心に感じたりけん、遂にふかく咎めず、衣服を簾外にさし出し纏頭として與へて止めたりき。纏頭とは、もと歌舞をなせしもの、かづけものをなすに、其の頸に纏ひて與ふる故にいふといへり。

工藤祐經。梶原景茂等。就イテ靜ガ僑舍ニ飮燕。靜ノ

母磯禪師亦佐レ酒。景茂乘レ醉以二微辭一挑レ靜。靜垂レ涕曰。豫州鎌倉殿之連枝。我即其侍妾。卿己爲二其家人一。豫州若在。卿等豈得レ見レ我。景茂媿屈。既而生二男子一。賴朝命二安達清經一。棄二之由比浦一。靜號哭不レ與。清經奪去殺レ之。放二還靜於京師一。政子憐而遣レ之。賜賚頗多。

この一段は、人の辱をうけざりし事を記せり。靜が氣節を見るに足れり。

工藤祐經と、梶原景茂との二人、靜が寓居について、酒を飲みけるが、（燕は宴と通じて　宴席の意となり、又醼と通ず）靜の母磯の禪師もまた酒を佐けて酌などをなせり。景茂醉にまかせて、靜に對し、それとはなしに、辭をかけしに、靜は、之に應せざるのみならず涕を流していふやう、「伊豫守殿は、鎌倉殿（賴朝）の連枝、即、兄弟にて、我は、その侍妾なり。卿は、鎌倉殿の家人、即、家來にてあれど、もしも伊豫守殿在さば、卿等は、いかで我が顏を見るを得べき。」とていたく辱しめたりしかば、景茂も言葉なくて媿ち屈しぬ。かくて、靜は、產月になりて、男子を生みけり。賴朝、安達清經に命じて、之を由比の濱の水中に棄てしめんとせしが、靜は泣きかなしみて、與へざりしかば、清經之を奪ひ去りて殺しぬ。かくて、靜は事すみて京師に放ちかへされたりしが政子は之を憐みて多く物を與へて遣れりとぞ。賜賚は、たまものなり。この後、靜、尼となりて世を沒へきといふ。

日本外史にも、鶴岡の歌舞の條は面白く記せりたゞ歌を載せず、味やゝ薄き感あり。又、本居宣長の玉かつまの中にも鶴岡の一條を記せり。これも、東鑑の文を假名ぶみに譯したるまでのものなれど、一讀せば、參考となるべし。

靜の節操正しく勇氣ありしことは、いま更にいふべきことならねど、卑賤の女子には、古今、實に得が

たき貞女なりけり。今左に、室鳩巣が駿臺雜話の中に、烈女種なしといへる條に於いて論じ置けるをかゝげて、予が評論にかへんとす。

翁(鳩巣)むかし加賀にありし時ある人のいひしは、「およそ、人の諸惡、大小によらず、改めぬれば、世にいひわけあり。舊惡は少しも疵にてなしたゞ、改めてもいひわけのたちがたき、事ふたつあり。士の死ぬべき場をはづしたると、ぬすみしたると、このふたつは、一たび其の事ありては、一生の疵となりて、其の人ながくすたりぬべし。しかれば、士の家に生るゝ者には、男女ともに、幼少より節義の事を常にいひきかせて忘れさすまじき事なり。」と尤なる事なり、然るに、すべて、婦人は、柔順を専にして、剛健をつとめずとはいひながら、士の婦女としてはこの一ふしを忘るべからず。もし不慮の變にあはん時に、心よはくして、節義を缺きなば、日ごろの婦行もいふにたらず。

(中畧)こゝに、その人からにも似ず、奇特に覺ゆ侍るは、源義經の妾靜が事にて候、靜は、京師にて名を得たる舞妓なりしが、材色をもて、義經に寵せられけり、義經都を落ちし時、靜も、吉野までつきまとひしが、それより、都へ歸り居りしを、頼朝、鎌倉へ召しよせて、義經の行衛をとはれけれども、吉野より末はしらぬよしを申す程に、さて放ちかへさるべかりしを義經の子を懷孕してありける程に、誕生する迄とて、しばらくとめられしが、兼ねて、舞曲の藝、世に隱れなかりければ、頼朝その藝を見ばやとて、鶴が岡の社にてまはせられける。靜心うき事に思ひて、再三辭しけれども、しひて命せられしかば、いなみがたくて舞ひけり。頼朝、時といひ所がらといひ、靜必祝歌をこそ唱ふらめと思はれけるに、さはなくて、

しづやしづしづのをだまきくりかし
昔を今になすよしもがな

吉野山峯の白雪ふみ分けて
　入りにし人のあとぞこひしき、

と、かなでければ、頼朝怒りて、今日の事なれど、時世をぞ祝すべきに叛逆の義經をこふたふこと奇怪なりとて、すでに罪にも處せらるべかりしを、夫人政子のわび言にて、事解けにけり。靜これを蔕芥ともせず、程へて都に歸りつゝ、一生世に出でず、身を隱して終りけり。かの草木もなびきし威に恐れず、勢に屈せず、始終志をたてゝ、義經に負かざりし事、高館にて殉死せし輩とも並稱すべし。ちかきころ、京師の醇儒中村暢齋が撰びしとかやいふ、倭漢貞烈の女を載せし姫鏡と題せし書に、是をいひ殘しけるこそ遺恨なれ。是は、靜娼家に生れて、出所たゞしからざる故なるべし。それはさる事なれども、名敎を裨くるためには、是等をもすつまじき事と、翁は、かねて思ひし程に、今、各へも（これは座中の客に對していふ言葉なり）申しつるぞかし。詩にいはく、采レ葑采レ菲。無レ以二下體一。との謂なり。（つゞく）



漫録

神宮御炎上小史（四）

安藤正次

第二　御炎上（續）

（へ）後土御門天皇文明十八年正月廿七日

是實に寶稱以後第六度にわたれる御炎上なり。然れども、此の時の御炎上は他の諸舊記にみねざる所、只神廷紀年に、松木滿彥年代記を引きて、

十八年丙午正月廿七日甲戌外宮火

と記せるのみ、されどいかゞともはかるゝものから、暫く記して疑を存す。

(ト)同年十二月廿二日

此の時にわたり世は既に足利氏の季世にして、諸國の紛亂は實に甚しきときなりき。されど、殺伐の風はいたる所にみち〳〵て、伊勢の内外兩宮神官の爭鬪も、遂に兵革の間に相見ゆるの不祥となり、清淨の地もあはれ修羅の巷と變じ、神聖の域もかなしや凡夫蹀血の穢を蒙りぬ。さてもかしこや、外宮の正殿も、この時兵火の災にかゝらせ給へり。

事の起因をたづぬるに、始山田の神民等關を岡本に据ゑ參宮の上下の外は、諸國の行旅をして宇治に入らしめず、宇治の神民等之を國司北畠具方に訴ふ。具方。よりて山田の神民に諭して關を徹せしめむとせしかど、聽かずし、却りて益々之を嚴にす、具方大に怒り、十二月十九日勢を發し、同廿日山田をやく、神民の首魁榎倉武則等外宮に據りて防戰す。されど寄手はその神域をけがさむ事をおそれ、暫く躊躇せる程、同廿二日の早曉武則等宮をいでゝ突戰す。然れども武則等遂に敗るゝに及び、退きて正殿に火を放ちて自盡す。嗚呼神聖なる宮居も遂に兵火にかゝらせ給へるなりき。

親長卿記、文明十九年正月の條にいはく、

二日（中略）今日聞伊勢外宮正殿云々子細可レ尋就ニ神宮燒亡ニ定禁中之儀可レ有ニ子細ニ可レ被ニ尋決ニ事歟　或人云出雲大社去年九月二日燒亡云々　後聞於ニ神殿内陣ニ軍勢籠切腹數人云々其後懸火先代未聞事也可レ有ニ謹愼ニ事也

(チ)同　延德元年八月十八日

この時外宮の故殿の御炎上ありしこと、御湯殿上日記、子良館舊記等にみえたれど、くはしきことは明ならず。

(リ)同　延德二年九月十四日

此の時は前年の御炎上により、しばしが程としつらひれきまゐらせし外宮の假殿に御炎上ありしなり。

神廷紀年五九月十四日癸巳子刻外宮假殿災（内宮子良舘記）

(ヌ)後柏原天皇永正二年十二月廿四日

此の永正二年の時の内宮の火は、綿屋四郎左衛門の宅

よりいでたるものなりしが、幸に御正殿には及ばざりき。神廷紀年に、内宮子良舘記を引きて記していはく、

十二月廿四日乙亥内宮舘火燒ニ御厩子　良舘由　貴殿忌火屋殿御稲倉瑞垣ニ神体渡ニ御河ニ即日還　幸ニ禰　宜守晨四禰宜守武奉仕火起ニ綿屋太郎左衞門宅ニ

(ル)同　永正九年十二月十九日

續史愚抄、永正九年十二月の條にいはく、

十九日己未内宮玉垣門荒垣南面門端等火相殿御船代蓋開神劔御座内亂歟由後日禰宜云（或作二十一月ニ誤矣）

と、此の時も幸に正殿には別條れはさゝりしなり。而して、内宮永正引付等には、之を十一月十九日庚寅のことゝ記したれど、廢朝のことの翌十年正月十六日に仰せいだされたるなどより考ふるに、かたがた續史愚抄の十二月といへる方よきやうにおぼゆれど、今は之によりつ。

(ヲ)後奈良天皇天文六年十一月廿九日

次ぎてこの年また内宮諸門に火あり、續史愚抄、天文六年十一月の條にいはく、

廿九日乙巳今夜子刻内宮瑞垣玉垣門等火後日禰宜云

(ワ)後西院天皇萬治元年十二月三十日

此の時は内宮御正殿及別宮の新古の御殿とも、すべて御炎上の災にかゝれり。火は近郷の民家よりいでたるなりき。神廷紀年にいはく、

十一月壬辰晦午刻宇治郷波多村火及ニ内宮正殿荒祭風日祈宮大橋ニ御躰各御ニ於山中ニ即日上奏

と、而して續史愚抄また同じさまに記せり。

(カ)靈元皇皇天和元年十二月十三日

是最近の内宮正殿の御災上なりき。爾後今回にいたるまで、正殿の災にかゝらせ給ひし事はあらざりしなり。此の時の火は正殿の東棟よりいでたるなるといふ。神廷紀年、續史愚抄の記す所ともに同じ。

續史愚抄　十三日壬辰今夜子刻皇太神宮及東西寶殿災（自正殿東棟火起瑞籬内悉燒失云）神躰無爲先移山中次奉安古殿（鎮坐已後至今度五十五度云）他日日　宮司及内宮禰宜等云

按ずるに、右にいへる鎭座已後五度とは、寶龜、延暦、仁安、萬治、及この天和の内宮正殿御炎上をさせるなるべし。

(ヨ)仁孝天皇文政十三年(天保元年)閏三月十九日次ぎて内宮荒祭宮の御炎上ありき。此の時正殿も一時は危くおはしたりしが、幸に御無事なるを得たり。事はくはしく文政回祿日記拔書にみえたれど左に摘記す。

文政十三年閏三月十九日夜亥刻頃今在家裏町岩崎左門宅より出火(清酒作内人 茂木田久家)折節西北風強表町江飛火忽大橋邊江燒移り橋姫社大橋兩鳥居水除杜迄不殘燒落今在家町九分通燒失津長社大水社無二別條一但樹木少々燒亡也橋姫社御躰者祝部大國左内盛業早速駈者奉レ出二宮中一奉戴候事夫より舘町江移り彌火氣盛に相成り表町家裏町家山手迄一面に相成次第に南江燒上り就中荒祭宮江飛火新殿も引續き燒亡仍駈着之正權禰宜等恐怖之至に候へ共奉レ開二御扉一戴二御樋代一風宮新宮奉レ移夫より皆々本宮へ參り衞護之處八十末社江飛火此程古殿も燃立双方火炎頻に本宮江靡來兩寶殿及本宮も甚危相見候に付彌以周章不レ堪二戰栗之至一仍又々正殿奉レ開二御扉一御樋代内相殿共奉レ成二出御一同風宮新宮江奉レ成二動座一正權禰宜物忌諸内人一同奉レ成二守護一本宮火炎者町在駈付の人夫幷年寄共に爲二相防一候事誠以萬治以來之大變也

過般六月の御炎上の際、一時風日祈宮へ御動座ありしも、實にこの時の例によりてなりといふ。

以上にて歴代御炎上の時日は大方記し盡せり。この後明治の始にあたり、外宮に御炎上の事ありし由なれど、今手許に參考書を欠けるにより詳記することをえず、後日折をえて補ふべし。

いでや是より、朝廷に於ける廢朝廢務、及奉幣使發遣等の事例を見むとす。

最明寺殿教訓百首（八）

福原菫子　寄贈

禮のなき人は人にて人ならず
　ひと〻思ひてとがめでしすな

人として禮義なきは人面獸心とて、かたちは人なれど心は鳥獸なり、此の如きものに無禮をとがむるは、鳥獸に向つて禮義をたづぬるに等しく、詮なき事也とぞ。

うつけものと思ひて人をあなどれだ
　我もうつけの數に入るなり

いやしき諺にも、馬鹿の口へも三度ゆびを入るれどくひきるといふ事あり。うつけ者と見たらんには、遠く々とあしらひて、とり合はずかまはぬやうに爲すべし。うつけと知りてなぶり侮どれど、思はぬわざはひを受て却て耻を受るものなれど、我が身もうつけのかずに入りたると同じきなり。

たはむれはみないさかひの基ぞと
　思ひて常にたしなめよかし

座興、ざれ事など、一座の興を催ふすものなれども、これもこうずる時は人の耳にかゝる事も出で來て、戯言も實となり、喧嘩口論に及べど、却つて興さむるものなり。先賢の詞にも、戯言なれども思ひより出で、戯動なれどもはかるより生ずといひて、深くいましめれかれたり。

兒法師尼と女の醉ひくるひ
　かへす〴〵も見ぐるしきかな

兒と女は言葉じんじやうにして、立居ものしづかなるこそやさしけれ、大盃をかたぶけ、行義を取亂し、大聲高笑ひなど、すさまじく、尼法師の醉ひだれての〻しりあひ、うでたてするなど、淺猿く見ゆ。惣じて酒はつゝしむべきものなれども、とりわけこれ等のものは酒の席に近づかぬこそよけれ。

僻言も難も酒よりおこるぞと
　よく心得て斟酌をせよ

酒に醉時はいかなるものも本性を亂し、いふまじき事をも云ひ、爲すまじき事をもなして人に無禮をはたらき、勤めを怠たり家職を忘るゝたぐひまゝ多し。古より國を失ひ家をやぶる、萬の災難惡事も、多く酒より起れり、禹王と申せし聖人は、儀狄といふもの酒をつくりて、獻つりたるを飲み給ひ、後の世必ずこれを飲んで心を亂すものあらんとかなしみて、儀狄をうとみ給ひけるとなり、恐るべきことゝなり。

かぎりなくはらだつことのありとても
色にもらして聲高くすな

腹立ち怒る事出で來りたりとも、其まゝ顏色に顯はし言葉に出すべからず、心の中にて怒るべき事か、怒るまじき事かを思案して、是非利害をわきまへ、怒らで叶はぬ事ならで心に任すべしと雖も、かく爲す時は、大方は怒らずしてすむものなり、古人の、怒りは難を思へといふ義理を能く味はふべし。

あながちに尋ねもいらじしづかなる
人のこゝろぞみ芳野のおく

世の濁れるをいとひ心を淸くせんと思ふ人は、山の奥にこもりて心をすます、昔よりみよしのゝ奥は、隱遁する者の住所となせる所なり。然れども、大隱は市に隱るゝといひて、市中にありても人の爲に毛頭けかされず、人欲の爲にうごかされぬ人は、さながらみ芳野の奥に入りたると同じ心なりとなん。

よしさらは心に物をまかさずて
ものに心をうちかませかし

我身さへ我心に任せぬ世の中なれど、まして人を我心に任する事は叶はぬ事なり、さあらで所詮かなはぬ事を思ひなやまんよりは、我意をやめ、物に隨がひて心を用ふる時は、何事も迷ひそむく事なく、只順なる境界に心を安んずべし。これ古語に、廓然として大公なれば物來りて順に應ずといふは、それ此事ならん歟。

かけぬべき月さへ今はみち汐の
さし引はやき世とは知らずや

人間のありさまは、月のみちてかへるが如く汐の滿干あるが如く、盛なるものは必ず衰ろへ、驕るものは久しからず滅す。禮記に云ふ、志はみつべからず、欲はほしいまゝにすべからず。易にいふ、滿は損を招くと。惣じて事は内輪なるをよしとすとぞ。

階なくて雲のうへにはのぼるとも
定めある世とあらそひなせぞ

惣じて世の中の事は、心にはかりたる外に出づるもの多し。それを情強く、かたあらそひするは、心のせまき故なり。智ある人は常に言葉をのこして、云ひつくさゞるもこれが爲ならん、はしなくして天に登るといふ事は、決してなき事なり譬ひこれは成得る事とするもそれよりも、猶不定なるは人間界の有樣なり、必ず〳〵不定を賴みて、心にとゞこほることあるべからずと、深くいましめたるなり。

教へぐさ

春の屋の翁

人の親の心はやみにあらねども子を思ふみちにまどひぬるかなと兼輔の朝臣が詠み給ひしはげにさることにて、己が子をあしかれと思ふもの誰かはある。されど、なか〳〵にまとびぬるもの多きは、かへすがへすも口惜しきことならずや。今こゝにとり出でたるは、怪談諸國物語といふ古書の一節にて、古人の用意のほど、とりて今も猶鑑となすに足れり。親の子を教ふるは、かくこそあらまほしけれど、ひたふるにこひねがふあまり、抄して大方の婦人に示す。

丹後の國の仕官樫原金五左衞門一子金八、同家中黒丸甚五兵衞嫡子甚九郎、金八と同年にて十五歳なりしが、京より下りし鼓の指南する者の弟子となりて、生れつきの堪能番數もあまた覺ぬけるを、師匠の身にうれしく、兩人の器用なる事を一家中ふれありき、終に大守

の耳に入り、金八、甚九郎目見を仕り、すぐに廣間にて高砂を拍申せとの御意ありがたく、是は急なる囃子、いひ合せもなりがたくまかり出る時、甚九郎の親甚五兵衞はずゐぶん鼓を出かせとぞかり申つけぬ。金五左衞門は金八に申ふくめぬるは、侍の遊藝さのみはめられて益なし。さりながら目見藝なれど無調法仕るな。自然甚九郎うち損じなど、其方もわざとならざるやうに拍そこなふべし、必一分のてがらだては見ぐるしき儀なりといひつけぬ。しかれども、兩人大皷小皷首尾よく相つとめ、大守機嫌よく拜領物を頂戴して退出仕りぬ。其比金五左衞門が金八への敎訓つたへ聞きて、一家中感じ入りたる取沙汰なり。或る時黑丸甚五兵衞切渡の文珠へ代參申つけられし歸りに、むかし此入海より蜑のかづきあげたる長八寸横四寸の蚫貝庄屋が許にありしを見事なる献上物とて披露せしに、大守もとより酒に長じられし折なれどことさらの機嫌にて瀧細工人に蒔繪彩色手をつくさせ、盃の開眼とて昵近の者とも相つめける。其の中に右の金五左衞門は上戸の隱れなく側ちかく召しよせられ、それがし常に大酒の異見家老共内々訴訟すれども、唐本朝の賢人歡びて酒德頌をつくり、醉聖の詩あり。萬葉集にもれはく酒の歌をつらねて、風月花鳥、紅葉白雪の媒とす。たゞし。下戸の料簡は各別の儀なり。其方もひとつなる口の樂、同服中なり。忰金八も、父か子たるべしとあれど、金五左衞門つゝしんで申しけるは總じて親の身として子に武藝學文をならはせ、早く上手になれかしと存るは親の常にして人の評判までうれしきは人情のならはしに候へども、酒ばかりは子に飲みならへかし、上戸になれかしとは存せず候。一盃たべ申と噂うけ給れど、いかなる醉狂かあらんと氣づかひ絶ねたることは、必竟不便に存る故に候と。酒の失を詞の底に含みて長閑に答へ申けれど、大守さすが得心ありけるにや、その日の開眼の儀止て後、家中領内の町内百姓等まで、大盃停止の觸、家老中より申わたされ。金五左衞門

が忠言を又感じけり。

筐底楮餘（二）

紫光

○現時は是一の過渡時代なるかな。維新以來三十年間の進歩は實に激變にして、此の間は新舊の思想を調和せむにはあまりに短兵急なりき。されど、維新前の所謂舊思想が未だ社會に瀰漫せざるにあたり、はやく現時の教育によりて養成せられたる新思想は、澎湃として之を壓せむとする傾向を示しぬ。是即十數年來新舊思想の衝突として社會のいづれの側に於てもみとめられしものなり。而してこの衝突は、殊に家庭に於て著きものあり、父母舅姑の行ふ所、はかる所が、現時の時代には疎きに過ぐるあるは、その子たり婦たるものゝこゝろよしとせざることとなるべく、而してその子たり婦たるものが、時代の風潮に感化せられたる結果として、公共事業、慈善事業等に盡瘁するは、またその父母舅姑の眼より見るときは、家事を忽にする等の譏をまぬかれ難かるべし。これその一例をあげたるに過ぎざれども、すべてが斯くの如き情態に陷るは、また免れがたき數なりとす。此の間に立ちて、子たり婦たるもの、深く此の際に留意するなくど、遂に不幸なる家庭の破綻を生ずるにも至るべきなり。心せでやは。

○足利時代の道義は全く頽敗して、義子節婦などは見むと欲すともうべからざる時にあたり、公卿の女の如きは、數夫に見ゑて恬としてはぢず、恰妓女の如くなるが間にありて、さすがに武士の家庭にありては、幾分かその往昔の氣風の餘喘を保てるものありき。畠山氏清その一族と義滿に抗し、大内義弘畠山基國以下の諸將と八幡にたゝかひて、終に陣沒せしや、その二子、右馬允、七郞の二人、父の遺命にしたがひて、母を高野の根來に省す。然るに、母是が對面をゆるさずして告げしめけらく、父の死を見すて、生を偸みて母に伴は

むとする言甲斐なさよと、終に自殺す、死をもちてその子を激勵せしむるその志氣質に凛たるものあり。惜哉その姓氏をつたへず、猶また、彼の持氏の遺孤、春王、安王を抱きて鎌倉の難をのがれ、日光に走り、結城滿朝にときて結城、古河、關宿の三城を治めしめ、かなはぬまでも頽瀾を既倒にかへさむとしたる乳母長尾氏の忠烈、こもまためづらしからずや。

才くらべ

蓬生屋女史

井戸龜右衞門

井戸龜右衞門は、細川三齋に仕へて三千石を食みぬ。其友に増田藏人と云ふありて、いと中よかりけるは、もと藏人の父沒するに臨み、藏人を以て、龜右衞門に托せし故なり。去かるに藏人は祿六千石を食めど金祿はしいまゝにうちすてゝ家甚だ貧し、龜右衞門去れ〳〵訓戒して節儉を守らしむ。されど藏人は之を聞かむともせず、六千石の食祿あます所は借錢のみ、龜右衞門ふかく之を患ひ、父より托されし友如何にもして之を諭さんものと日來心を碎きぬ。さてしも藏人江戸へ赴きやゝありて歸り、東海道桑名まで來りたりしに、龜右衞門健卒十人を率ゐ、馬に乘りて、いそぎ走らし藏人を見るも知らざるげに、あわて驅せゆきぬ。藏人そのつねと異なるさまを見、怪しみて、何處にか行かんとすと問へども龜右衞門顧みもせず、なほあわて馳せゆくに、藏人馬を旋らして、之を追ふ一里亡かり、龜右衞門〳〵、何事のいそぎかある。故をも告げね、われに告げしとて何の害かあらん、龜右衞門〳〵よと去きり馬に鞭うち、呼はり追ふに、龜右衞門はじめて馬より下り、藏人に答へて曰く、大坂事を擧げんとす、吾が君軍を出す事近きにあり。故にわれかく事に走るなりと聞くや、藏人大にわれどろき、己が身を省て曰く、吾れ家まづしく兵馬を調ふること能はず、如何にせんとて當惑色に見ゑたるに、げに加々山隼人は

貴君と祿を同じうすれど、船艦數艘騎歩四百、將介を待ちてまさに、兵を發せんとせり、子は同じ祿をはみながらそのさま、心に愧ぢざるやと龜右衛門が諌め、藏人は今更に道理至極、後悔すれども及ばずたゞ茫然出る所を知らず、途方にくるゝむりなり。つく〴〵と後悔の樣子を見るより、龜右衛門徐かに藏人に向ひ、只今の言たゞ僞りのみ、されど、やがては大坂事を起し天下亂れなん、あらかじめ備へざるべからず、夏日に袍を製し、晴天に傘を作る古人の良規なり、子平日、儉德を修めずぞ、異日、事あるの際、狼狽措く所を失ふ今日の如きあらむと。藏人聞くよりいたく感悟し、其信實をよろこび、それより勤めて用度を節し、儉約身を收めしかぞ、後三年にして、果して大坂の役ありしに、其賦を具するを得しは、實に龜右衛門が信智のいたす所と、身を終るまでよろこびけりとなり。

泉彌八右衛門の智

備前の國に、兄弟田を爭ふものありて、互みに官に訴へ、黑白互みに爭ひ決せず、國守光政、彌八右衛門をして之を裁決せしめたり、彌八右衛門何も云はず、たゞ兄弟を一室に入れおき、酒を與へて共に飲ましめ、食をそなへて共に食はしめ、沐浴をも共につかはしめたるに、はじめは互みに右左分ち扣へて、



互みに睨めあひけるが、遂に同胞の同じ乳をのみ同じ膝下にはぐゝまれ、同じ膳に食をものせしむかしに心のかへりてや、次第〳〵にうちくつろぐに從ひ、かためし互みの膝もうちとけ、張りし臂も低うなりやがて兄なる人弟に向ひ今、互みに爭ふ所の田地二人同じく耕すは如何にと云ひければ、弟もよろこび、そは固より欲する所なりと云ふ答へに早速同胞のむかしにかへり、やがて、彌八右衛門に告げて、訴訟をとりけしを願ひしに、泉よろこび、善い哉、善い哉とて、教るに、同胞相伐るべからざる理を以てしたりしに、兄弟いたく感じ、涙を流して下りけるが、それよりは又兄弟むつまじう共に耕して天倫を全くせしとなり。これ彌八右衛門が仁裁の致す所と云ふべし。

蘇小妹三難新郎（五）

湘玉女史　節譯

さて少游は小妹を妻とせしより後は、夫妻の間にさしたる物語りもなく、只和美く暮し居たり。其後少游は官によりて淅中と云ふ土地に行くことゝなり、小妹も夫と偕に行きけるが、東坡學士はなほ京に在りしにより、小妹は頻に哥々の安否を思想て、夫にしばしの暇を乞ひ、京に到りて東坡を省視たり。こゝに東坡の禪友に佛印禪師と叫做す一個の僧あり、嘗て東坡に官途の煩累を說き、急流勇退を勸めしことあり、一日この禪師より東坡の許に長歌一篇を寄せ來りたれど、東坡之を看るに、寫得の怪異なる、一字毎に同じ字を連ねて一百三十對、この寫したる字はこれ甚の字なりや。

野野　鳥鳥　啼々　時時　有有　思思　春春　氣氣
桃桃　花花　發發　滿滿　枝枝　鶯鶯　雀雀　相相
呼呼　喚喚　巖巖　畔畔　花花　紅紅　似似　錦錦
屛屛　堪堪　看看　山山　秀秀　麗麗　山山　前前
煙煙　霧霧　起起　清清　浮浮　浪浪　促促　潺潺
湲湲　水水　景景　幽幽　深深　處處　好好　追追
遊遊　傍傍　水水　花花　似似　雪雪　梨梨　花花

光光　皎皎　潔潔　玲玲　瓏瓏　似似　墜墜　銀銀
花花　析析　最最　好好　柔柔　茸茸　溪溪　畔畔
草草　靑靑　雙雙　蝴蝴　蝶蝶　飛飛　來來　到到
落落　花花　林林　裏裏　鳥鳥　啼啼　叫叫　不不
休休　爲爲　憶憶　春春　光光　好好　楊楊　柳柳
枝枝　頭頭　春春　色色　秀秀　時時　常常　共共
飮飮　春春　濃濃　酒酒　似似　醉醉　閒閒　行行
春春　色色　裏裏　相相　逢逢　競競　憶憶　遊遊
山山　水水　心心　息息　悠悠　歸歸　去去　來來
休休　役役

東坡は兩三遍繰返し看たれども、其讀方の考か附かざるゆゑ、只管沈吟して居たるに、側にありし小妹は、これを取過りて一覽了然、便ち道やう、哥々此の歌は何の解し難きことあらん、妹子念て你に聽かせ申さんとて、即時朗に誦して云ふ、

野鳥啼　野鳥啼時時有思　有思春氣桃花發
春氣桃花發滿枝　滿枝鶯雀相呼喚　鶯雀相
呼喚巖畔　巖畔花紅似錦屛　花紅似錦屛
堪看　堪看山山秀麗　秀麗山前烟霧起　山前烟
霧起淸浮　淸浮浪促潺湲水　浪促潺湲水景
幽　景幽深處好　深處好追遊　追遊傍水花　傍水花
似雲　似雲梨花光皎潔　梨花光皎潔玲瓏　玲瓏
似　墜銀　花析
似墜銀花析最好　最好柔茸溪畔草　柔
茸溪畔草靑靑　雙々蝴蝶飛來到　蝴蝶飛來到
落花　落花林裏鳥啼叫　林裏鳥啼叫不休　不休爲
憶　春光　好　爲憶春光好楊柳　楊柳枝々春
色秀　春色秀時常共飮　時常共飮春濃酒
春濃酒似醉　似醉閒行春色裏　閒行春色
裏相逢　相逢競憶遊山水　競憶遊山水
心息　心息悠悠歸去來　歸去來休休役役

東坡は小妹の念得しとて朗誦するをきゝて大に驚き道ふ、吾妹の穎悟はとても吾が及ばざる所なり。若し男子にてありたらんには官位遠く我に勝るべきにと

歎賞し、つひに佛印禪師の長歌を原の儘に寫し、又この長歌に小妹が定めたる句讀をも寫し一封兒となし、自己は再讀したれども讀み得ざりしを、小妹は一覽して知りたりと云ふ事をも書添へて少游の許に寄與たり。而して少游は先づ佛印の書たるを看たれども東坡と同じく解し得ず、後に小妹の句讀を定めたるを讀みしに初めて夢の覺たる如く解りけれど、少游は深く己の及ばざるを愧ぢ、且感歎の意を増し、直に短歌を以て答て云ふ、

未レ及二梵僧歌一　詞重而意複
字々如二聯珠一　行々如二貫玉一
想汝惟一覽　顧我勞二三復一
裁時思二遠寄一　因以頒顦觸
汝其審思レ之　可レ表二子心曲一

この短歌の後に疊字の詩一首を製成て書添へたり、此詩も亦寫得甚古怪なり。

憶
別　離　時　聞　漏　轉
期　歸　阻　久　伊　思
靜

少游の書信到着せし時は、東坡と小妹と、湖上に浮びて採蓮女の蓮を採るを看て居たり、東坡は先づ書を拆き看了りて之を小妹に遞與して道ふ、倆は能くこの疊字の詩を解しうるや否やと、小妹道ふ、此詩は乃ち先きの佛印禪師の體に倣ふたるなりとて即ち念み云ふ、

靜思伊久阻二歸期一　久阻二歸期一憶二別離一
憶二別離一時聞二漏轉一　時聞二漏轉一靜思レ伊

東坡は、この詩も亦速に吾妹の能く解き出すを見て歎じて道ふ、吾妹は眞に世聰明人なり、今日採蓮の勝會に於て、各即事一首を作り、少游に寄せ與へ、你と我と今日この樂き游を爲したることを知らしめんと、東坡の詩成る、小妹の詩も亦就る、小妹の詩に云ふ、

闋 新 歌 聲 漱 玉
採
一 津 楊 綠 在 人 蓮

東坡の詩に云ふ、

力 微 醒 時 已 暮
賞
酒
飛 如 馬 去 歸 花

少游に寄するが爲に小妹の作りたる疊字詩を念出して道ふ、是、

採蓮人在ニ綠楊津一　在ニ綠楊津一一闋新
一闋新歌聲漱レ玉　歌聲漱レ玉採蓮人

東坡疊字詩に道ふ、是、

賞レ花歸去馬如レ飛　去馬如レ飛酒力微
酒力微醒時已暮　醒時已暮賞レ花歸

この二詩少游の許に寄られけれど、少游は讀み罷りて歎賞して止まざりけり。其他夫婦酬和の詩は甚だ多けれど、今詳に述ぶる能はず、のち少游の才名ますますあらはれ、徵されて翰林學士と爲り、二蘇と官を同じ、一時郎舅三人ともに並びて史職に居しは、古より希にある所なり。是に於て憲宗皇帝の母君なる宣仁太后は、蘇小妹の才を聞召され、毎々內官を遣はされて、絹帛、あるは飲饌の類を賜り、他の題詠を索められ、一篇を得る毎に宮中に傳誦し、北都京都に播はりたり、其後少妹は少游に先ちて卒けれど、少游は小妹の事を思ひ續けて、終に終身復娶ざりしと云ふ、詩有り證と爲す、

文章自レ古說ニ三蘇一　小妹聰明勝ニ丈夫一
三難ニ新郎一眞異事　一門秀氣世間無

かきあつめ（四）

草の屋主人

知りたるを知りたりとせよ、知らざるを知らざるとせよ、これ知れるなり。とはよき名言、知らぬを知りたる貌するは、かしこき人に見られむとして、中々笑ひを招ぐものなりかし。むかしある人その友の許へ招かれて行きぬ。なは數名の人招がれて集ひぬ。さて床の間

に、土佐光信が畫ける一軸ありけるを見て、一人愛敬半分、此の畫は如何なる人の畫けるにやなど尋ぬるに、傍へより之は土佐の畫なりといふ人あるを、又傍の人きくより、よくも土佐の風をうつせるものよ、己れ去んぬる年、故ありて土佐の國に遊びたりしが、彼の國の髮結振り、形り姿、皆かくありしを覺えたり。よくも土佐ぶりをうつしたるもの哉と云ひけれど、その座にあるもの皆かたはら抱へて絶倒せりと云ふ、げに知らずして云ふ、いみじき耻をとる事多し。つゝしむべきことなり。

是もまた知らざるを强ひて知り顏したるをかしき人、ある人の許へ行きけるに、主人も酒肴設けてさまぐ〵もてなしけり。此の人兼ねてより物知りたる博士の聞え高かりけるが、主人の子十四五なるが、出で來りて、さる俳諧連歌の句に五侯鯖と申すことの候如何なる事にて候やらんと問ひけるに件の博士之を知らず、きとつまりけるが、知らぬは耻ぢとや思ひけん、暫くありて、むかし漢の代に五侯とて、五人の大名の候ひけるが、それが喰ひけるさむにて候と申しげる。鯖の字を俗にさばとよめど、さてぞ、云ひけるひとをかしかりけり。五侯鯖は、西京雜記に雜物を合せ烹るを鯖とは云へり、すなはち煎和の事なるを、知らぬといふが口惜しさに、かく云ひしにや、をかしきためしなりけり。

又ある國の守、かづの子の正字をたづねられしに近習の人知らず、此の家に伊藤源左が門人某をかつて扶持して抱へ置れしに尋ねけれど、種々利口のみにて、かづの子のことは、他に移して云はず、侯なほ正字正さむと欲し、闇齋派の儒者を養ひおかれしに尋ねられしに、私事は幼少より四書、小學、近思錄、朱子文集語類、性理大全等に眼をさらし、且つ又靜坐工夫暇なく候ゆゑ、かずの子の正字など瑣細の事は存ぜずと申したりしに、國守聞きて實に儒者に祿を遣るほど費なる事はあらじとて笑はれしとなり。四書五經をのみ學

ぶが學問にや、之もまたをかしき事にて、細川幽齋は學問するは乞食袋のやうにするがよし、よき事もあしき事も一つに入れ置きて入用に随て使ふべしのたまひしとかや。

笠子笑談集

金津常十郎

天事

西からどんどとなりて來た、扨もきびしき雷鳴じや、あヽ心ないかみなりかな。心がないから落る時場所もかまはず、善人でも惡人でも用捨はせず、それじやから聖人でも君子でも、天のなせるわざはひは猶さくべしぐらゐ云て居て油斷はならず。誰彼の貪着なしに落るから仕方がない。其落る勢は鐵石をも避けず。故に何處へ行きて身をかくさうやうもなく、かしこへ迯て其迯げた處へ落るやら、爰に居て爰へ落るやら、一向自分さばきのできぬ物ゆゑ、雷のなる時は、随分居りたき處に安心して居るが上分別じや。其上で雷にうたれて死ねばそれきりの世の中なり。のがるれば出ず入らず、もと〳〵じや、とても仕方のない物なり。

註に曰、天事は皆無心にして自然になるものなれど中々人事の義を以て推明らむること能はず。昔より善人に禍が有たり、惡人に結句福が有たり、或は孝子が雷にうたれたり。顔回と云亞聖は短命で、盜跖と云大賊が長命で有たりする、是皆天事にして、とても人事の定規にあたらぬなり。是皆眞の天然自然なり。又人事の上に付て天と稱するものなり。是則人事の順を以て天事とし、これに逆ふを私事とす。所謂、善に福し惡に禍すとは則人事の天に付ての謂なり、尤人事に於ては善を行へば福があり、惡を行へば禍が來ること目前なり。世俗の人、其眞の天事と人事の天事と別なることを知らずして、強て天事を極めんとするゆゑ、偶一事が義に的しても、又他

の事が其規合があはぬゆゑ、却て自心疑が起るなり。夫ゆゑ、孔子の子路に敎へたまふ言に、知レ之爲レ知レ之不レ知爲レ不レ知是知也と。是なり。其知るべきことは則人事なり。知れざることは是天事なり。智者は、彼人事の事は悉く其理を知て是を知れりとし、天事のこと、はとても慮り知り難きことを知る。是則天事を知るなり。故に孔子は、其人事の知るべきを知るとし、其天事の知るべからざるを知らずとするの位に至れど、是が誠に人事と天事との道理を知るものじやと仰せらるゝ言なり。善惡とも人事とは云ながら、善は則人事の天にて順なれど、天下の民を皆此善道へ引よせねど、人道は立たぬと知るべし。



梅の下風（七）

白魚女史

傳吉もそゞろ同情にむせかへり、其夜は故鄕の事、ゆく先きの事、此の家の事一つ身にしめ、千々に碎けて露まどろまず、あくる鐘の音を待ちかねて起き出でゝ朝げをも早うとゝのへさせ、天道さまは孝子をめぐむと聞きぬ。よく〳〵父御を大事になされよ、われ又江戸より歸らん折りは再び尋ね參らすべしなど、少女に云ひなぐさめて旅立てど、少女も何となく兄に別るゝ心地、引きもどゞめまほしくて涙みなぎるもあはれなるに、奥の方には病父が咳する聲えきりなり。他所の哀れを身にしめて、傳吉は朝早くたちつ。それより夜を日につぎて歩行み、やがて江戸表に着し、馬喰町三丁目なる信濃屋源左衛門方へ旅宿し、或る日案内者を賴み、彼方此方と見物し、江戸第一の靈場殊に田舍人が尤も尊重する淺草の觀世音へ參詣し、故鄕人に恙なく、



且つよき主取らせさせ玉へなど細々念じつゝ、これより口入屋に行きて奉公口をさがしけるに、吉原の曲輪にて第一の妓樓京町の三浦屋に米搗にて、一年給料三兩の口ありたり。傳吉よろこび、早速それに住み込み日毎に米を搗きけるが、濁り江には入れど、物がたき傳吉は、鄭聲淫曲洞房花燭の樂みをまのあたりに見、年も男の盛りながら、すこしもうらやましとも見ねど、うきたる行ひは更らになく、花さく春も、紅葉そむる秋も、たゞ心の行は故里の空のみ、伯母は如何にやしつらむ、妹は如何に衣やうつらむなど思ひめぐらせど、都ながら故郷の草の枕より露けく、ぬる夜のかずも少なく、たゞ出精し、はやく故郷へ歸へり、家をも起し、人をもやすめんものをと思へど、床も枕のさびしくて、鳥の音をうながすばかり、たゞとく起き、一心に米を搗き、殊に主に信切にして多くの米もつきべりなきやうに、且つ一粒をもつきべりせぬやうとりあつかへど、主人もよろこびて、傳吉を大切にし、いつか三浦屋の白鼠と云ひはやさるゝまで成りぬ。殊に傳吉は儉約を第一とし、年毎の給料半ばは國許へ遣はして伯母と妻との衣食の足しになし、殘りは主人へ預けて一錢をも費やさず、はやく故郷へ錦を飾らむとかへらぬ光陰の早く過ぐるを數へつゝ、一心に出精する程に、ひまゆく駒の足はやく、いつしか五年の年月を重ぬるほどに、四季の給料、臨時の貰ひもの等積り〳〵てはや百二十兩程になりたり。かくて日來の宿願も成就したりと、頻りに故郷なつかしく、身の暇を願ひけるに、三浦屋の白鼠と云はれし者を暇とらせむは主人もいとをしく思へど、是非に及はず、首尾よくいとまを遣はしければ、傳吉は大によろこび預け置きたる百二十兩を受取り、他の人々及び女郎たちよりはなむけとて送りたる金三十兩をとり添へ、暇乞して數年の宿志とゞきて目出度よろこびて花の廓をあとにし、ひたすら故郷へと急ぎつゝ、山路へかゝりし小松原を急ぐほどに、身にあらたへの如き半天を纏ひし雲助二人、一里塚のほとり

よりあらはれ出で、前後より傳吉を引き挾み親方骨折が重そうに見ゆるが、今日は朝から鐚一文にもならず、少し小揚取らせて玉はれと云ひながら、行李に手を掛けるを傳吉ぎよつとしたれど色目に見せず、雲助がさゝ腕をとつて拂ひ、中仙道を足にかけ、年中往來する我等、小揚とらする事はない惡戯なすなと、きつと白眼、びくともせざるに、二人の雲助はわざ笑ひ、イヤ強い旅人さん、雲助は旅人に肩をかさねど、世渡はならず、酒手ほしさに骨折をもたんとすゝめ、親にも折れぬ胸板を碎くるばかりに突かれて、今日から駄賃を取る事出來ず、ヤイ膏藥代よこせ、たゞではすむまいとほりものだらけの手を揮り傍より、一人は往く手の道をさへぎり否なら否なで宜い事なり、突れる咎は少しもない、出る所へ出ても其のまゝでは通さぬ。何でも荷物を擔せて貰はにやならぬとゆすり半分喧嘩仕掛けに傳吉は如何にもして此の場を逃れむとすれど、惡者中々承知せず、彼是言ひあふほどに、雲助は又もや傳吉が行李に手を掛けて引き取らんとするを、傳吉今は一生懸命、命を失ふとも汝の如きに渡さじと力の限り右なる人の手をとらへ折れよとばかり捻ぢ倒せば、左なる一人は此方が腕首を去かと取つて動かさず、傳吉必死と之を拂はむとするに、たふれし先きの雲助おのれひぜきめにあはせしなと云ひざま起き上り、共に力を合せ又もや引き取らむとす。傳吉如何に必死となるも、先きは力を業とする雲助、去かも二名、數年心をくだきたる金兩あはれ空しく虎狼のゑとならむとす。危き折りしも此處に來かゝる旅人あり。此の有樣を見るよりつと馳せよりて一人の雲助を取つて引擒ぎ忽ち大地へなげつけ、今一人をも張りとばし、蹴倒しながらはつたと睨め、汝等二人は晝日中追ひはぎせむとする不屆者め、すぐさま捕へ、宿處へ連れ立ち、御法通りにして呉れん、いざ來れと引立てむとするに、流石の雲助ども、此の勢ひに恐れけん、尻込みしつゝ、尻を押さへ腕をもみつゝ、大地へひれふし、いたみ入るに今日のみは

赦るして呉れん、是れはわが伴れなり、先きにおくれたる計りに、之等があなどりをうけたれど、よき處にて逢ひにたり、いざ〳〵御一緒にと目くばせすれど、傳吉もそれと悟とりて、うちつれ立ちて行きながら誠に惡ものにつけられ、難儀千萬の折柄幸に貴殿の御助を蒙り、誠に有り難く御禮は言葉に盡くしがたしと小腰をかゞめ、慇懃に禮をのべつゝ、その旅人の顔を見るに、眼するどく、何となう一癖あるべき容貌に、傳吉は又更に恐れを催したり。



秋月勝春花　徳大寺實則

くもりなく千里をてらす月かげは
花みるよりもたのしかりけり

朝秋風　東久世通禧

あさ露のうちみだれつゝわか庭の
小はぎか枝にあき風ぞふく

山館雲　高崎正風

あまりにも我がすむ山の高ければ
雲よりほかにとふひともなし

避暑　長谷信篤

瀧がはのおともすゞしき谷かげは
てる日ざかりのすみ所なり

庭上月　交野時萬

すみわたる月のひかりにおく露の
數さへみゆるにはのくさむら

夕立　長谷信成

見るがうちにむかひのやまは雲晴て
のきばにきほふ夕だちのあめ

秋晴　宮地嚴夫

富士のねも都のやまとみるまでに

すみわたりたる秋のそらかな

田初秋　植松有經

いなばのみそよぎそよぎて山城の
鳥羽田のおもに秋は來にけり

月前秋　大口鯛二

庭のおもはまだくらけれど秋はぎの
つゆみえそめつ月やさすらん

嶺月照松　千葉胤明

うづらなくふもとの里は霧こめて
月さやかなりみねのまつむら

里擣衣　小出粲

からごろもとなりの家にうつ音も
とほくきこゆるやまかげの里

都月　遠山英一

てる月にみやこ大路のともし火も
光うすれてみゆるよはかな

地儀　師岡正胤

人ごゝろうごく思へむれはつちも
また漂へるものにやあるらむ

流星　下田義天類

吹きおろす夕風きよしあつささへ
流るゝほしのそらに消えつゝ

草花先秋　大畑弘國

世の中のうつろひやすき色みせて
秋にさきだつつきくさのはな

なつの日　三浦千春

みな月のもゆるがごとく暑き日に
おはぢの塵はうちけぶりつゝ

蟬鳴宮樹夕陽梢　藤井行麿

ゆふひさす杜のこずゑになく蟬の
こゑさへたかくしげる夏かな

折萩　三輪義方

折る袖に散りそめにけり盛りだに
またじと思ひしおきはぎの花

孝女萬吉が母　佐々豐水

鈴鹿山はゝそのもりのかげなくも
かくうるはしき名は殘らまじ

ある女學校の擴張をことほぎて　足立正枝

をしへぐさいよ〳〵多く繁らなむ
まなびの庭しひろくなれゝも

避暑　木庭芳香

いざとはんしみづながるゝ松影に
なつをわすれて秋のすむやと

夏曉　伊藤純三

夏の夜は夢もみはてずあけにけり
いかにみじかきならひなる蘭

庭秋草　近衛貞子

さまざまにさきも咲たり繕はぬ
庭にはをしき八千くさのはな

秋雨　鍋島榮子

山もとのこずゑまむらに染出て
きのふもけふも村さめぞふる

山路秋　柳原愛子

さして行をがさの上にはろはろと
椎の實れつるあきのやまみち

水上月　松平健子

墨田川ふねより外にくまもなし
みつの上ひろき秋のよのつき

江上月　小池道子

おほゐ川さくらの紅葉ちる見ゐて
入江のつき夜あきさびにけり

立秋朝　遠山いね子

涼しさに起き出で見れも此の朝け
きりもやなぎも散りそめにけり

禁庭月　坂田泰子

みかきもるゑしのかゝり火影更て
大にはゑろくさゆるつきかな

船中待月　原田蒼生子

棹とめて水まづかにもなりにけり
つきのみ船はいつうかぶらん

閑庭薄　鶴久子

ふみわけてくる人もなきわが庭は
薄かはらとなりにけるかな

岡月　中島歌子

木のまもる忍ぶか岡のつきみれば
みやこのうちの心地こそせね

葛懸松　河村重子

ときはなる松のこずゑにはふ葛は
秋をうらむるいろだにもなし

池蓮　土岐いく子

さみだれににごれるにはの池水に
しまぬはちすの清くもある哉

窓前朝顔　安東菊子

あさがほの花さくころは窓の戸を
あくるも人にまかせざりけり

あぢさゐを見て　海上壽子

大かたはうつろひやすき紫陽花の
はなごゝろなるうたて世の人

年頃師と頼み奉る君の外國へ出立給ふに御暇きこえまつらんとてみたちに参るみちのほど五月雨ふりしきるに　柴田靜榮子

わかれぢををしむ涙のさみだれて
つきぬなみだとなりにける哉

川邊の宿にて　清水菊子

みれどあかぬ月のみ舟の涼しさに
なつもながるゝ川づらのやど

養老の瀧を見てよめる長歌　酒井喜雄

老にける　おやのこのめる　うま酒を　ゐまくほりし
て　みぬのおく　多度のみ山に　わけいりて　薪をこ

りて　市にうり　酒をかいきて　老人を　やしなひまつる　まごゝろを　神もあはれみ　みやまべの　瀧の水さへ　酒となり　岩にそゝぐを　をもふまゝ　むすびてのめど　をやも子も　たのしかりけり　かしこくも　わが大きみの　きこしめし　多度のみ山に　いでまして　瀧つせをめで　をやををもふ　しづのをのごを　ほめたまひ　あはれみたまひ　この國の　守となされて　としの號も　改めましぬ　しかれこそ　をやにつかふる　人の子の　鏡となれゝ　よき人は　かくもたふとし　いにしへゆ　今のをつゝに　かなしこの　老をやしなふ　其名さへ　ながれてたえぬ　みぬの瀧つせ

夕立

下田義天類

ほと息つくばかりの風と共に、俄に日影のかくろひぬるは、夕立になりぬるにやあらむ。日頃の祈しるし有りけり。とうち悦ぶほど、板廂かたぶくばかりふりいでたり。見るが中にわたり小暗くなり行きて、黄ばめる稲妻天の下にひらめき滿たりと思へど、はたゝ神耳もとにさしあてたるやうに轟き渡りて、一際雨の足に勢を添へたり、神は竹を割るが如く、雨は豆をいるが如く、いりもみたる大空に、風さへたゞならずふきあれたる、心地よしなどいはむも、中々世の常なりかし。たゞ女ども童などのをぢかしこみて、ひとつむしろにうづくまりゐて、あさましと思ひ入りたるをも、ちごもは、さすがにうしろめたからぬにしもあらず。こちやといへど、ある限り皆こなたに集ひぬ。主人ひとりほこらしげに、髭かきなでつゝ、穴わりなの物をぢやかしこかれ共、正保のみかどの御ふるまひなど思ひ合せまゐらすべし。誠やれことたちが常に好める軍ものがたりなどによそへても見よかし。軍を用うるは、ゆるきもはげしきも、時によりて様々なめれど、やまとをの子の兵は、かくこそつかはまほしけれ。佛蘭西のナポレオンは、凡たゞかひの負勝といふことは、最後

の一いきをさゝふとさゝへざるとの境にありといはれたりとか。されど、彼の人のいくさを用ゐたる跡をみるに、かく時の間にいり揉みたる戰は、をさ〳〵見ねずぞあなる。押並べていはゞ、時雨の雨のさだめなきにや似たらむ。露西亞のビートルが軍は五月雨のはれまなきにやかよひぬらむ。唯吾が國の九郎はうぐわむのみこそ、此の夕立にはよそへつべかめれなどいひなぐさむれど、おびへたる心もやゝゆるびぬらむ。わらはどもは少しおぢゐたるさまにて耳傾くるやうなり。彼の鵯越のさか落しは、此の雨の如く、此の風のごとし。北の方に村々とあわだつ浮雲は、生田のかたに敵の心をそゝがしめむとする範頼等がおびやかしの兵とやみてまし。絶間なき稲妻は、今一の谷に燃ゑ上がれるやぐらのほのほの、寄手の兵士等が振りかざしたる燒太刀の光にうつり合ひたるにかと思へど、燒きくだかるゝ物の響に、ときの聲をあげそへたるがごとく、わたりをゆすりて鳴雷のたけりくるふさま、壽永の昔を目の前にみる心地せりなどかたらふ程に、南の方明りそめて、時の間に雨は西北の方へすぎ去りぬ。軒の玉水夕日にきらめくもいひしらず涼きに、繁り合ひたる庭の樹立より、なごりの露に交り合ひて、ひぐらしの聲こぼれそめたり。これによりて萬のたなつものはさらなり、四方の人草さへ、いきかへりぬらむとぞうちほゝゑまれぬる。女童等は立ちさりたる跡に、あるじひとり西の空をながめやりて、雨のゆくへに思ひをそゝげは、浪はやの逆卷く鹽路を蹴立て、八島をさしておそひゆくさま、大空にうかべらむ心地す。壇の浦におひつめて、敵味方の船ども蹴ちらし、判官みづからたちはたらくすがたには、みおろすくらをがみも、身をふるはしておびゆらむとさへおもひやらる。





雜報

●御園のあさがは　英照皇太后陛下、まだ御代におはしましけるほどに、みわらかなる青山の離宮の御園に、とり〴〵の花をおはしたてさせ給ひけれど、四つ時、いつとても、花の色のにほはざる時なく、花の香のかをらざる時もなかりけり。さるを、ことに、うつくしみ給ひし蕣花の、今年もいとよく生ひたちて、このごろ、紅、紫、藍、白等、いろ〳〵の花、いとおはきやかに、うるはしく咲き出でたるに、園守も、去年のむかしをしのびかねて、二鉢、三鉢を、皇后陛下の御許に奉れり。　陛下も見そなはして、めでさせ給ひつゝも、なほ、おぼし出でさせ給ひて、しのばせ給ふみけしきにおはしますとなむ。

●貞婦　下野國、足利郡、三重村に住める岡田熊吉が妻に、房女といへるがあり。今年、三十九歳になれるが、七年前より、夫心くるひて、事をもわきまへぬを、貧しきなかにも、二人の兒をはぐゝみながら、看護一日もおこたりなしといふ。あはれにも、また感ずべし。

●又、東京、京橋區、鈴木町十二番地に住める亡渡邊富次郎が妻、花女といへるは、今年四十二歳なり。夫富次郎は、もと、大工を職とし、棟梁ともなりて、家もゆたかなりしが、後、不幸うちつゞきて、漸、貧しうなり、かてゝ、富次郎は、中風症にかゝりて、腰もおたゝず、打ち臥せるを、花女、身を碎きて、立ち働き、それこれの手内職などをして、辛くも藥餌をとゝのへ、夜も、まどろまぬばかりに、數年の間、看護怠りなかりけれども、しるしなくして、遂に、去し五月廿六日といふに、無き人の數に入れり。花女なげきのなかにも、かたばかりの後の事をもして、跡とふらふ

ことおろかならずといふ。事、府知事に聞えて、このほど、物を賜りて、褒賞せられたり。都は、ことに人心うすきがならひなるに、これはいとめでたし。

●孝貞　兵庫縣、赤穂町に住める士族、神吉新が母、すゞ女、朝來郡に住める藤原ゆう女の二人は、貞淑、孝養の行、人に勝れたるを以て、これも、縣知事より金員を賜りて、賞せられたり。

●孝婦　長野縣、信濃の國、東筑摩郡、壽村に百瀬てい女といへる婦あり。去し弘化元年五月の生なり。父熊藏は、今より二十年以前にみうせ、長兄豊太郎は、嘉永五年中、行方知れずとなり、仲の兄行藏といへるは、天保十三年の生なるが、十五六歳の頃より不治の瘋癲病にかゝり、母いし女は、うまれつきて、癇癖よつく、年老い、體よわりて、一しほ、はげしくなり、一家みな、かくの如くなるに、てい女は、女ながら辛くも、家政を治めつゝ、老母に事へ、病兄を看護すること、おろそかならず。近郷、みな感せざるはなしといふ。かくて、親戚のものなど、これを見かねて、夫を迎へよ、とすゝむれども、てい女は、他人を交へて、もし、母の心にかなはざらんには、家に波風おこして、親になげきをかくることもあるべければとて、きかず、四十餘年の永き年月、孝養悌順かはることなしとぞ。縣知事きゝて、金員を賜ひて、褒賞せり。

（勝山直人の通信による）

東筑摩郡壽村　百瀬てい

資性温厚年齢猶幼なるの時長兄は失踪し次兄は瘋癲となり一家困難の日に方り父母に力を協て家計を助け孝道缺くる所なく父死するに及んで其家を續ぎ敢て夫を迎へず固く貞操を守り克く老後の母を養ひ癲疾の兄を扶くること多年一日の如し加ふるに將に傾頽せんとするの家産を挽回せる等其孝悌篤行詢に奇特に付爲其賞金貳圓下賜す

明治三十一年八月五日

長野縣知事　園山勇

●孝女　北海道、石狩國、岩見澤村に住める川邊某が女、いと女といへるは、年いまだ、わかきに、父、病

みて、永くうちふせるを、身をくだきて、奉養怠らず、事、道廳長官に聞えて、金十圓をたまはりて、賞せられたり。

●入江町の孝女　のことは、さきに、第百六十一號に、くはしく記せりき。今、また、きくに、その孝心を感じて、世の人々の惠みし金額、七十餘圓に上り、このほか、くさ〴〵のものも數多あり、且、母、脚氣症になやめる、其の藥餌をめぐみしもありて、爲にその病も、すこし怠り、室の內ほどは、歩まるゝばかりになり、米女も、心やすく工場に通勤せりとぞ。されど、差配人なる齋藤某も、なほ、何くれと、心をそへ、金員をも、貯蓄銀行に預けさせ、外の品々をも、つゝまやかにすべからしめしに、一家、大に安堵して、世の人々の惠をかたじけなみあへりといふ。

●正誤　さきに北海道の貞婦のことを記したりしに、今、其の人のもとより、左の書面をもて、正誤せよとて、いひおこされたり。これ記者の、筆のあやまちにあらず、耳のあやまちなり。多罪々々。

御社御發行の女鑑第百五十九號雜報中北海道石狩國上川郡永山村の渡邊しきと云へる者「數年前夫にげうせて行方をしらず」云々と御記載有之候得共右は全く事實に相違致し候て夫は明治二十七八年戰役の陸軍省御雇となり臺灣に渡り同地方にて軍務に服し其の功不少旨を以て昨卅年四月一日其筋より賞として金圓を賜はり候次第にて全くにげうせ候義には無之候まゝ御手數ながら右御正誤なし下され度奉願候

石狩國上川郡永山村

明治三十一年八月七日　渡邊志き

●大日本婦人敎育會　といふは、東京、麴町區、平河町にあり。このほど、閑院の宮妃殿下、今年より後、五年の間、金二十五圓づゝを寄贈せらるべきよし別當花房男爵より、會長毛利公爵夫人のもとに通ぜられしときく。

●女子講習會　さきに、東京府敎育會にて、開かれしことは、本誌にも記したりき。さて、既に、學科を修了せしを以て、去し十四日、東京府高等女學校內に

て、修業證書授與式を執行せり。この日、會長岡部子爵、及、同夫人も、臨席せられきとぞ。

●裁縫専科講習會　兵庫縣にては、さきに、小學校女敎員第一期裁縫専科講習生、五十餘名の講習を終へしが、こたび、更に、九月一日より、二箇月間の豫定にて、第二期の講習生を募集すべしといふ。講師は、兵庫師範學校敎諭、大村忠二郎、熊本尙絅女學校敎師松本ます子の二氏なりときく。

●小學敎員補充策　なりとて、華族女學校長、細川潤二郎氏は語らく、

小學敎員補充の策は主として女敎員の養成にあり我邦の如き家族扶養の義務ある男子は今日の如く生活の程度の昂進する時に當り薄給彼の如き職に在ることは到底能ふべきことにあらず然るに女子は其性質緻密にして最も兒童敎養の任に適するのみならず男子の如く家族扶養の義務を盡すべき場合稀有なるを以て、概してその職に安んずるの便あればなり云々

●小學校家事裁縫科敎員試驗問題　去し五月、東京府に於て、施行せし小學校敎員乙種檢定試驗の家事科及裁縫科の問題は、左の如し。

●家事科（家政）

（一）衣服の保存につきては如何なる注意を要するか
（二）獻立を作るに當り變化の必要なる理由を說明せよ
（三）住居を擇ぶに當り注意すべき事柄を列擧せよ
（四）小兒の居室を擇ぶに就き心得べき要件如何
（高正ハ四題共、高准ハ内三題）

●裁縫科

（一）雛形敎授の得失を詳述せよ
（二）唐縮緬大巾九尺を以て四つ身を作らんとす其裁方及寸法を圖解せよ
（三）並巾長さ二丈八尺五寸の布を以て袷羽織を作らんとす其裁方及裏地の丈尺を記せ
（右高正）
（一）八分袱を縫へ
（二）與へられたる布を以て女物綿入羽織半身を裁縫せよ但實物二分の一
（右高正）
（一）巾一尺三寸長一丈七尺の布を以て長襦袢を作らんとす其裁方及寸法を圖解せよ
（二）並巾長さ一丈一尺の布を以て三つ身筒袖を作らん

とす其裁方及寸法を圖解せよ
(右高准、糾正)
(一)與へられたる布を以て男物袷上前半身を裁縫せよ
但衽二分實物二分の一
(右高准、糾正)
(一)並巾長さ二丈八尺の布を以て四つ身及一つ身を作らんとす其裁方及寸法を圖解せよ
(二)本裁男物(單物)の並縫上り寸法を記せ
(右尋准)
(一)與へられたる布を以て四つ身筒袖半身を裁縫せよ
但實物二分の一
(右尋准)

●有住家は、代々、伊勢流の故實を傳へ來りてきこえたかし。齊氏、既に老いて、息女常子、後をつぎ、麻布區永坂町一番地に禮節敎場を設けて、懇に子弟を教導せる事はさきにも記せりき。此度、日本橋區本町なる、裁縫女學校にても、これに、禮節科をれき、常子刀自を聘し、學生をして、師として、學ばしむといふ。

●文部省訓令の數々、廢止せられたり。これは、いとよくせられたり。げに〳〵。

明治二十二年(十二月)文部省令第十二號は自今廢止す

明治三十一年八月十一日　文部大臣　尾崎行雄

説明

教員生徒の集會言論其他取締に關し從來本省の發したる諸達訓令中爾後法律の制定に依りて其用を見ざるに至れる者あり或は時弊を矯正せんが爲に發したる者は時勢の推移と共に今は其必要を認めざる者あり間又多少の必要を認むるのなきに非ずと雖多くは特に本省の訓令を俟たず當然地方長官學校長教員の勤務にして其分内に屬すと思考するが故に總て之を廢止せり凡そ學校長教員たる者は其重大なる職務と高尚なる地位とを顧念し生徒の薫陶に專心なるべきは勿論叨りに上司に反抗し公衆を挑發し其本務を忘れて政爭に狂奔する等の擧動あるべからざるは言はずして明なり又學校生徒たる者師を尊び長を敬ふの第一義を忘却し徒黨して學校長教員に對し強迫の擧動をなすが如きは畢竟訓育の實未だ完からざるに起因す地方長官たる者學校長教員を督勵して其の實効を責むべく尚ほ不順なるものあらば校規に照らして處分せしめば足れり之を要するに從來の諸訓令を廢止するは地方官學校長教員の位地責任を重視し特に訓令を存するの要なきを認めたるによる

參照

文部省令第十二號明治二十二年十二月
小學校及其他普通學校の教員にして集會及政社法に依り罰金の處分を受けたるもの又は政黨に關係する者は其情狀に依り府縣知事より文部大臣に稟申し該府縣内に於て教員たることを差止むべし

猶之と同一の理由を以て、同日、左の達、内達、訓令、内訓等をも廢せられたり。

明治十四年(十二月二十八日)　文部省達第三十八號

同　十五年	（六月十日）	文部卿内達
同	（六月二十四日）	文部省内達
同	（七月三日）	文部卿内達
同　十六年	（一月二十三日）	文部卿内達
同	（一月二十四日）	同　上
同　十七年	（四月五日）	文部卿達
同	（一月二十六日）	文部省達第二號
同　十八年	（一月二十四日）	同　第三號
同　十九年	（十二月十三日）	文部大臣訓令
同二十二年	（十月九日）	同　上
同二十三年	（一月十四日）	文部省訓令第一號
同二十五年	（十二月十五日）	文部大臣内訓
同二十六年	（五月二日）	文部省訓令第四號
同	同	同　第五號
同	（五月二十二日）	同　第六號
同二十七年	（一月二日）	同　第二號
同	（一月二十三日）	同　第三號
同二十八年	（一年十八日）	同　第一號
同　三十年	（十月十三日）	同　第十號
同三十一年	（二月四日）	同　第一號

●土俗談話會といふを、去し九日、麹町區、富士見町四丁目明治義會講堂にて、催し、左のことがらに依りて、各地の傳唱を述べしといふ。

妄信俗傳

身体に關するもの　例せば「歯並びの好い者は正直者」と云ふ類

居動作に關するもの　例せば「他人の坐つて居た跡へ坐る時は其場所を三度叩かぬと其人と不和に成る」と云ふ類。

衣食住に關するもの　例せば「赤飯に茶を掛けて食ふと結婚の日に雨が降る」と云ふ類

器具に關するもの　例せば「尺は手渡しにするな」と云ふ類

動植物に關するもの　例せば「庭にへちまを植ゑると零落する」と云ふ類

●あるまじき風なり。或は、裸をどり、或は、裸角力、婦人にはあるまじき事のをり／＼きこゆるはうたてし。

●又、高知縣にて、高等女學校を卒業して、女學校の教員となりながら、素行修まらずして解職せられたるものありといふ。學識たけたりとも、身修らずは、何かはせん、嗚呼。

●又、熊本縣、天草郡の人、山口某の次女某は、自、娼妓となりて、その風を一洗せんとの志を興せりときく、異なる目的をもたつるものかな。嗚呼。

●心すべし　油斷は大敵と、口にはいへど、心をしめぬが多し。とかくに、我を陥いれんとする口は甘し。

たとへば、蠅をとるに、わなの口に砂糖をおきたらんが如し。上州、前橋の女教師某、暑中休暇にて、常州、水戸にありしが、さる男に欺かれて、果は、茶店婦に賣られんとしけるを、其の筋の官人に、說諭せられて、おのが國元におくられしときく。油斷は大敵なり。ようせずば、身をあやまつべし。

●百二歳　の齢を重ねて、なほ、身いとすこやかに、孫十二人、曾孫十七人ありとは、いとめでたし。こは、岡山縣、兒島郡、呼松村にすめる三宅つが女といへる老媼なり。

●四人の女兒を　一時に産めりときくも、稀なり。こは、冲繩縣、琉球國人、山川某が妻、かまど女といへる人なり。さて、四人の兒ども、みな、ひだちよろしとは、いよ〳〵稀なり。

●飯の腐敗を防ぐ　法なりといふを聞けど、まづ、炊きて、火を引き、釜の蓋をとりて、飯櫃を覆ひ、むれたる時、その飯櫃の乾きたるを、なほ乾ける布巾にて、よく拭ひ、飯をこれに移し、さて、又、乾ける布巾を覆ひて、その上に蓋をし、上に重きものをおきて、空氣の外より入るを防ぐべし。かくて、食事の度毎に、蓋の裏につける湯氣をぞ、よく拭ひ去るべし。かくせば、五十時間を保ち得べしといふ。

●ふるアメリカ　に一人の婦人あり。春さめに若草の萠え出づるが如し、子孫さかえて、玄孫まで、合せて、三百十人、今、世に存ふるが二百三十五人なりとぞ。

●赤痢病豫防　の爲にとて、淺田神奈川縣知事は、左の諭告を發したりとぞ。

一飲料水及び食器を洗ふ水又は盥嗽用の水は一回煮沸したるものを用ふること

二氷水は成るべく飲まざるを良しとす止むを得ざるときと雖も多量を飲まざること

三氷は生水を混合せざること生水を混合したるものは飲まざること

四　不熟若は腐敗に傾きたる菓實を食せざること
五　腐敗の傾きある食物を食せざること
六　食物又は食器等は蠅帳に入れ若は布片を以て之を覆ひ置くこと
七　下痢病に罹りたるときは速に醫師の治療を乞ふこと
八　下痢病に罹りたる人と健康者とは居室及び便所等を異にすること
九　赤痢の疑ある患者又は下痢病者ある家には見舞等の爲め訪問すべからず若し該家に到るときは何品たりとも飲食せざること
十　赤痢の疑ある患者は成るべく速かに病院又は病舎等に入れ手當を加へしむること、

●女鑑歌文月並兼題

九月五日	歌……海邊月	文……琴を聞く	八月廿五日〆切
九月廿日	歌……茸狩	文……快樂	九月十日〆切
十月五日	歌……雲間雁	文……晩秋田家を訪ふ	九月廿五日〆切
十月廿日	歌……落葉浮水	文……亡友を思ふ	十月十日〆切
十一月五日	歌……深夜鹿	文……長壽を祝ふ	十月廿五日〆切
十一月廿日	歌……枯野	文……書翰文の效用	十一月十日〆切
十二月五日	歌……松の雪	文……居宅新築を祝ふ	十一月廿五日〆切
十二月廿日	歌……風船	文……菓子	十二月五日〆切

歌文原稿は必ず〆切期日迄に本社に到着する樣送らるべし。遲れたるはすべて沒書とす。
◎宛名は國光社女鑑編輯部とせらるべし。
◎投稿歌文中より天地人の三才を撰り、天に該號の女鑑三部。地に仝二部。人に仝一部を贈呈す。又他に秀逸を撰む。



八月廿日兼題　朋友

天　越後國長岡表三町　小村信子
もろともにこゝろを磨く友かきは
玉にもまさるたからなりけり

地　備前國和氣郡閑谷　西艶子
人こゝろうすしとはなど思ひけん
うきにかはらぬ友もありけり

人　福岡縣久留米市莊島町六拾六番地　森やす子
よしとほめあしと諫めて中かきの
へだてぬ友のたのもしきかな

人　伊豫國松山市出淵町　濱とみ子
よしあしを諫めかはして嬉しきは
をなじ心のともにぞありける

秀逸（二十首）

はらからも及ばぬばかり親しきは　三河　永井さい子
遊ひかたきの友にぞありける

なさけをぞくみかはしつゝ中垣の　肥後　佐々小琴子
へだてぬ友ぞ世のたからなる

海山をへだてながらもへだてぬは　肥後　德永萬壽子
心あひたるともにぞありける

朝夕にとひつとはれつへだてなき　備後　橋本とよ子
こゝろの友ぞたのしかりける

はらからのなき我身には殊さらに　東京　吉田きさ子
學ひのとものなつかしきかな

禍ごとの身にいつくをは正しあふ　京都　東園早苗子
友やなほ毘の神にはあるらむ

へだてなく思ふ心をかたりあひて　横濱　綿野りき子
樂しきものは友にぞありける

善惡をかたりかはしてたまあへる　千葉　三幣操子
ともこそ人のたからなりけれ

よきに移りあしきに心みかゝまし　肥後　仁保しま子
友をわか身のかゝみにはして

黄金にも玉にもまさるたからこそ　豐後　鵜濃喜代子
わか友どちのまことなりけれ

まことあるともは心のうきしまの　伊豫　野中あさ子
はらからよりもしたしかり鳬

麻のなかのよもぎをみても心して　伊豫　宇高松子
交はるべきは友にぞありける

心あひの友ぞうれしきよしあしの　廣島　竹腰隆子
なにはの事もかたりあひつゝ

まことある友人こそは黄かねにも
玉にもまさるたからなりけれ　東京　野口さん子

はらからも及ぬまでに親しきは
心のあへるともにぞありける　山梨　名取よし子

友といふとも多かれどまことある
こゝろの友にしくものぞなき　山梨　坂田きみ子

憂きふしも樂しきふしも隔てなく
かたるや友のまことなるらん　福井　増田丹眞子

うきことの我身に餘るをりにこそ
まことの友はこひしかりけり　東京　大竹　治子

うき事もうれしき事もかたりあふ
友そわかみのたからなりける　東京　岡上　延子

むらきもの心へたてぬともかきは
よそに見るさへ樂しかりけり　東京　池谷とみ子

（以下原稿到着順）

よきこともあしきもともに語りあひて
おなしみちゆくともそうれしき　石井豐子

しきしまのみちの正みちもろともに
ふみみしともそしたしかりける　野口信子

花のあしたつきのゆふへのたのしみは
こゝろとけあふともありてこそ　濱口貞子

あさなゆふな文のはやしにわけいりて
みぬよのともをともとするかな　住山幾子

あさな夕なたもとつられて思ふとちと
ふみのはやしにいるそたのしき　中山とみ子

なりはひにまなひに友はあまたあれと
こゝろあひたるひとそすくなき　横山柳子

名のみにてこゝろへだてずあさな夕な
かよふもうれしむつきともかき　根岸豐子

あさゆふにふみよむまとのともかきは
こゝろへたてぬかゝみなりけり　大谷友子

あひおもふちきとのそとのはてまても
かよふかきりはかたりつくして　輕部壽子

世のなかにしたしき友はあまたあれと
わきてまなひのともそたのしき　谷口なほ子

よしとほめあしといさめてつのくにの
なにはのこともかたりあひつゝ　島山千代子

ひとひたに見ねはなつかしきみいかに
このころたねておとつれもなし　島山百合子

きみひとり訪ひこぬからに我かやとも
いとゞさびしさまさりけるかな　島山千惠子

喜こひもうきこともかしもろともに
おもひはおなしともとちのなか　栗生菊子

馴れやすきひとはあれともなかなかに
むすひかたきはともかきのみち　久米定子

はなの邊のあたりのとかにまとひして
ともとなかめしときそこひしき　原口いち子

うきこともたのしきこともへたてなく
かたるともこそしたしかりけれ　宍土村ひさ子

うみやまをへたてつれともむすひつる
こゝろはおなし千代のともかき　佐々有鄰子

かなしきもたのしきこともかたりあひて
ともに世わたるともそたのしき　德永廣子

もろともにこゝろつくしてとこしへに　澤田春子

かはらぬともそたのしかりける

よしあしをかそへかたりてたのしきは
まことありつる友にそありける
尾立とみ子

つきくさのうつろひやすきよなりけり
いてやともかきゆひはらはなん
山村はる子

むかひあひてなにはのことゝもしら露の
たまあへるそてのなつかしき哉
村上てる子

おもふとちかたらひくらすことのはの
ともこそいとゝたのしかりけれ
萩原章子

うちとけてかたるもうれし我か友と
うきもつらきもこゝろひとつに
吹田たけ子

あひあひてかたらふこともつきせしな
まことのともとたのみそめては
竹村竹里子

まこゝろをつくしあひつるともとちは
はらからよりもたのもしきかな
遠藤千代子

かたりあふとも志あらすはいかはかり
ものたもひする我か身ならまし
遠藤さく子

へたてなき友とかたりてのとかにも
わくるもうれしことの葉のみち
谷口ふさ子

かたらはんともしあらすはいかにせん
おやにもかくすおもひあるよを
湊谷いく子

ともかきのへたてぬなかにしきしまの
道ゆくひとそことにしたしき
山口千枝子

はらからのなきわか身にはまなひやに
むつひしとものたのもしきかな
林環子

ふみまなひのへにあそふともかきの
へたてなきこそたのしかりけれ
大坪修子

うきことのつもりにつもるこのころは
へたてぬともそこひしかりける
武田粲子

あさゆふにまなひのにはのともちぎり
いくよかはらぬちきりともかな
三谷超美子

むつみあひし學ひのまとのともかきは
わかれてのちもへたてさりけり
遠藤眞久子

よもの海なみもたへてぬおほみよは
とつくにひともみなともにして
佐々木りの子

へだてなくかたりかはしてともちとり
世のうきなみを越ゆべかりけり
大寺浪迺子

むらきものこゝろへたてぬ友しあらは
うきをうしともおもはさるらん
新宮てつ子

ひめまつの文のはやしにかたらひし
むかしのへはきみそこひしき
青柳つぎ子

打ちとけてこゝろ一つに親しむは
かたきちぎりのあればなりけり
蠣谷よう子

うきふしもたのしき事もうちあけて
かたりかはさむともそしたしき
森山愛子

惡き事もたのしきことも共にそと
ちかひしともそたのしかりける
押元佐嘉惠子

懐かしくわすれられぬはふるさとの
をさなあそひのともたちにこそ
押元勳子

ひとひたにこひしき友のあらさらは
如何にこの世をくらして過さむ
森茂子

世の中になにをおきても樂しきは
いともしたしきともにそありける
駒澤松子

したしめはとつくに人も友ならし
おのかこゝろにへたてあらすな
山田璋子

ひさをし友といふへきやまとひと
いさことあらむそろふこゝろを
加藤さく子

花もみちつきゆきみてはおもふかな
佐久間八重子

こゝろへたてぬなしのともごち

たのもしき人をえらみて友とせは
わがみのためのかゞみなるらん　安村歌子

ゆきほたるとりて學ひし友がきの
志のはるゝなりつきとはなさに　伊東壽子

朝な夕なむつひしおのがともがきの
おもひ出されぬはなとつきとに　山本とし子

樂しみもはたくるしみもへたてなく
ものがたり得るともそうれしき　大橋くに子

あぢきなく世をすみそめに送る身も
とひくるともはうれしかりけり　寺尾まさ子

うきにつけうれしきにつけ友がきの
へたてぬなかのたのもしきかな　秋野つゆ子

うきこともたのしきことももともにする
ともをともとはいふへかりけり　齋藤よし子

何こともこゝろおきなくかたらふは
へたてぬなかの友にそありける　濱田直子

嬉しきはおなしみちしはふみゆきて
にほひへたてぬはなのともがき　根岸里子

朝ゆふにみがきあひたるよしあしを
むすふともこそたのしかりけれ　前橋友子

こゝろしてましるともをは擇ふへし
あけにましれはあかくなるよぞ　仲田榮子

ひとごとをかたるも文のたよりかな
ちさとをへたつともがきの身は　山内蔦子

たらちねのみ親にとほくへたゝれは
たゝとものみそたのみなりける　廣田とめ子

年へてもわすれぬものはふるさとの
おなしまなひのともにそありける　林久子

よき友をえらみてむつみかたれかし
みつもうつはにしたかふものを　稲原基子

あさゆふに友人のみそれもはるゝ
ふみのはやしをともに行かんと　所佐以子

しき島のやまとごゝろをとりそへて
たゝしきみちのともそうれしき　小田三千代子

花のあしたつきのゆふへもへたてなき
ともありてこそたのしかりけれ　田代艶子

うらもなくともにかたれる友どちと
つきゆきはなをみるがたのしさ　田代綾子

へたてなくかたらふ友のしたしさの
いやまさりゆくことそうれしき　佐和鶴子

ぬは玉のこゝろのうちにうみやまの
ふかくおもふはともにそありける　吉岡ひさ子

よしあしをいさめたゝへて睦ひあふ
うれしきものはともにそありける　下元もと子

みやまきの生ひし儘にてつくろはぬ
こゝろのはなのともそこひしき　近藤よし子

わたくしのおこなひなくはよの中に
こゝろのあはぬともやなからむ　森こと子

麻のなかによもぎおふてふふることを
よのともがきのうへにみるかな　由井すみ子

睦ましくましらひなれとなにはえの
よしあしかたるともそすくなき　二宮春枝子

いとふかき君がまことにくらふれは
ちひろのうみもなほあさくして　白石梅子

うきふしのしげきうきよにくれ竹の
なほきにまそふともそうれしき　村井やすの子

月はなのながめにましてたのしきは　林あさ子

こゝろもちなしさものましらひ

睦かやのくさのいほりもいさひなく
おさなひきたるさもそうれしき
奥木あい子

いれものゝまに〳〵かはる水みれは
ならひかたきはさもにそありける
藤田たけ子

楽しさよしらぬむかしのこさ〳〵を
さもにかたらふこさのはのさも
稲田直榮子

朝ゆふにおのかかたみさたふさふは
おこなひ高きさもにそありける
千石素子

よしあしのなにはの事もみなつくし
こゝろをつくすさもそうれしき
田中八千代子

そこふかくにこりなき井の友つろへ
きよきこゝろをくみかはしつゝ
羽田三緒子

なれむつひ心あかしのさもちさり
たつあたなみにつらなはなれそ
河田いし子

さもかゝみ寫しかはしていさゝかも
くもりなおきそさしはへぬさも
種田うた子

うちさけてかたらふ友のあれはこそ
つきゆきはなもたのしかりけれ
青木たま子

つきゆきやはなよりゆかし友さちの
こゝろのへたてあらぬかきりは
大木しげ子

あさゆふになれしまなひの友かきの
ちきりはふかしひはのみつうみ
井上一枝子

難波津のよしあしつくろさもなこそ
かひさたのみて世をわたらはや
井上ゆき子

旅ころもうれしきものはへたてなき
こゝろあひたる友にそありける
池田篤子

つきはなも友ありてこそなか〳〵に
あはれふかくはなかめらるなれ
芳香郁子

よき人をならひてこそはましはらめ
さもそわか身のかゝみなりける
小松靜子

しら糸もそむろかまゝの世なりけり
まさしきさもによらんさそ思ふ
錦織倉子

世の中に友てふものゝなかりせは
なさはなつきのたのしからまし
錦織幸子

よの中にへたてぬものはみちのくの
いはでしのふの友にそありける
細川ますゑ子

もろさもにへたてもあらぬ我か友は
ふかきこゝろのおくも見ゆなり
河野群子

春あきになかむるはなにまされるは
きよきこゝろの友にそありける
熊田艷子

わかさもは雲井はろかにへたつさも
へたてはせましこゝろはかりは
高屋千代子

諸さもにまなひのみちをたさりつゝ
こゝろへたてぬさもそうれしき
前原つた子

たまさかにあひ見しさもゝうれしさに
くろゝもしらてかたらひにけり
高屋はきの子

露ふかきちくさふみわけ我かさもさ
かたろらうれしきくもたのしや
平野晴江子

出すたくさかきわけてへたてなき
さもさかたるそいさもたのしき
平野靜子

はらからもたよはぬものはへたてなく
さひつこたへつたけむまのさも
長友富子

うれしきもかなしき事もかたりあひて
こゝろへたてぬさもそたのしき
大井いく子

ゆき逢たるさもにあつめてしきしまの
たなじみちゆくひさそたのしき
平井湖浦子

年つきをまなひのにはにすぐすみは
河野まさ子

たゝふるさとのともそこひしき

あふたひに嬉しきものはいつまても
かはらぬとものまことなりけり
辻本ひさ子

たまあへる友とかたらふあかつきは
くもきりさへもへたてさりけり
名取正代子

さしなへてむかしむつひし友にまた
あふうれしきはよにたくひなき
竹村良子

ひとりみる今宵のつきのすゞしさに
なほなつかしきふるさとのとも
安田ふゑ子

朝なゆふなかたることはのうれしきは
おなしみち行くともにそありける
安孫子かつ子

君はなとならはおのれはてふとなり
いつもはなれすむつひかはさん
增田鉦子

へたてなき友こそひとのたからなれ
こゝろもちゝにひらけゆく世は
山田謙子

たのしきもうきも倶にしかくてこそ
まことのともといふへかりけれ
目黒佐京子

なに波津のはしめを今もかたりあふ
ともかきはかりたのしきはなし
中桐李子

いとふかきまなひのみちも友とちの
おくれすすゝむあたみたのしも
小曾根しう子

たけむまにのりしむかしも忍はれて
たのしきものはともにこそあれ
吾妻ちか子

むかしいま語るにあかてあかすまて
たのしきものはともにそありける
諸井くら子

よしあしをいひしろひつゝ隔てなく
ましらふともそうれしかりける
舘脇ます子

難波江によしあしともにかたらひて
いさめあひつゝむつむともかき
坂井みつぎ子

へたてなきこゝろのともの多からは
いかにたのしきこの世ならまし
美濃君子

あさな夕なまなひのにはにむつひする
我かふるさとのともそこひしき
中村好子

ともよともよともあれはこそ春のはな
あきのつきよもたのしかりけれ
北原季子

しらすしてからきうき世を渡るかな
したしきともを水さをにはして
友永章子

大御代にうまれあひたるたみなれは
おなしこゝろのひとそともなる
村崎包子

むらきゝのこゝろのそこを打いてゝ
かたるともよりうれしきはなし
黒田明子

あさ夕になれしつくゑとこゝろあひの
ひとこそおいのともにはありけれ
山田介子

うき事をわすれわすれておもしろく
かたるまことのともそたのしき
虎口貫子

しき島のみちふむひとはことさらに
とものなかにもしたしかりけり
下田繁子

善し悪と思ふかきりをかたるこそ
へたてぬとものまことなりけれ
永井才子

（以下延着）

ふるさとを隔てし身にはたゝたのむ
したしきとものほかなかりけり
林瑟子

よきをとり悪しきを諫むるともかきの
親しきなかそうれしかりける
新浦美津子

學ふにもともてふものゝあれはこそ
おのれのわさもすゝみゆくなれ
白石由子

あやまちをいさめはけます友こそは
我かみをみかくかゝみなりけれ
川上博子

諸さらちにまなびのみちにわけいりて
はけむはさらのちからなりけり　川上喜代子

八月廿日兼題　山遊び

天　千葉縣安房郡豊田村杏見　三幣操子

仁者をまねぶとにはあらねど、おのがさが、痛く山を樂み、花のあした紅葉の夕、あくがれいでぬ時ぞなき、いにし七月の十日あまり六日の朝まだき、友どち二たり三たりそゝのかして、竹原山にものしぬ。木立いと深く、蔦楓の茂れる道を、たどり〳〵てゆくに、いと廣らかなる山のかひに出づ。こゝは、日頃、人の話にきゝし六本松といふ處なめり。一處より六もとの松わかれいでゝ、四方にひろごり、枝さしかはして、日影を遮り、水無月の照る日も、夏の至らぬ處は、こゝならむ、と人毎にいふめるも、うへなりけり。げに木の根に腰うちかけてながめやれど、鏡ケ浦は、さながら眞澄鏡の如く澄み渡りて、いと清らかなるに、釣舟の二つ三つ、白き帆かけて浮べるさまいひしらすをかしきを、富士の高ねは、芙蓉の今しも花をひらきたるが如く、遙かなるみ空にうちそゝりて、手をのべなど、とゞかむかりに見ゆ。東の方、太平洋を見やれど、沖つ白波雲井にまがひ、渺茫として更にはてしもなし。かゝる景色を見れど、心もおのづから莊大になりぬる心地して、孟子のいはゆる浩然の氣も、養はれつべし。花紅葉のをりならむ。をちこちさまよひありかむを、けふのてる日をいかゞはせむ、と木蔭さらで、友どちと語りかはせど、日頃の暑さも、うち拂はれたる心地してその涼しさいはむ方なきを、ましてけふの如く、風うちそよぐ日は、漢人のいふなる仙境も、かくやとおしはかられて、いと樂しうなむ。あはれ、けふの一日をこゝに暮したれど、心に得る所は、いぶせき伏屋の内に、扇うち使ひつゝ、一日二日書よまむには、まさりぬべし。

地　甲府市山田町　名取正代子

桐の一葉の落ちそめしより、朝夕の風、やゝ冷やかに身にしみわたりて、やう〳〵秋のけはひ立ちそめぬ。けふしも、みそら清らかに、晴れわたりたれど、心あへるどち、そゝのかして、某山に遊びぬ。道の邊に匂へる千草の花も、はや色づきそめ、草むらごとにすだく虫の音さへ、さすがに物あはれなり。やがて、心ざす山の麓にいたれど、幾世へにけんとも知らぬ、大なる松の木ども、をかしくなみたてるに、つたかづらのはひまつはれるが、やう〳〵、もみ出づる色いとをかし。さては山路の奥は、はやもみぢせしかと、そこはかとなくたどりゆけど、そこらくの紅葉、松の木の間にはひ出でたるが、やゝうすく色づきそめつれども今一しほとればしきさまなり。さては、時雨の山め

ぐり、いまだあまねからぬなるべし。我こそさきに山めぐりにはきつれなど、友どちかたみに打興じつゝ、木蔭にありつる苔をむしろに、日ねもすあかずかたりあひて、あかねさす日の、はや西にかたむくころほひ、今一時雨の後をちぎりて、家路につきぬ。

人　　　　三谷起美子

今日此の頃の暑さ堪へがたさに、一日の樂しみを涼しき深山邊に求めむやと、心あひの友二人三人して出で立つ、見るから涼しき小田のけしき、麓の坂路も、物珍しき心には、けはしとも思はで過ぎぬ、松がねの岩つゝじ、うむらも、蓬も、花はなけれど、みどり一しほにゆかしう、所々にさき出でし大和なでしこも、見る人なき山邊をかこつらむ、打しほれて露重げなるさまなりや、吹きかふ松風、谷の清水の音に通ひて、天人の奏づる琴かとまがふばかり、そま人の木こるひゞきもかすかに聞えて、面白き深山邊のさまなりや。樂しく〵と歌ひつよびつ、日一日を愉快の中に遊び暮して、夏の暑さもそゞろに忘れ果てにし頃、家路をたどれは、圖らずも聞ゆるにならぬ音、こはいかにと近より見れど、白糸かけたる瀧なりけり、あはれ山人の吾をとゞめんすべなるか、この涼しき瀧の清水をながめては、塵深き都へ歸るべき心もうせ、飛び散るしづくの白玉を見ては、この下を立ち去るべき思ひもなし。あはれ山姫の吾等をいつまでも仙境に止め置かんの心なるか、けに〱夏は深山の中こそよかりけれ。

(以下原稿到着順)

中山ふみ子

春の野遊びも心行く限りに言ふめれど、又山遊び斗り、樂しきものはあらじ、ひと日へだてなき友たれかれ、打つれて、程近き山にものしつゝ、千木の片そぎ高く聳ゑて、青々と緑したる松原は、老たるあり若きあり、其のいとも淸げにみやびたる所に天滿天神の祭りあるあり、之ぞ名にあふ松林山なりける、下は淸き流れの櫻川に臨み、後は幾丈の布を引きし如き白糸の瀧をひかへ、得も言ひしらぬ景色なりけり、落ちくる瀧の音は神のうち給ふ鼓の如く、松吹く風は山姫の調べ給へる琴の音か、あな面白や、おもしろきに、涼しき松風に秋を吹かせ、ひごろの苦しさも打忘れつゝ、時をうつしけるほどに、夕を知らする鳥の聲に驚かされて立ち歸らんとすれば、思ひもよらぬ山の端に、月いと涼しう出でゝ、又一しほの興を添へ、なかしきけしきに、いとあかれど、女の身なれば心のみこゝにのこして、月の光をしるべに家には歸りぬ。

輕部蕗子

此頃の暑さ、朝よりはたゞきいと堪へがたく、西なる小山の木間より、風吹きくる折、日頃親しき友人三たり來りしに付、いざさて、湯あみし衣きかへなどし、ほど近き、山にものしつ、そこともなく遊びありく樂しさ、一きはになん、上々の天氣なるに、思へば今日こそ祭日なれ、此結構の吉日に、此結構の快晴を得て、此結構の場所を見るこそ、そも〱何の幸ひぞやと、各々語りつゝ、終に西山へ着きぬ、見る目なかしき、たて石と云ふ所にて、暫やすらひ、それより右に折れて、險しき路をよちのぼれば、里人は初音の瀧とも、二香の瀧とも呼びなすも有り、青々と緑したる松原は、老たるあり若きあり、松に吹きくる風は、天津御神の調べ給ふ琴の音か、いざ〱安井氏よ舞ひ給へと、人々は手を打ちさわぎ、前なる青井川を見れば、ひら〱と白帆あげて行き交ふもあり、釣

舟のこぎつれて歸り來るも有り、此の面白さ更に飽きず。とかくする内、早や日は傾むきぬ、夜に入らぬまに歸らずば、たらちねの君の如何に思ふらんと、惜くも急ぎ立ちさりつれど、心はあとに殘りてなん。

佐々有鄰子

山にあそぶは、春もよけれど秋山の紅葉のかげに、栗拾ひ茸狩くらし。うきことをさけといふものくみかはし、へだてなき友だちうちつどひて、大和歌や、からことかきてけし、君子は山を樂むこゝろをみがきて、武士の弓はり月のかけふむことをもわすれはてゝ、まつ山のこゑをたよりに、わがやにかへり來て、今日の遊びのみやびにおもしろかりしことを、燈のもとの机によりそひ、硯の海をあさりてしるす。

谷口ふさ子

秋は名のみ立つにかあらん、殘るあつさのくるしければ、二人三人友どちそゝのかして、近きあたりの山に涼まんとて物す、五六丁ばかりわくる程は、おどろのみしげりあひて、照りつく日影のかさもとほせで、かくれん陰もあらざれば、なか〳〵に家にありなんこそ勝りつらめと思ひしかどやゝ行くまゝに、景色そひて、つゞらなりなるを、道の右左の草村に立ちまじれる萩女郎花などの花はまだしけれど、枝のさまなど、異草に似ず、なまめきたるぞ、いとめづらしき、こゝかしことあこがるゝに、何となう心地すが〳〵しう覺ゆるは、山路も深うなりぬるなるべし、をりしも、さと吹く風の音して、うちなびく雲のたえまより、老いたる若き松の木共あらはれ出でたる山鼻のたむかしきに、そこにとて至りみれば、高く低く立ちかさなりて、千世のこけ蒸むしたる岩ほの間より、白う落ちくる瀧の水は、さながら糸をかけたるやうにて、結ばぬ先に秋の涼しさをぞ覺ゆる、されば名のみと思ひし秋も、こゝには、立ちけりと、打ち驚かれてなん。

湊谷いく子

秋たてどいまだ暑さのたへがたければ、家の子どもを打ちつれて、例の山にさけぬ、苦しさをねんじつゝわけ登るに、路のこなたのま葛も、猶夏のけしきにたちかへり、こなたの瀬も、まだほにいでず、やがて至りぬれば、千枝にしげれる老松は、日かげをさへて、われらをまちがほに、岩ほのひまよりわき出づる泉は、音も涼しくさゝらぎ流る、いつしか苦しさも忘られぬれば、あるは峰にのぼりて、四方のけしきをながめ、あるは谷川のきしにたりて、魚のあそぶを見、つかれては松が根にこしうちかけて書をよみ、又岩井に袖ひぢてむすぶに、松風もみもひも、更に昨日に似ず寒うなりて、同じ世界としも覺ねぞなん、かくうかれあそぶ程に、ひぐらしのなくなべに、日はくれければ、山のかげとは思ふものから、かへりのいそがれて、うすぎりをわけつゝなん。

東盥早苗子

うるさかりしひぐらしのこゑも、今はうちけされて、只見るこの大空より落ちくる千丈の瀧、とゞろく音は山ゝに岩くだくる如く、すさましき水の勢、そよ〳〵とあたりの梢の動くは、ひそめるみつちやはひのぼるらむと思ふばかりなり、たわやめの身の、如何にして、かゝる淋しき家に來けむ、げにげになき遊びがなとおもひつゝ、さすがに友數多の勢に力を得て、こゝかしこと、岩の上とびありき、なかれに足あらひなどするほどに、友のすこしはなれて、とく來よ〳〵とさわぐに、はひよれば、山桃と曰ふもゝの、枝もたわゝにいく木となくなりたり。こはいがたきたまものよと、力を併せて木をゆれば、はら〳〵とおつること、つぶての如し、夏を他なる遊びの樂しさに、かゝる家づとさへ袖にみつれば、うれしさかぎりなくて、われしがずほゝと打ちゑめばあやしやこは、うたゝねのゆめにして、今しもふと目さめぬ。身ははし近き風鈴の下にふし、なげし女がん、空しく風のひらくに任せたり、あなまさなき、人もやみつらむとおもふに、いとはづかしうて、汗もしとゞにながる、さるにても、このくるしさはいづくにて忘れむ、彼のおほろげなりし深山あそびは、更に尋ねいでゝおもひ立たむもたほつかなのわざなるを。

根岸里子

照りはたゝく夏の日中、身も心も倦みはてゝ、握くる手さへものうく、たゞひとしきりの涼風なん、ひたすらに待れける。折しもあれ清子の君

おとつれ玉ひていかでけふは山遊びにおぼし立たれよ、妾其の心して來侍りとの玉ひぬ、されど、靜かに身を休めてさへなほ堪へ得ぬこの暑き日に、山遊びとはふさはしからぬことにといへば、中々に然らず、この暑さを外にする涼風の住み家こそあれ、いざくくと、せちに勸められぬ、さらばとて、一本の洋傘と、一面の扇とを頼みとして出で立ちぬ、妾此地に移り住みて、日未だ淺くして、地理知るべくもあられねば、友の誘ふまにまに從ひ行きぬ、道すがらの暑さはいはでもしるし、木陰によりて、風を入れ、澤邊に下り立ちて水を掬ひ、やがて稻葉そよぐ廣き田面に出で、畔道を右に左に廻りつゝ、かくて程もなう山邊に行き至りぬ、こゝより岑の上を望めば、松杉樫さては楓など、皆一とつ緣に茂りあひてぞある、友のいはく、こは愛宕の山とて、愛宕の神を頂きに祭れるなり、常には麓よりほの見えし社も、梢茂れる此頃は、柴人の通ふ道とへわかずなりぬ、いざわけ入らんとて、先に立ちて細道をたどり、又は階段様のものを攀ぢ、やがて登り着きぬ、見れば頂きは思ひしよりも廣く、眞中にいとふりたる社の建てるありて、石の鳥居もいかめしく立ち並びぬ、しばし社前にぬかづきて、椽のほとりに腰打かくれば、一陣の涼風おろしがほにもおとつれければ、思はず心地よやとさけびぬるもうべなりや、千もとの木蔭は四面を圍みて、消えあへぬ綠の樹露は、三伏の暑氣を入れしめず、始めて身のよみがへりし心地ぞする、るはほゝゑみて、いかに値なき遊びにはあるまじとて笑ふ、げにこそと、語りあひつゝ、かなたこなたをそゞろあるけば、百合薊瞿麥など、おのがむきむきにほひぬるもをかし、なほ山陰りに下り行けば、大なる櫻の木ありて、その岩根より、淸水涌き出でにけり、立ち寄れば、むすばぬさきに涼しさ覺えければ、あはれ夏知らぬ秋山と名付けなんなど戯れけり、しばしやすらひて見渡せば、市の全部は殆んど眼下にありぬ、彼れは何町、かれは何の小路、かれは何の建物など語り合ふ頃しもあれ、汽笛の一聲に驚けば、今しも三時四拾分着の列車は、停車場へと近つきぬ、着けば、出づる人入る人、蟻の這ふが如く、おもしろさたとへんやうなし、やがて汽車は烟りをあとに出で立ちぬ、いざ吾等もと、夏草ふみしだきつゝ下り行きて、元來し麓に出でぬ、友はなほ樂しみの殘るあり、いざと道を右方に取りぬ、從ひ行けば、半町程にして、とある寺の前に出でぬ、この寺守は、友の知れる人とて、中庭なる池の道をあないしぬ、見れば、茂りあひて、月やどるべきひまもなく、玉を欺く白露に影をうつして咲き揃ひけり、あはれ此池のながめなくば、けふの山遊びも、物足らざりしをと、語ひつゝ、かにかくぞ物語りて、夕暮近く、おのが宿にぞ着きにける。

山内蔦子

空近う暑をかこつ蟬の聲も、此頃は漸くうせて、秋に通ふ秋風のいと涼しきをおぼえ、誠にくらしよき時節とはなりぬ、思ふに付ても四方山の景色、何となう替り、木々の梢も、やゝ色付きぬ、折柄心合ひたる友人の音なひ給ひて、今しも事業の休みなれば、久々にて、散歩がてら近き山に遊ばんと誘ふまゝに、小倉山に歩を進めしに、なつかしや、萩女郎花今を盛りと咲きみだれたるも一しほ興事にて、我等を悦ばしめ、共に手折我家つとにせんものと、草ふみわけて、奥ふかく、一日をすごしぬ、永からぬ秋の日のくれやすく、夕日も早名殘すくなくなりしをなげきて、四方を顧れば、珍らしくも、二葉三葉照初めし紅葉の、殊更なつかしく、余念もなき折からに、我等の歸を促すにや、入合告ぐる無情のかね、あかぬながめに心を殘して歸りたれば、今もなほま のあたりにうかびて消えやらぬを、拙なき筆にうつしてかくなむ。

廣田さめ子

春秋はいふもさらなり、へたてなき友と、夏山に遊ふも、又なくたのしかりけり、しげり合たる青葉より、露さへこぼるばかりの木陰に立ちより、うちとけて物語し、苔むす岩ほにこし打かけ、あるはわきかへる泉に口そゝき、またきに秋風かよふ梢に、せみの聲なときゝつゝ、

今日もまた山めくりつゝ日くらしの
なくこゑきくもたのしかりける

林久子

木々の梢もいまた色つき初ねば、まつ近きあたりの山草の花みんとて、

二三人の友と、もにわけ入りぬ、昨日までかしましかりし蟬の聲は、いつしかたえて、きゝなれぬ鳥の聲なと聞ゆ。野へのさはやうかはりて、あはれふかし。背葉ながらも、猶楓の陰闇しく、柴折りしきて、かたなさくちすさひ、今日の家つとにとて、萩すゝきなと手折りつゝ、こゝかしこ、思ひ〳〵に遊ひありき、紅葉のさかりには、必すなと契るもたのし。おのれのみは、腰折たゝ出でぬこそやさしけれ、はや夕日の山のはにかたむきたるにほひに、梢の色つきたる心地のせらるゝもをかし。くれはてぬ内より、すゝ虫松虫なとの、聲ふり立てゝ鳴き出でたる、さり〳〵ふりすてがたうなん。

池田さく子

空にはなびける雲もなく、梢にはよろげる風もなし、けふの暑をいかにしてかはしのぐべきと、汗かきつゝなげくなりしも、したしき友どちさひきたりて、共にすゞしき木かげにあそびて、このあつさをわすれまほし、いざや〳〵と、そゝのかさるゝまゝに、うちつれて西の方へとたちいでぬ、ゆくこと五六町ばかりにして、不動山とよべるやまのふもとにつきけり、みちすがらのあつかりしことゝつかれとをやすめんとて、そこに大きなる楠の木二本三本こんもりとしげれるを幸ひ、しばしやすらひぬそよ〳〵とふく風は、ひきもきらず肌をおそひ、その心地よさいはん方なし今ははやつかれもあつさもうせければ、頂へとてのぼりはじめけり、もとより急なる石坂のことゝて、たやすくはえのぼられず、三四段のぼりては一いきし、八九段よぢては一やすみし、やう〳〵のぼりつめにき、段のかずはおよそ三百あまりもありつらんとおぼえし此山は、根岸村の鎭守なる不動尊の鎭坐ましますみ山にて、さのみ高からねど、海岸にそびえてながめ、いとよく木立ふかゝれど、瀧さへかゝりて、なにとなうゆかしく、すゞしきところなりけり、まづ不動尊のみまへにぬかづき、そのたふときをあふぎ、ひゞきをしるべに、たきのほとりにいでぬ、うちみやるに、龍の口のごと刻める石べより、いきほひはげしう、白みなぎへておつるさまは、白龍の天よりくだるごとく、たきつぼにあたりてよもにちるさまは、きりのごとく、ゆきのごとくすゞろに冬來し心地せられしこそ快けれ。友なる人の、

さらぬだにあつさわするゝ不動山
　音もすゞしく瀧かゝるなり
くろがねもとくてふなつのあつさにも
　涼しかりけりたきのほとりは

と詠ければわらはもとて、しばしためらふなりしも、かたはらなる石に、「白龍のたき」と刻めるがみえければ、

白龍やけふのあつさをのみぬらし
　なつなほ秋のこゝちせらるゝ

いつ來にけん、うしろにありしひとの、つたなきことよとひとりごちぬるをきゝしも、いとはづかしきことにこそ、

かくて、また不動尊のみまへに來りて、南の方をみおろすに、淸澄玻璃鏡のごとき屛風浦は、波いとしづかに、かたほあげしいさり舟、まほあげし通ひぶね、幾百となく、あなたこなたにゆきつかへりつするさま、ねもいはれず、

杉田富岡、および三浦郡の山亦岡は、高う低う長う短う、犬のごとく猿のごとく、くつ〳〵の形をなして、わらはを迎ふるにさもにたるおもゝちせるこそ、ゑだくみのゑもおよばざらまし、況いて白帆綠山かげを水のおもにうつしつゝあるにおいてをや、

いひいでんことのはもなし根岸なる
　不動のみねのくしきながめは
しらぬ人心しあらば來てみよや
　屛風が浦のなつのけしきを

と、おのれいひいづれば、友なる人、前のはつゆわからず、後のはすこしなほしなば歌とやならん、とは云へ、みなよくはあらじとおもふなりといはれしこそはづかしけれど、亦ありがたけれ。

かゝるほどに、日はいつしか西の山に入り、まどかなる月は早くもかゞやきいでぬ。あな月よと、ふたりなぎり！ごとくいひつゝ、うちむかへば、今までみねしよものけしきは、またくうちかはりて、すゞしさいよゝまさりけるこそいみじけれ。

涼しさをつゝみてかへる由もがな
　　屏風が浦のなつのよの月

こはいかにといふに友なるひと、いさあやしそは本居ぬしの浦夏つきの四の句をかへしにすぎずかしこわらふもなか〳〵興ありけり
興はつきねどながめはあかねど夜やふけぬらんとてかへりぢにつきぬ。

錦織幸子

たま〳〵はたち迷ふ浮世の塵をよそにして、松風しづかなる山々に遊ぶもいとたのし、たまあへる友と袂つらねて、春は尾上の櫻花、秋はふもとの萩すゝきなどめではやしつゝ、落ち來る花を時ならぬ吹雪とうたい、亂るゝ露を久方の月の桂のしづくとたゝへぬるなど、げに〳〵いひしらぬたのしみなりかし、分きてなつかしきは霞みかくれに萠え初めて、人まれきがほなる峯の早蕨、摘むに余念なく、菅の根の長き春日も暮るゝをわすれ、扨はまた初霜しろき紅葉の山に錦をながめ、其澤なる山々にさびしき秋をあくがれくらすなど、げにうきふし繁き世の中の折々の心やりもたのしきや。

村尾郁子

一日友二人三人打つれ、近き頃名高き、小豆島のかみかけ山に遊びけり。此山、おしなべてもみぢと云ふにはあられども、村々と染みたるもあれば、又こきもあり、もとより、山も谷もいとけしきよろしくて、いはむ方なし。ここかしこの岩のかけ木かげにやすらひ、歌をよみなどして、日のくるゝもしらず、いとおもしろき遊をしてなむ。

目黒佐喜子

世にさま〴〵の遊びはあれど、足引の山遊びばかり樂しきはあらじかし。春は霞の衣着くる頃、近き邊りの友そゝのかしたて、あさひこあふぐ山のあたりさして行けば、春風にまづ匂ひ來る山櫻、峯も尾上もさながら雲のたなびくかとあやまたれ、麓の畑の菜の花は、黄金敷けるかとうたがはる。鶯の聲思ひの儘に耳にして、山田の畔のつく〴〵し、澤邊の根芹、谷陰の早蕨など、有るに任せて摘めば、籠も溢るばかりなり。やがて、もて來し割籠開く時の樂しさよ。かくて終日遊び暮しぬれば、菅の根の永き日影も、たゞ短くぞおもほゆる、さて歸るさに、路のべの櫻一枝、家づとにとて、手折り來れば、いかに惜しさや、胡蝶の追ひ來るもをかし。秋は龍田姫の錦織りなす頃、露にぬれつゝ、外山に登れば、見渡す限り、たゞ紅の雲たなびきて、衣手そよぐ風寒し。むら立てる松の木の間に分け入りて、落葉がくれに薫れる茸、たづね當てし時の嬉しさは、いひしらぬものになん。また山がつが採り殘しける栗の實の、笑みて落ち散れるを、かき集めなどして、興盡きざるに、はや西山に傾く日影恨めしく、麓の寺に入相の鐘打ひゞきて、歸るを促し顏なり。今はとて、九十九折の山路を急ぎ走せ下りつゝ、ふりさけ見れば、峰の浮雲俄にさわぎ初めて、山神の社近う成りし頃、むらさめさと落し來るに、あわてふためき、祠に走せ入りて、しばし笠宿りしつゝ、霽るゝを待ちて、木々の梢の入り日に映るをながめながら歸るなんど、塵の中に埋もれて住む都人の、夢にだも得知らぬ樂みになむ。

北原季子

此ふるさとにかへりきしより、今はさしてとふ人もなき、つれ〴〵なるまゝ、只歌に日を暮すばかりにて、今ははや、都の友の戀しくなりて、寫眞など取出しつゝある折しも、覺えあるこゑの聞ゆるは、誰ならんとまづ飛ゆき見れば、こはいかに、かへらんといひし友のかへりきしとは、今は嬉しさ昔の樂もたえはてゝいざ是よりは、となりなる山に遊びゆかんと、やがて三丁ばかりもたどりゆけば、山ふもとにぞありける、久しく都に住みなれし身の、ひとしほ嬉しく、そこはかとなく見上ぐれば、げに秋の七草とり〴〵に人まち顏に咲みだれたり、きり〴〵すの聲は、をちこちに聞えわたりて、えもいはれぬ景色、いでや友、今一坂登りゆき、ほのめく尾花たをらせ、遊ぶ足さへ覺えぬ迄に進み登りし頃は、みじかき日影の、はや西山に半はかくれてぞありける。あなうたて、今少しはやかりせば、衣手重く積取らんものをと、思ひつゝも、おのが家ゐの近ければとて心つよくもかへらんとは思はざりき、斯く樂しきにつけても都の友や師の君の、とみにしたはしくな

りて、そゞろに涙わきいで虫さへあはれに、擊ふりたてゝ、折しも厂の一こゑ名のりゆきしに、ふさ見上ければ、いつしか夕月のかけなつかしう、吹くる風に涼しき松蟲のこゑさへそへられ、景色いふばかりなしあたかもよし、君よ詠み給はぬかさいへば、君にはいでけりくさて、

なりしもあれさす夕月に松蟲の
　心涼しくなりにけるかな

おのれも

このけしきみやこの友に見せばやな
　ゆくかりかれよこさつてなせよ

やがてようい さゝのひて十足あまりもおりゆきし頃に、はしためのむかへに逢ひてやうくわかやさにたちかへりし頃は、もち月のすみのぼりてぞありける。

夏夜　　高橋順子

ほさゝぎす鳴く音まつまに月ふけて
　はかなく明くるなつの夜半かな

夕立　　後藤よし子

端居してつきまち居れはやまの端を
　まづすゞしくも過ぐるゆふたち

待郭公　　高橋ちん子

ほさゝぎすまちて今宵もふかしけり
　いかてみやまを出てかてにする

断腸　　舟栞女史

すゑの松山すゑかけて、かはらじものさちぎりてし、
まことの草のうらかれて、あだしのゆめさなりにけり、
世の大かたのひさくは、いつはり多しさきゝしかご、
ふかくちぎりし彼のきみに、かくあらんさは知らざりき、
なげくまじさは思へごも、さすがにむかし忍び出で、

あつきなみだにそでしぼる、おもひよるくれるほごに、
かなしきゆめにうなされて、まごろまぬ夜のたほかるを、
つれなくなりしきみゆゑぞ、あはれやみなんいまさらに、
ひさをうらみてなにかせん、うらみくずの葉このまゝに、
いはずかたらずくちはてん、うき世のさまのつれなさを、
けふよりわれは知りにけり、三日月かげもいつしかに、
もちさうつらふひさこゝろ、けふよりこの世いさひけり、
みやまがくれのしづか家に、むかしのゆめなしのびなん、

七夕　　京都　東苑女史

あひそめし、時は知られど、ちぎりてし、世をしわかれど、昔より、いひ傳へけり。文月の、七日の夜は、彦ぼしさ、七夕姫さ、天の川、あふせにたちて、相さもに、つもる思をかたりもし、話されもすさ。そこをしも、世の風雅男は、うたによみ、文につゞりて、一年に、一度あふは、いかばかり、すくなかるらむ、いかばかり、戀くやあるらん、ひとゝせに、一度あふは、うべなく、おほくもあらし。然はあれご、その七夕よ、むかしより、今日になるまで、千萬の、年はふれども、いさゝかも、おいぬさはみねず、こさしより、行末かけて、いく千させ、月日經なむさも、さらくに、老いむさはきかじ。現身の、世の人こそは、あひそめて、三十ぢへぬれば、はゝぬけ、こしもまがりて、末遂に、命しぬなれ。年の内に、千度あふさもかくては、いかであくべき。夫なすら、うき世のせきは、たひまれく、へだつるものを、月日の照らさむかぎり、天地さ、さもに久しく、彦ほしさ、逢ふせ契りて、世の人に、いはれもする、そのゆふべ、あないさほしさ、誰か曰ふらむ。

雨後作

夕立は水かさますまでなかりしを
　にじのかけはしなにわたしけむ

伯爵副島種臣君題辭 ● 富田鐵之助君序文
文學士濱田健次郎君校閲 ● 岡勇次郎君著

訂正再版

日本米穀之將來 及米價變動の原因

全一冊 菊版二百六十頁 定價三十錢 郵税六錢 郵劵代用一割增

今や經濟界は極めて亂調を呈し邦民の一日も欠く可からざる米價は古今未曾有の高直を現はし尚益々昂騰其の止まる處を知らざらんとす今後如何なる邊に迄到る可きやは其道の者は勿論一般に講究すべき問題なり

本書は本邦米穀需用供給增減の理由價格の變動及び既に來りつゝある現象將に來らんとする現象等廣く世界の大勢より我國の情況に照し統計を示し類例を擧けて詳細反覆之を論辯したるものにして一讀自覺せしむるの良書なる事は本社の確に保證する處なり特に本社は本書の普く行き渉り聊か邦家に稗益あらん事を期し定價の如きは最も之を低廉に志尚は一時に十冊以上御求の時は特別を以て定價より一割減にて高需に可應候間續々御注文あらんことを

發行所 國光社
東京京橋區築地二丁目廿一番地（電話本局八十八）

稟告

一本社出版物御購求の方は代價は必ず前金御拂込可被下候領金の順序に依り送本可致候

一郵便爲替にて御送金の節は拂渡局は東京新富町郵便取扱所にして受取人は東京々橋區築地二丁目國光社宛に御取組可被下候又通運會社早達便にて御送金の節は府下配達賃共必ず御拂濟可被下候

一郵便切手を以て代金に換用せらるゝ時は一割增に申受候

一本社へ御問合せの節は必返信料御添附可被下候然らされは返信不仕候

一書籍雜誌御買上の方に對し別に代金受取證を差出し不申候間御注文品到着を以て入金の證と御認め被下度若領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附可被下候

一本社に御文通相成方は住處姓名等可成明瞭に御認め被下度候然らされは往々行違を生じ相互の不便免れ難く候

一未納稅の來書は一切受取不申候

發行所

東京京橋區築地二丁目二十一番地

(電話番號本局八八)

國光社

孝明天皇御遺德

先帝御製（東久世伯染筆）挿入　全一冊定價金二十五錢　郵稅金四錢

恭て按ずるに先朝　孝明天皇は曠古の明君なり不幸にして**事蹟**尙湮晦に屬し**聖德**未だ外に露れず是れ頗る憾むべしと爲す此書は宸翰秘書及び先朝に奉仕せし雲客月卿諸官人の**實歷談**に依り以て汎く**逸事遺聞**を網羅したるものにして庶幾くは聖德の萬一を發揮し奉ることを得たりと信ず

今此書の一班を示せむ先づ**御一代**の章を掲げ編年體を以て降誕より崩御に至るまでの事迹を示し**聰明**の章に於て　先皇の英明絕倫なるを概說し**夙成**の章は御幼時の御言行を示し**慷慨**の上編は醜夷掃攘の事、其下編は皇權回復の事に痛く叡慮を惱されたる事蹟を敍し**孤憤**の章は獨り至尊をして社稷を憂へしむの實情を寫す**撫御**は識見卓出の實際を明にし**豁達**は言路洞開の聖德を輝かし**忍耐**は襟裡荒廢供御菲薄にして時に或は十兩以下の御座用金に窮し給へる等の例證を示し**仁愛**は惻隱仁恕の御心甚た厚かりしを明にす、而して前數章に配置する能はさりし逸事遺聞は總て之を**雜事**の一章に網羅し以て　先帝の聖德を頌し奉る

東京京橋區築地二丁目廿一番地

發行所　**國光社**

東久世伯○勝伯○松方伯○品川子○野村子○渡邊文
○富田○金子○平田○川田氏等諸大題家字及ひ序子
品川子校閲●平田東助○平塚定次郎○武内常太郎○湯川寛吉共譯

第三版
盧氏商工經濟論

全二册

定價 上編一圓四十錢 下編一圓二十錢
郵便税 ●第四種 卅八錢 小包 十里迄九錢 百里迄十六錢 百里外卅二錢
郵便爲替（拂渡局）新富町

今や我が經濟は亂調の極に達し恐慌來々々の聲愈陰雲を重からしめんとす是れ專ら我邦人經濟的知識の幼稚なるに職由せずんばあらず今の時に於て之か大に救濟整理の道を講せずんば終に其歸する所を知らざるなり本社茲に本書の第三版を發行し江湖に紹介する所以豈偶然ならんや本書記事精確にして理義明覈なる世已に定評あり誠に國民一日も欠く可からざる良書なり綜錯なる難問題も一讀瞭然一家の經營を完し國家經濟の基礎を確立して今日の急に應するに足るの長計大策を得る所以のもの獨り此書に在らむか

發行所 國光社
東京京橋區築地二丁目廿一番地
（電話番號本局八八）

大賣捌 ●東京○文海堂○嵩山房○東京堂●大坂○吉岡

●定期刊行雜誌之部

國光
每月一回
十五日發行

定價	廣告料
一冊 金十三錢 ●六冊(半ヶ年分)金七十五錢 ●十二冊(一ヶ年分)金一圓五十錢	五號活字二十七字詰 一行 金二十錢
郵税一冊に付金一錢五厘	

女鑑
每月二回
五日廿日發行

定價	廣告料
一冊 金十錢 ●六冊(三ヶ月分)金五十五錢 ●十二冊(半ヶ年分)金一圓	五號活字二十三字詰 一行 金二十錢
全國無遞送料	

國光叢誌
每月一回
一日發行

定價	廣告料
一冊 金五錢五厘 ●六冊(半ヶ年分)金三十錢 ●十二冊(一ヶ年分)金六十錢	五號活字二十三字詰 一行 金二十錢
全國無遞送料	

本町

裁縫女縫學校（生徒募集）廣告

一 教授要目

○裁縫　○女禮　○習字　○毛筆畫　○茶道　○活花　○英漢數學

一 修業期

○普通科　十八ヶ月　○高等科　六ヶ月

一 授業科

○一科目　普通科　一金五拾錢　高等科　金壹圓

但二科目以上兼修の時は一科目毎に減額すべし

一 談話會

○隔月一回諸科に付て名聲ある諸先生に乞ひて、其道の心得になるべき談話會を開き、生徒及び其母姉及保證人の傍聽を許すべし

一 生徒年齢

○十二歳以上の女子にして高等小學二學年の科程を修めたる者、又是と同等の學力ある者を入學せしむ

○くはしくは本校に附て問合さるべし

東京市日本橋區本町
一丁目十二番地

本町 女子裁縫學校

幹事

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送の事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊前金(三ヶ月分)	五十五錢	
十二冊前金(半年分)	壹圓	
全國無遞送料		

明治三十一年八月十九日印刷
同年八月二十日發行

編輯兼發行人 東京京橋區築地二丁目二十一番地 川崎直衞

印刷人 東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地 竝木亘雄

發行所 東京京橋區築地二丁目二十一番地 (電話番號本局八八) 國光社

(明治二十四年八月四日內務省許可)
(明治二十五年三月十一日第三種郵便物認可)